海外｛英獨兩帝の會見世論概觀
新潮｛トルストイの戰爭觀短評

中央公論

第十九年第八號

要目

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行　明治卅七年九月一日

出版廣告

故長與專齋先生遺著　全壹册既刊

香松私志

正價金四拾錢
郵税金四錢

洋裝菊判二百頁肖像筆蹟及塋域の寫眞入

本書は長與專齋翁の遺著にして曾て孝嗣醫學博士稱吉君が出版されしものなるか今回更に同君より其版權を寄附せられたるに依り當文庫より再版に附することゝなれり翁が終生本邦の醫務衞生の事に就て苦心焦慮以て其一生面を開き大に世を益せられたるは普ねく世人の知る所なり本書の名私志と云ふと雖も其實本邦の衞生小史と謂つへきなり且此再版には翁の肖像親筆及其塋域の一斑を併せ掲げたり希望の諸君は當文庫へ申込まるへし

但御申込の節は必らす前金御送付の事

東京市京橋區宗十郎町七番地
大日本私立衞生會內(電話新橋二七四)

長與衞生文庫

新刊廣告

福島縣立福島中學校教官　角田柳作氏譯　▼菊版總クロース美装本　紙數二百六十余頁

ヴント氏　西洋倫理學史

全壹册　定價金七十五錢

ウイルヘルム、ヴント氏は、獨乙の哲學界に於ける經驗學派の泰斗なり氏は常に實驗心理を基礎として自己の説を立て他人の説を評するが故に議論正確にして觀察緻密なり本書はヴント氏の倫理學中第二卷道德的世界觀の發達を譯したるもの譯者の之を選まれたるは哲學者としてのヴント氏が儕々たる獨乙哲學者中優に一頭地を拔けるが爲めのみに非ず本書の敍述簡にして要を得たるを以てなり。初學の人、是に據らば容易に古今倫理學説の大要を知るを得べく教授の任に當れる人、是に資らば、大綱を擧げて枝葉を示すこと決して難きに非ざるなり中等教科の參考書として教員檢定受驗用書として程度分量の適切なる亦本書の右に出づるもの無かるべし

京都帝國大學法科大學教授　法學博士仁保龜松氏新著　▼菊版總クロース美麗　紙數五百有餘頁

國民教育　法制通論

全壹册　定價金一圓

我國の法律制度を通了することは立憲法治の美政に浴する我臣民の急務にして權利を尊び義務を重んずる國民生活の要訣たり曩に文部省が法制の教科を以て國民教育の科目中に加へたるは誠に其當を得たるものにして我國民たるものは自分職業の如何を問はず自ら進みて法制の大要を通了せざるべからずと雖今尚我國法制の全體に亘りて適切の説明を與へたる書籍の存せざるとは國民教育上の一恨事とす本書の著者は夙に此欠點に注意し概博なる知識と明晰なる文章とによりて本書を著述し以て國民教育の便に供し併せて法律初學者の研究に資せんとす蓋し著者は法科大學に於て廣く法律全體の原理を講究する法理學の教授を擔當せらるゝものなれば法制通論を著述するに付き最も適當の學者たることは世人と共に是認する所にして本書の洽く世に行はれんことは國民教育の必要上弊社の切望に堪へざる所なり

發兌元　東京日本橋區本町　金港堂書籍株式會社

中央公論

本號目次



クレムリン王宮に於ける那翁

ベトロパヴロスク號の沈沒と共に溺死したる不幸なる

露國畵伯ヴエレスチヤギン氏筆

中央公論

第十九年
第八號



排未亡人論

一昨月の頃なりしと記憶す、一國の智識と品格とを代表せる貴衆兩院議員、及新聞記者等は、滿州丸に乘じ、悠々緩々として、觀戰に出でたりしを、而して是等の紳士諸君は、船中の無聊を慰せんが爲に、戰死者の未亡人に就て、大に論議を試みられたりといふ、當時吾人之を耳にし、杞然として、我紳士諸君が出征軍人の境遇を察せざる輕浮の行動を嘆じたり、後、之にヒントを得たる某新報は、戰死者の妻女と題して、未だ子女を有せざる若婦人が、夫の戰死に遭ふて、自から髻を斷つが如きは、奬勵すべきに非ず、と例の一流の社會觀を發表せるより、不謹愼なる言論社會は、好題目を得たりとして、之に謳歌する者多く、遂に萬朝報の一記者をして、未亡人再婚不可說を稱へしむるに至れり。

吾人は爰に再婚の可否を論ぜんと欲する者にあらず、雖然、百度以上の炎天の下に、死を賭して砲火に從へる出征軍人にして、斯くの如き言論が、其の自己の後援と賴み、國民を代表すと稱する操觚者の間に行はるゝと聞かば、果して如何なる感を懷くべき乎、渠等軍人は、生命を國家に捧げて戰爭に從へる者、死後如何の如きは、固より顧みる所にあらざるべしと雖も、漠々たる原野に天幕を張り、晝間の疲勞を睡眠に慰する時、恐くは夢は馳せて、家鄕の妻子と共に在る可し、看よ、日本歷史の花として、一世の俠たる不識庵謙信の如きさへ、霜軍營に充ち、秋氣淸らかなる夜、越山

併せ得たる壯快の時に於て、尙且、「遮莫家郷憶遠征」を謡へるにあらずや、是れ人間自然の情也、即ち我軍人の能く勇强なるも、亦た此の花も實もある優しき心情の、裡に秘める者あるが故と知らずや、然り我軍人が露兵に勝る、百を以て數ふべしと雖も、朋友に義に、妻子に優なる――朝日に匂ふ山櫻の風情を備へるもの、亦其の一たらずんばあらず、彼の軍神廣瀬中佐が、一世を擧げて賛美の的と爲れるも、必竟三たび杉野兵曹を尋ねたる心情の床しきものありしが故のみ。

然るに無遠慮なる言論の徒が、出征軍人が實に右の如き者あるを覺らず、僅に戰爭の一段を經たる初期に於て、渠等軍人が、日夜念頭を離れざる妻女の身上に對して、論議を縱にす、妄も亦甚しきにあらずや。

爰に操觚者の言論が、出征軍人に與ふる影響の一例として、上村艦隊の事實を以てせんに、上村艦隊が、敵艦を追撃して、無効と爲りしや、天下の攻撃、一に上村艦隊に集り、甚しきは罵詈讒謗を極むる者あるに至る、而して當時此の無意味なる言論が、同艦隊の人士に如何なる感情を與へたりしぞ、左に同艦隊中機關士某氏の書簡を擧ぐれは

昨夜我艦は海峽の哨艦と爲り申候正午十二時まて百三度の熱度ある機關室に四時間の當直を了りし小生が身體の汗を淸めたる後先づ凉を納れんと欲して上甲板に上り候處此時恰も驟雨歇み何となく吾人を嘲るかの如き弦月の雲間より漏るゝ光りの下喫煙椅子に長大息をなし居る二名の中尉あり、一名は小生の近寄るを見て慨然たる音調にて「中機關士今夜は敵は來ないかネ」と小生は「敵に出合ふか否は僕は知らないが全速力は何時でも出すとは出來る併し如何ほど氣張つても計畫通りの外は餘計に出すとは出來んよソレ以上は國民の力でなければ出ない」と答へたり他の中尉は「機關士の言葉も尤もだ而うして若し敵艦隊の來るとあらば敵は假し水雷艇を伴ふとも濃霧でも暗夜でも我艦長は斷然敵に對して突貫せんとを望む、突貫の危險にして大

局に不利なるは僕固より之を知ると雖も斯くすれは僕は早く死んで此の不愉快なる浮世を遠ざかることが出來てよいと大聲に語りたり、此時小生等が居ることを少しも知らざりし砲術長は突然後より溫言以て小生等共を戒めて曰く「足下等は假令戯言なりとも斯る不謹愼なる言を吐くは甚だ不可なり吾人は　陛下の軍人にあらずや宜しく忍ぶべからざるを忍ばざるべからず奈何ぞ斯る不心得の念を起こして濟むべきぞと一同兩眼に涙を浮べて默然之を久しく致候此頃一二の外は新聞を見るも嫌に相成候是一方には事上村將軍の過失にあらずと論じながら他のページには極めて陋劣なる攻擊的詩歌を連載して憚らざるもの尙多ければ好んで腹立の藥を服用するにも及ばず候へばなり……小生は次回の戰鬪には必らず戰沒を期し申候云々。

新聞紙の言論が、出征軍人の感情に與ふる者、實に斯くの如き者あり、即ち渠等出征軍人は、新聞紙の爲に、「敵は好し水雷艇を伴ふとも、濃霧でも、暗夜でも、斷然突貫せん」と自拋自棄ならしむ、加之、早く死んで此の不愉快なる浮世を遠かることができてよい、といふに至りては、宛然婦女子の言にして、意思の强固を以て任ずる丈夫兒の言とも思はれず、然かも事實は、斯くの如き語を敢てして、憚らざるもの、一に操觚者の不謹愼なるに之れ由る。

事や、聊か異る者ありと雖も、其の出征軍人に與ふる心理的消息に至りては、未亡人論の如き、亦敢て之と異ることなし、唯、彼は其の言論の過れる者あるを以て、昂然、其の憤悶を發表し、そは柔弱なるべく思はるゝ婦女子に關するを以て、深く胸底に秘し露はさゞるのみ、其の心情に苦痛を與ふるもの、之を外部に示し得ざる丈け其れ丈け寧ろ大なる者あらん、世の言論の徒、其の斯くの如き者あるを察せず、出征軍人の前に到達する新聞紙に於て、珍らしくもなき未亡人論を喋々す、吾人は何んの意たるやを解する能はざる也。

再言す、吾人は再婚の可否に就きては、別に說あり、然れ共今日斯くの如き言論を出だして、出征軍人の心情を痛むるを欲せず、唯、世の操觚者に望むは、今日の戰爭は、今古未曾有の、社會の有らゆる眞面目なる中の最も眞面目なる大事業なるとを思ひ、更に出征軍人が生死の途に出入しつゝあるを眸裡に映じて、今少しく心を眞劍に、眞面目なるべし、と警戒して筆を擱くべし。

武士道と今後の教育

法學博士　戸水寛人

一　武士道の發達

武士道といふものは封建制度と共に盛んになつたものであるが、溯りて其源を尋ぬれば、源平時代から起りかけて居たものゝ如く思はるゝのである。封建制度といへば源頼朝が鎌倉に幕府を開いた時に初まつたてとは誰しも知つて居ることとてあるが、其以前源平兩家が互に鎬を削つて居た頃からそろ／＼武士道の起りかけたことは一々例證を擧ぐるも管々しい位で、當時の歴史を一讀すれば直ぐにわかることとてある。頼朝が幕府を開いた後は武士道が連綿として續いて今日まで絶えなかつた事はいふまでもないが、然し私の考では德川氏の初めになつて武士道は少しく衰へて居りはしまいかと思ふのである。何故ならば德川氏になつてからは人を殺すに極めて隱險な手段方法が行はれたのである、例へば加藤清正が毒殺せられたといふ風說があり、又池田家などでも其お相伴で毒殺になつたものがあるといふ話てある。今日德川の味方でも他日敵となりはしまいかといふ疑のあるものは大抵毒殺になつたといふ事じやが、其眞僞はわからぬとしても、兎に角斯の如き風說が傳へられ、又多少信じられて居るのを見ると、德川氏になつてから武士道が少しく衰へたといふても差支はあるまいと思ふ。源平時代の如く人間が素朴の氣に富んで居た時分は、どうしても武士道も亦盛んであつたのてある。然し封建政治を長く維持せんとするには必ず武士道の隆盛を計らざるべからざる譯てあるから、德川氏が天下を一統してからも心あるものは皆武士道を重んじ、其奬勵に努めたことは明かなる事實である。

明治維新になつて士族平民の區別を廢してから、よし

名義は存しても實際の區別がなくなつてから、從來士族の專有物の如き觀があつた所の武士道は、日本人民一般の所有物となつて、其思想は日本人民全體に普及することゝなつた、封建時代でも、多少普通人民にまで武士道の傳はつて居た事は事實である、昔から澤山の俠客などが平民間に起り、又講釋師などが武士道の事蹟を民間に傳へたので、人民一般に武士道の何たるか位の事は知て居たのである。然し維新後士族平民の區別がなくなつた爲めに、尚一層直接に此思想の普及したことは確かなる事柄である、といはなければならぬ。

二　明治維新と武士道の普及

我日本では國體上人民總てが　皇室を尊敬して居るので　皇室は恰かも人民の本家本元であつて武士道の發揚に於ても其大本を統べ括つて居らるゝの姿である。日本が支那や露國と戰爭をしても日本の兵士は格別に勇氣をあらはすといふのも此理に外ならぬ。封建時代には平民を藉て兵士とするも格別仕事が出來ないけれども、封建が仆れて平民にも武士道の普及した曉からは其平民は元の士族と同じ地位に進んだのであつて、即ち封建の仆れた結果は人民が總て武士になつた姿になつたのである。又他の一方から見ますると、人民は總て　皇室を大切にするから日本兵士の強いのは勿論の事であるが、然し若し元の封建時代の如く武士道が一般に普及せざる時に、支那や露國と戰ふても今日程の成効は到底出來まいと思ふ。假りに武器が今日程精巧であるとするも到底成効はしなかつたと思ふ、何故といふと封建時代には士族はもとより武士道を守て居るから戰には強いかも知れぬが其數は至て少く、數の多い方の平民は武士道を守て居ないによつて今日程の成効はない事は確かである。明治維新は歷史上餘程奇妙な結果を來たしたのである。一體封建が仆るゝと同時に武士道が廢たるべき情勢であるのに却て其れが武士道普及の基となつたので、日本の爲めには實に非常なる幸福であつたといはなければならぬ。

三　武士道の將來

けれども武士道は封建を遠かるに從て多少其度合が薄くなる。一人〳〵に就ていふと源平時代の如く一騎打の時代に發揚し易くして德川氏の如く隊伍を組んで戰ふ時には何時の間にか其度合が薄くなつて居るので

ある。封建が仆れた爲めに武士道は日本中に普及したとはいふもの丶、一人〳〵についていへば武士道のはげしさは些か減じて居るのである、又今後益々薄くなる傾があると思ふ。若し武士道が減じたならば日本は外國と戰ふても今日の如く強く、今日の如く大なる成効をあらはすことは出來ないと思ふ。であるから若し日本を強くせんと思はゞ是非共武士道の養成に注目しなければならぬ。日本の政治家の中には甚しく武士道の普及や武士的敎育を罵る人がある。どふいうて罵るかといふに、君の馬前に討死するなどいふ事は昔の事てあつて今日に於ては時勢後れの考てある、丁度孝子が親の敵討をしたのは昔の事てあつて今日には法律があつて惡人を罰するから其用がないと同じ事だ、若しあまりに敵討などを敎へ過ぎると、中には私も一度親の敵討をして見たいから親が殺されて呉るればよいがなどゝいふ不了見のものが出ぬとも限らぬといふて笑ふた。結局其政治家の考では日本で道德の修養を計るには武士道を道德の中心にせずして西洋風の道德を敎へた方がよいとの考である。けれども其れは大いに間違た考てあるといはなければならぬ。日露戰爭に於て艦隊の方て旅順を閉塞する時其志願者は澤山あつたといふ事てある。新聞に書いた所を見れば志願者二千といふのであるが實際はなか〳〵二千所ではない艦隊の人悉く志願する考になつたといふ事てある。司令長官は衆人の希望を悉く滿たす譯にゆかぬから其幾分をして閉塞に從事せしめたのだ。其閉塞に向つた人間は皆武士道に身を堅めた人てあるから立派に船を沈めて來たのみならず、あの雨の如く打出す彈丸の中に居て大膽にもあそこの水の深淺を測量して來たといふ事てある。第三の閉塞隊は始めて目的を達したのであるが其前の閉塞隊が充分に測量して來た結果、第三の成効を見得たのだ。君の馬前に討死するのを笑ふのは大いに間違つた事て此閉塞の事などは全く馬前で討死すると同じ事だ。時勢が違つて居るから武士道のあらはる丶形式は變つて居るが其精神に至つては毫も異ることがないのである。夫れ故に日本の國を強くせんと思はゞ道德の修養を計るにも、たゞ無事の時の道德のみでは足らぬ、矢張り武士道を加味して有事の時の道德も養成しなければならぬ。

今回の日露戰爭に於ては武士道が種々の形を以てあらはれたのであるから、此れ幸ひとして其事蹟を小學讀本に澤山に書きつけて、兒童の頭腦に武士道を染み

込ませ又其他の方法を以つて武士道の養成を計らなければならぬと思ふ。これは獨り教育界に身を委ぬる人のみならず、苟も今後の教育に就て少しく考のある人は誰しも注目して日本人一般に知らしむべき必要のあることゝ思ふのである。（八月十一日談話）

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に資せむことを期す前號には十頁に亘れる井上博士の▼時局より見たる武士道▲あり更に號を逐うて諸大家の卓見を紹介せむとす

新國民の自覺を促す

江原素六

戰へば必ず勝たん

私は出來得る限りは戰爭をしたくないと思ふたのです、何故なれば國內の事と違つて外國との戰爭は是非共勝たなければならぬのである。國內の事なら負けても勝ても遂には其元に還るので大した事はないが、外國との戰爭はそふは行かぬ、是非共勝たなければならぬ。夫れ故に私は今回の戰爭は容易にしたくないと思ふたのです。然しながら、若し止むを得ず露國と戰爭を開いたならば必ず勝つといふことは信じて疑はなかつたのです。戰爭前にも私は屢々戰へば勝つといふことを申しました。何故戰へば勝つかと申しますると其理由は少くとも三つあると思ふ。

第一　元來日本の今日の兵式といふものは、其芽を出してから僅かに六十年ばかりのものであるが、其洋式に改良した動機は全く對外的精神から起つたものである。其改革以來苟も養兵に志を抱いたものは、悉く對外の精神を以て研究、又は從事したのである。今其一端をいへば日本は大抵支那から文學、政治、兵學等の教を受けた樣なものであつた。然るに高島秋帆が長崎で和蘭の汽船を訪問して船長の室にある世界の地圖を見て、非常に支那の大にして日本の小なるを知り、青年の高島が外國人に問うていふには、貴君方の西洋の國では支那を如何樣に考へて居らるゝかと聞くと、

支那は國は大きいけれども力は弱いと答へた。然らば戰爭をしたならば勝てるかと尋ねると歐洲の二國が力を合せると勝てるといふた。そんなら戰爭を開く積りかと問ふと、いやそれは容易に戰爭をせぬ、何故なれば四億萬の人口を有する大國を悉皆征服することは容易でない、寧ろ通商貿易を開いて支那の進歩を計る方が得策であると話をした。夫れを高島が聞いて、支那は國が大きくつて人が多いから戰爭をしないといふことであれば、我日本は人も少けなく、國も小さい、それじや大に覺悟をせねばならぬと思ふたのである。丁度德川家康が、元寇の時に北條氏が蒙古に對する處置は充分であつたが然し幸に暴風があつたから奇功を奏したもの丶、實は日本が兵備充實して海外から乘ぜらるべき機會がない樣にして置くべき必要があるといふた如くに、高島も外國から寇を受けぬためにといふので、莫大の費用をかけて小銃や、大砲を作り、又海軍も設けねばならぬといふので、海上で鐵砲を打つことを覺えやうとしたのだが、これが抑々兵制改革の動機であつたのです。其後亞片の騷動や、英佛聯合して北京襲擊する等の事ある每に支那が連戰連敗で、ますます舊來の養兵の用なきを悟り、對外の必要上から銳意兵式の改革に從事したのである。

第二　今度露國と戰爭をしても今日我日本の總ての兵式は歐洲の文明國と全く同一で少しも違つて居らぬのである。丁年者を徵兵にとつて、そうして歐洲と同じく三年間（尤も獨逸は二年であるが）兵營に於て充分なる訓練をなし、又其士官も中等教育を卒へて士官學校や陸軍大學といふ樣に歐洲にも劣らぬ、否な更に進んだ教育を授けて居る。其兵器も改良に改良を加へた世界の最も新らしいものを用ひ、世界の强國と少しも違はぬ組織と訓練を授けたのであるから、此點に於ては何れの國にも毫も遜色がない上に更に

第三　日本では外國に對する觀念は昔から非常に强いのみならず德川氏になつても、絕えず海外といふ事に對しては注意を怠らなかつたのである。例へば家康は甲斐政宗といふものを長崎の奉行に任じた時に、日本國內での戰ひは取ても取られても內輪同志の事であるが、外に對してはそうでない、一尺の土地の事でも實に重大の事である。其方は外國と交際をするのであるから餘程大事に心掛けねばならぬといふたのである。又慶應の頃、是非幕府を仆して王政維新をせぬと日本の隆盛を計ることが出來ぬといふのは世の公論で

あつて、時の朝廷から討幕の勅を下した。英人はその尻押をなし、薩長の人に向て君等は連合して開港を迫れ、一刻も猶豫すれば英艦は發砲して開戰をすると威して開國を迫れといふた。幕府はどうしても假條約でもせなければ朝廷から討たるゝといふ事になつた。德川家茂は二百五十年間朝恩を蒙り、且つは祖先家康の勤王の志を無にして朝廷の征伐を受くるのは如何にも殘念であるが、然しそれは德川家一家の事で小さな事である。日本の國に一日でも外國の旗を立てさせるのは大なる耻辱である。たとへ假條約でもすることは出來ぬといふて、其亡ぶるの日までも、頑として動かなかつた、惡しくいへば鎖國の精神、よくいへば對外の精神が盛んであつたのである。この愛國の精神が、歐洲の兵式を採用して、すべての訓練を重ねた上にあるから此戰爭の強いのは當然であると思ふ。

和魂のみが戰勝の原因にあらず

又夫れと同時に、日本は露國と違つて國民教育が一般に普及して、兵士銘々の智力が發達して居る。いかに訓練が行届いても、兵器の整備があつても、兵士銘々の智識が進んで居らぬならば駄目だ。日本の兵士の發砲がよく命中するといふことは明かなる事實である。形勢斯の如くであるから私は當初から確かに勝つといふことは信じて疑はなかつたのである。夫れ故に戰爭で勝つといふ事を聞く度每に非常に喜ぶと同時に、又一方ではよくあり勝ちの不慮の失敗を招くことがなく、先天的の資質に加ふるに、注意に注意を加へてやる所から斯の如き勝利を得たのであると格別の樂みを感じて居るのである。然しながら、どうして此の如き勝つ所の要素を持つかなどゝあまりに驚くのは宜しくない。何故といふと、勝つのを意想外の事の樣に喜ぶのは、取りも直さず其人は今迄歐洲の兵は強く、日本の兵は弱いものと信じて居た樣に見ゆるので、陸海軍人を尊敬するの道でない。

又吾々の是非共記憶せねばならぬことは、大和魂と愛國心とさへ強ければ必らず勝てると思ふのは大いなる誤解であつて、戰爭には新らしい教育と新らしい器械といふものは最も重大なる利器であるといふことである。今後の教育や、器械の改良に就ては、充分に當局者の精神を助けて其實行を防害せざる樣にせねばならぬ。

文祿年間の朝鮮征伐は七年の長年月を費やし、日本が開闢以來の武將が揃うて行たのであるが到底平壤を陷ることが出來なかつた。何故ならば當時明の援兵は鐵砲を持て居たからである。又島原の戰爭の時は農民の數は二萬一千三百人あつて其他の幼童婦女子なんどが一萬八千九百人あつたが其僅かの百姓一揆に九州の諸侯二十六萬人集つて二百日にして落ちなかつた。何故なれば島原の百姓は鐵砲を持て居たからで、彈藥が竭き、兵糧が無くなつて始めて降服したのである。兵法にも兵器利ならざれば卒を以て敵に與ふといふ事があるがどうしても兵器は戰爭に重大なる問題である。維新の時に大鳥圭介が率ゐた兵士は元柱庵から抱へた雇人の兵士であつて、武士でも侍でもない。然し其兵士の爲めに官軍の武士である所の勇敢なる兵士が屢々苦しめられた、或時大鳥の兵士の途に迷ふて居るのを捉へて首を切つた、其身體を見ると身に彫物をして痩せた人足である。なんだ大鳥の兵士はこんなものかといふと、板垣は傍から口を容れて、是は實に重大なる問題である。吾々勇者を以て任ずる四國の武士が、こんな人足に負くるのは、つまり兵器と組織によるから、今後大に日本の兵制を變じなければならぬといふた事がある。此の如きもので、大和魂や愛國心ばかりでは容易に勝てるものと思ふと實に困る。其大和魂や、愛國心の價値を全うするには新らしき器械や新らしき學問を忘れてはならぬと思ふ。

如何にせば充分なる勝利を得べきか

私は常に陸海軍の方面だけは完全に發達したのみならず、大將やなにかの候補者は寧ろ多過ぎる程の人物があり、又其他の點に於ても遺憾なく進歩して居るが、然し陸海軍以外の方面に就ては其進歩甚だ不完全であるまいかと考へて居る。たとへ陸海軍で勝ても外交や經濟上の事で失敗せねばよいがと掛念して居る。如何なる方面に於ても陸海軍に次して耻ぢぬ樣に改良を加へねばならぬ、ことは日清事件の時も主張して置いた、其後今日まで出來得る丈け力を盡して居た事と信ずるが、然し往々外交や經濟上に不滿足の聲の聚がるのは或は教育の方針が不充分であつた爲かも知れぬと思ふのである。

然し今後はます／＼陸海軍以外にも人物の要求する時であるから、政府も人民も其事に就て充分の注意を

せねばなるまい。時局の問題については勝つた後の事を考ふるよりも、如何にして充分なる勝利を得べきかを考へねばならぬ。(勝たなければ何にもなるまい)無論勝利を得るのは第一の問題である。勝利を得るには第一に根本問題に力を入れねばならぬ。小さな事に對しては餘り苦情をいはぬ樣にせねばならぬ。恰度關ヶ原の役に信州上田城を攻めた時に其城に籠つた眞田幸村は武略も智力もあつて容易に落城せしむることが出來ぬ、さりとて途を轉ずれば大いに德川家の威信に關するといふので榊原康政に一任して、こゝに其全力を盡しても落城せしむることゝしたと同じく、何でも根本問題を定めてしまはなければならぬ。

朝鮮問題に對しても成るべく小さな事件は手を着けずに根本の問題を定めなければならぬ。然るに儲かりもせぬ事業のために政府が力を入れたり、或は長らくの間微々として振はず、一万圓以上の取引が久しくなかつた所の百三十銀行の爲めに狼狽して輔助をするなどすべて經濟上に幾何の影響もないらしい、兎角小問題に意のみを用ひて居るのは甚だ宜しくあるまいと思ふ。かゝる事は畢竟するに陸海軍以外に偉大なる人物、注意深い人物の少ない爲であるといはなければならぬ。殊に最も注意すべきは實業上の發達は陸海軍と並行せぬことである。陸海軍では三十万、四十万の兵士を秩序正しく海外に送るまでに發達せるに拘らず、例へば昨年亞米利加で棉花の不作のために支那に木綿を送ることが出來ず、支那では自然日本に注文して來る。然るに支那は一口に三十万、四十万反の注文であるのに日本では三万も揃へることが出來なかつた。爲めに一億餘萬圓の木綿を買ふ支那に對して貿易することが出來ぬ始末であつた。陸軍は三十万の兵を整備するのに、實業界では十万反の木綿すらないといふのは實に殘念で且つ耻かしい話である。

又一方では日本人が上も下も喋々として朝鮮に人物のないことをいふが、日本でも朝鮮の最高顧問に誰が行くかといふて見ると、全國があの人ならば道德も堅固で、品行も方正で、才幹も充分であるといふて安心して贊成する人が幾人あるか、澤山にあるかも知れぬが、餘りに知られぬのを見ると、矢張り多くはあるまいと思はるゝのである。陸海軍と同じく他の方面をも發達せしめねばならぬ。それには教育の主義を大に改めなければなるまいと思ふ。從來の教育の方式は歐洲よりも進歩した位になつたのは大いに當局者の勞を謝

するのであるが、精神的には、何處に其缺點があるのか、どうも其實効があらはれぬ恨があるのを屢々演說をした事もあるが、いよ〳〵今後の教育に於ては其局の人が銘々に力を盡して其効を收める樣にするのが必要であらうと思ふのである。

政治家のいふには背後に兵力のない外交は効力がないといふが、兵力のみを相手にする外交も當てにならぬのである。やり損ふたら兵力でやるといふのは極めて危ぶない外交といはなければならぬ。兵力を充實すると同時に、背後の國民に高尚なる外交心が備はる樣に教育せねばならぬのである。外交に關する教育を授けて外交心即ち當世の言葉でいへば對外的精神を高尚にすることは德育上最も注意せねばならぬのである。此の如き教育の方針を定めたならば、ます〳〵我國も隆盛になつて東洋の平和を維持する事も出來やうと思ふ。

一千八百七十年の佛蘭西と獨逸との戰爭の結果、佛は取られた所のアルサス、ローレンを回復せんとするの希望を以て、國民教育に於ても大に其意を示したのであつたが、獨逸のやり方が啻に兵事のみならず、教育に於ても、實業に於てもます〳〵改良に改良を加へて、少しも佛をして乘ずべきの間隙を與へなかつた爲めに今日は殆んどお流れの姿となつてしまつた。露國は今回の戰爭に敗れても、今後如何なる大改革をして回復の希望を起さぬとも限らぬ。吾等は兵事のみならず、教育、政治、實業等あらゆるもの、進步改良を計りて、露國をして何等の野心をも起すことが出來ない樣にすることと恰かも佛の獨に於けるが如くならしむることが最も必要であらうと思ふのである。

（文責記者にあり）

平和の戰爭

戰中の經營

寺田勇吉

今日我邦は露國と戰爭最中にして吾人の精神は一に戰爭の事に傾き日夜旅順口の陷落を待つの外何事も手に附かず、唯々戰報談の外殖産も教育も殆と眼中に無きが如し。戰爭に熱心なるは何人も感服する所なりと雖も斯く、官民共に一時的の戰爭のみに熱中し、其目的とする所を忘れたるが如き觀あるは大に我輩の遺憾とする所なり。

日露戰爭の開かるゝや政府も大に經濟上の事に注意し、地方官等に對して種々の內訓を發せられたりと聞く。其の結果國民は戰爭以外の事には何事にも出金せず、唯々勤儉貯蓄を事とし大に民業の發達を妨害したるものゝ如し。然るに幸ひに近來に至り政府の方針も大いに改まりて殖產興業の事に力を盡さるゝの傾向あり。

古昔未開時代に於ける戰爭は主として名譽心等の爲に土地を奪畧するを以て目的としたることは獨り我日本帝國に於けるのみならず、歐洲諸國の歴史に徵するも明かなり、之に反して近時戰爭は昔時と大に其趣を異にし幾万の生命と幾億の金とを費し戰ふは主として其國の商工業發達の爲なり、蓋、吾人が露國人と戰ふの已を得ざるに至りたるは、一には我邦獨立の爲、一には滿韓領土を我國民商工業の得意場となして長く之を維持せんとするに外ならず、今日歐米諸國の競爭は實に陸軍にあらず又海軍にあらず。平和の戰爭にあり、兵事は一時的なり、平和の戰爭は永久的なり、然るに一時的の戰爭熱にうかされ、永久的の平和戰爭を忘るゝが如きは目的を誤まれる甚しきものと謂ふ可し。假令一時的の戰爭に勝つも平和的の戰爭に負け、遂に戰敗と同一の結果を來すことは我々の一日も忘る可らざることとなり、世人は戰後の經營といふ事を唱ふれども我輩は寧ろ戰中の經營を全くせざれば戰後の經營は全きを得ざるものと信ず。

貿易の軍人

さて此度の戰爭に方り世界各國人の敬して遠くる歐亞に跨かる大國民と戰ひ、連戰連捷せる所以のものは我輩の見る所に據れば、

第一、我國民に普通教育の普及せること

第二、海陸軍が科學的智識を歐米より輸入し有爲なる士官を養成したること

第三、祖先傳來の忠君愛國心の存在とに在り

右三ヶ條の結果として吾人の一時的戰爭に勝つは決て疑ふべきにあらずと雖も、唯々我々の疑はしく感ずるは永久的の戰爭にあり。我輩の戰中の經營と言ふは、戰爭の闌はなる今日に在つて平和的の戰爭に從事しつゝ尙將來の平和的戰爭の準備をなすにあり、今や歐米就中獨逸國人の如きは、我邦戰爭中にて運搬不便、工業の不振なるを奇貨として益々東洋貿易に力を盡し、我國民の盡力に依つて得たる得意場を奪はんとす、殊

に戰局の進むに隨ひ日本國旗の後に米國商人、獨國商人等隨行し、我國民の血を以て得たる戰勝の利益は徒らに米獨人等に奪はれんとす、而して戰局を結ふと共に滿韓の門戶を全部世界に向つて開放するに於ては、列國の平和的競爭は更に一層の激烈を加へ來り遂に三國軍事的同盟の爲め遼東半島を奪れたるより一層大なる危害を被るべく明かなり、故に我輩は海陸軍の進步と共に我邦の實業を發達せしむるの必要を今日に至り一層切に感ず。

抑、戰爭其物は之を政治家及軍人に依賴し置き非戰鬪員は帝國發展の爲、實業の發達に努むること實に目下の急務なり、先づ之が爲、第一に努むべき連戰連捷の陸海軍に於ける有爲の軍人の如く、平和的戰爭に對し有爲の商人を養成するにあり、何となれば我邦商業の點に至りては未だ遺憾の點甚だ多し我邦に於ても近來商業學校の數漸次多きを致し、卒業生の數また少からずと雖も未だ貿易の眞意を解し能く世界の大勢に通じ萬國を相手とし商權を左右するが如き大人物の出てたる事なし、言はゞ我邦の貿易は僅々たる內國貿易若くは居留地貿易に甘んじ隨つて人の眼光概ね狹く、唯々目前の一時的利益を得るを以て滿足し永遠の計をなすに至らず、商業は人目を眩まし人を賣付くるを以て唯一の目的となす如き、劣等の商人の多きは我等の大に嘆息する所なり、商業の情況此の如きは種々の原因あり、

第一、我商業家の德義を重んぜざる事

第二、商業教育の方法宜しからざる事

此商業教育の方法宜しからざる事に付て其原因を擧ぐれば一には學科の高尙に失する事、此學科の高尙に失するは獨り商業學校のみに止らずと雖も學校にて授くることは力めて之を高尙になすの傾きあり、其應用に至つては毫も之を顧みざるもの丶如し、隨つて生徒の教師より受る所の學科の如きも之を消化せず、理論の如きは如何に高尙なるも若し應用するの智識に乏しき時は毫も役に立たざるなり、次には商業學校の學科目乏きに失すること、次には有爲なる教師に乏しきこと、等一にして足らず、此の如きは我邦に在つて獨り商業學校のみにあらずと雖も教師と生徒との年齡の差に依つて之を見るも、教師中には往々殆ど生徒と年齡を同うするものあり、隨つて教師は自分が學校に於て授けられたる理論を其儘生徒に授けて實驗等に乏しきを以つて教師自ら講義する所の理論を應用するの力な

く、此の如き情況なるを以て其成蹟の擧らざるは已を得ざるの事たり、之に反して歐米諸國にあつては教師は何れも老巧にして經驗に富み、我邦の如く同年に在學したる者は未だ在學中なるに已は學校を卒業し直ちにプロフェッソールとなりフロックコートを被て二三年前己が習ひしノートブックを以て講義するもの無きにしもあらざるべし。歐米にては斯く學理と實驗とに富める老教師を以て教授の任に當らしむるが故に其教ふる所極めて實用に適す、啻に理論を授くるを以て教師の職務となさず、此點に付ては我邦の教育上大に改良を要するものと信ず、斯かる弊風を改めて軍人に劣らざる有爲の商業家を養成し各國人と貿易上勝利を制し得る貿易軍人を作ること實に我邦今日の急務なり。

工業の戰士

次に我輩は明治十五六年以來工業教育の必要を論じ幸ひに今日は數多の工業學校を見るに至りたりと雖も日露戰爭に際し一層此工業教育を盛ならしむるの必要を認む、抑々我輩の言ふまでも無く、獨逸國の今日を致せるは實に工業教育の結果にして獨逸製品の如きも到る處他國品を壓倒し益々發達進歩せるものゝ如し、

箇は學理を實業に應用せるの結果なり、學理應用の閑けたる國は工業盛にして之に反するものは工業の衰へたるは實に方今の實勢なり、故に苟くも工業の進歩を望まば學理を基礎とし實驗を重ぬるの外亦他に良法なし、然るに我邦職工養成の事たる概ね自然の成行に放任し、金工、木工の如き最肝要なる職業に從事する者に至りても、今に年期徒弟の方法に依り業務發達に肝要なる智識に至つては之を得るに道なし、今や實業補習學校の如き設置なきにあらずと雖も其大半は農業の補習學校にして其實質に至りては唯高等小學校にして國庫の補助を目的として設置せらるゝもの多く、又商工業の補習學校の如きは二三を除くの外、吾人の獨逸國に於て目擊したる如き實用的の學校なく且其數未だ甚だ少く全國工業發達の上には何等の利益なし、我輩は獨逸國の例に倣ひ之が爲、將來職工の組合をして簡易の徒弟學校若くは實業補習學校を作らしめ、必要に應じて市町村及國庫より補助金を與へ善良の職工を養成し、如何なる製作品も猶、獨逸國に於けるが如く之に對する專門的の智識を有する者をして作らしむること肝要なり、我實驗に徵するに職工にして實業補習學校等に於て教育を受けたる者の間接に享る利益は

第一、製圖を解す故に工事に關し說明を要すること少し

第二、專心業務に從事し妄りに言語を弄せざること

第三、注意周到にして製造の仕損じ少き事

第四、能く長上の命令に服し且行狀正しき事

第五、材料を節約すること

以上は實業敎育間接の利益にして我邦の職工の如きには最利益あるものと信ず。

國民の體格

終に臨んで尙我輩の一言したき事は我國民の體格なり、我國民は今日滿州の野に在つて體格の健全なる露人と戰ひ幸に連戰連捷の結果を得たりと雖も是主として我國民の精神上の結果なり、我國民の體格に至つては遠く露人に及ばざることは何人も知悉する所ならん、故に我輩は尙一層我國民の體格をして健全ならしむるの方法を硏究するの必要を認む、我國民の體格不充分なるに付きては其原因種々あるべしと雖も其大なる原因は我邦女子の體格特に惡きに在り、故に我國民をして完全なる體格を有せしめんと欲せば先づ第一に我邦の女子をして完全なる體格を有せしめ、健全なる子女を出產せしむるに在り。而して我國民の敎育の情況、男女對比して見る時は女子敎育の男子敎育に比し大に劣れるは統計上事實爭ふべきにあらず、抑々一家として完全なる家庭を作らしめんと欲せば其夫妻とも殆ど同一の敎育あるを要す、然るに最近の調査に據れば我邦に於ては中學校の卒業生凡一万二千人、然るに高等女學校の卒業生は其三分の一即ち四千餘人に過ぎず、故に女子敎育は男子敎育に比し大に遜色ありと言ふべき歟、思ふに、一國文化の程度は女子敎育の進否に依り判斷するを通例とす、左れば我輩は吾人の體格を健全にする點より論じ且我邦文化の程度を一般に進めんとする點より論じ、今日の女子敎育を以て未だ遠かに世界一等國を以て任ずべからざるものとなし、向後益々女子敎育發達進步せしめんことを希望す。

（文責在記者）

米國の學生は、他邦の學生の如く學者肌にあらず、亦た讀書家にもあらず、されど其の智識は最も實用に適したる形態を具ふ、換言すれば、他邦に於いては胸に高遠の理法を蓄ふる學者肌の人物を作るに努むと雖も、米國の敎育制度は學術的素養を有する實業家を出すを以つて目的とす、

時局に於ける宗教家の任務

文學博士　桑木嚴翼

日本人に宗教心の熾なるや否やといふことは随分問題となつて居ることとて双方共にそれ〳〵根據のあることてあるが、予はむしろ此の點に對しては其の消極論者の中に入らんと欲するものである。即ち古來より日本には種々の宗教が行はれて居つた事實もあるが、併し其の根據に溯れば日本人の思想はむしろ唯物論若しくは少くとも心物二元論に傾いて居ることが原因となりまた結果となつて、宗教に對する思想感情は極めて薄弱であると思はれるのである。先日ペルリ紀念資金感謝會の席上で大隈伯が種々日本今日の文明に就いて述べられた際に、時局に對して各派の宗教家が一致して宗教家大會を開いた事を擧げて、日本人の宗教思想が如何に寛裕であるかといふことを示されたが、併し之れは一方から見ればまた宗教心の極めて冷淡にして根本的性情に浸潤して居ないことを證して居ると見ることが出來ぬてあらうか。其の他また古來の武士道に就いて考へて見ても武士道の要素中には佛教の思想が多少入つて居らぬことはない。併し其の佛教たるや大抵禪てあつて其他は重に儒教が其の根底を造つて居るのである。而して其の禪なるものは所謂自力宗で、佛教諸派の中でも最も非宗教的なものといはねばならぬ。尤も宗教といふ意味も人に依つて色々に使はれて居るが、普通此の言葉で解釋せられて居る意味では何うしても他力宗が眞の歴史的宗教と稱すべきもので、彼の眞宗などは其の點から見ると最も宗教的意味を備て居る。それが爲めといふ譯でもないが眞宗は随分武士から攻撃されたこともあつた。彼の織田氏と一向宗との爭ひなどは必ずしも其の思想上から來たといふことは出來ぬが、兎に角眞宗の如き宗派は武士道とは往々一致し難い點があつた。而して武士道は諸人の認めるが如く最とも善く日本人の性格を顯はして居る主義の一つであらうと思はれる。

斯樣に日本人の根本の性情或は其の性情を支配して居る主義の如きものと宗教とは十分なる融合を得て居らぬやうであるが、今日に於ても其の事實が澤山現はれて居るのである。彼の新聞などに傳へて居つて、先日の三上博士の談話にも引かれて居つた事に、兵士が

戰死する時には多くは皆万歳を唱へて、決して南無阿彌陀佛などゝいふものはないといふことであるが、之れは尤もさもあるべきことゝて、元來南無阿彌陀佛といふ言葉が如何にも憐れつぽく勢のない語調であるから戰場などで之れを唱へるものがないのも當然であるが、兎に角彼等兵士の中には隨分鄕里に在つては諸方の神社佛閣などへ參詣するものもあり御經の一節位は心がけて居るものがあるに係らず、戰陣咄嗟の際にはなか〳〵其の平日の宗敎的修業が顯はれ來ないのである。で彼等が死を決して進む時には未來も佛もないのである。唯所謂忠君愛國の念と義務の念とに驅られて驀地に猛進するのである。宗敎上の說法などは此の瞬間に對しては何等の効力もないのである。却つて死を決する時よりはむしろ生きんと欲する心即ち生命を愛惜する心の存する間に一種の宗敎心が勇猛なる日本兵士の間にも潜んで居るのではないか。彼の出陣する際に諸方のお守札を背負つて行くとか、或は千人の縫つた腹卷を占めて行くとかいふやうなことは、人情止むを得ぬことゝてもあるが、實際起つて居る現象である。斯樣にして宗敎心が迷信の形を取つて顯はれ來ることは決して少からぬ事實であるが、併し是等とても決して宗敎が大なる勢力があるといふ證據にはならないのである。是等の迷信家も愈々砲彈硝雨の間に立てば、全く今までの迷信を忘れ、宗敎を棄て、唯義務の一念に生命を放擲して毫も顧ぬのである。轉じて

宗敎家自身の態度

に就いて考へて見ても、矢張り彼等が果して眞の宗敎なるものゝ價値を認めて之れを一般に宣傳せんとしつゝあるかといふことについては少からぬ疑を放つことが出來ると思ふ。彼等の此の際に當つてなす處の事柄は何であらうか。曰く宗敎家大會である。曰く戰勝祈禱である。曰く從軍布敎である。宗敎家大會では先にも述べた通り今まで水火も啻ならざる神道家と耶蘇敎徒とが膝を並べて日本の正義を辨じ犬猿の間柄であつた或佛敎家と他の佛敎家とが相次で戰爭の頌辭を演說して滿堂の日本人の喝采を博したのである。戰勝祈禱に至つては最も甚だしいもので、此の間も某友人が丁酉倫理會の雜誌に諷刺文を揭げたことがあつたが、表ては戰勝祈禱武運長久の御守りやら鐃曼陀羅を定價幾錢かで賣却して奧ては其の利益で牛飲馬食して居る和尚や禰宜がある。終に從軍布敎に就いては、今日の

戰地に於ては如何なる有樣であるか詳細の事を知る機會がないが、（或は今回は餘り行つて居らぬかも知れぬ）平時に兵營に出入する布敎師なるものは、予も二三度出會つた事があつて、其の演說のなか〱巧妙なのに感服もした事があるが、併し其の言の內容は國史國體の話とか、其の他兵營日常の規定などに過ぎぬので、あれでは日々士官や下士などから繰返されて居る所謂精神講話なるものと何等の異る所がない。要するに、布敎師なるものが毫も獨立の見識を持たず、當局者の鼻息を窺ふに汲々たることが分るのである。

斯樣に述べて來ると多くの宗敎家の方向も或は眞の宗敎に外づれて居りはしないかといふ疑が起るのである。元來祈禱といひ、從軍布敎といひ共に全然無効といふ譯ではない。兵士中には矢張り是等を要する者があつて、其等の人々に慰藉を與へる爲に、多少の効能もあることは認めざるを得ない。祈禱なり、お札なりお守りなどが如何ばかり從軍者の家族の淋しい心を慰めるであらうか、また戰死者を葬る際に布敎師の讀誦する經文が如何に戰友の心を安んずるであらうか。故に是等を悉く排斥する譯ではないが、併し

宗敎家としては他にもまだ大任務

のあることを忘れることは出來ぬ。元來戰爭は如何なる理由が成立つにもせよ、それ自身の性質には罪惡の分子を含んで居るといふことは掩ふべからざる事實である。少くとも害惡（道德的罪惡でなければ物理的害惡）であるといふことは何人も承認せざることを得ぬ。或人は正義の爲にする戰爭は惡にあらずして善であるといふかも知れぬが、併し此の所謂正義なるものがなか〱判斷しにくい、勿論我々は今回の戰爭に就いて我れに十分の正義のあることを認めて居るのであるが、併しまた反對の見方を牽强附會することは必ずしも出來難いことであるまい。全體正義と强力とが必ずしも一致するべき法則もないのであるから、假しや正義があつても戰爭に依つて之れを決しやうといふのは必ずしも道理に叶つて居らない。いな既に戰を開いた以上は或度までは平日の正義論も實行出來ない場合も起るゝ事は出來まいと思ふ。是れ大の目的の爲に小の目的を犧牲に供するので、到底避くべからざることといはねばならぬ。斯樣な結果に立到るべき戰爭に對して宗敎などが正義論などを唱へて居るのは隨分迂遠でまた時宜に依つては有害であるかも知れぬ。特に吾

誰が怪訝に堪へないのは、一派の國家主義論者の正義論である。此の人々等は平日は一種奇妙な國家至上主義を唱へて、國家のする事は悉く皆善、即ち國家は惡を爲す能はずなどゝいふ詭辯を振舞はし、國際には道德關係がないなどゝいひながら、急に一變して正義論を主張するのは最も意を得ぬことゝいはねばならぬ。宗教家ともいはるゝものが斯樣な人々の議論に乘せられて、戰爭の正義などを議論するのは隨分見當違ひの事といつてもよからう。

元來戰爭は害惡であるが、之れと共に宗教の本旨に最も叶はぬものといはざるを得ない。宗教中に於いても、回々教の如き戰爭主義の宗教もあるが、一般にいへば、

宗教の本旨は慈悲忍辱博愛洪量

に在るのであるから、自他相鬩ぐ戰爭とは本來矛盾の性質を持つて居る。宗教は如何にしても個人の解脫問題に關係して居る。而してまた世間日常の出來事を超越して居る。(是等の點に就て九月の丁酉倫理會講演集に稍委しく述べてある。)然るに戰爭は國家的世間的の性質を帶びて居る。故に若し宗教の主義を貫徹したならば、勢ひ非戰論とならねばならぬ。社會主義一派の非戰論とは趣が違ふか知らぬが彼のトルストイの唱へる如き非戰論は宗教の正當なる論理的結果といはねばなるまい。今日の宗教家が俗人と同じく戰爭を辯護などするは、如何にしても曲學阿世の譏を免れることは出來まい。

斯樣に戰爭と宗教とは本來の性質上一致すべきものでない。然らば宗教家は戰爭に對して、飽くまでトルストイ主義を主張して行くべきものであるか、予は必ずしもそれが宗教家の任務でもあるまいと思ふ。世の中には害惡が澤山ある、併し其の害惡が到底避くべからざる場合にはなるべく其の害惡の結果を減少するより他に方法がない。死は實に世界の害惡中の最も大なるものであらうが、吾々は如何に努力しても到底之れを逃れることは出來ないから、種々の方法てなるべく其の苦痛を減少しやうと試みて居るのである。今戰爭の時また國家の成立上避くべからざる害惡てあつて、是れに從事する少數の國民殊に義務兵なるものは、最も其の感を深くするものといはざるを得ない。併し如何に戰爭が害惡てあつても今日の勢ては到底それを絕

滅することは困難であらう。然るに其の戰爭に際しては多數の人々が共同動作をしなければならないて、其の團體の間に種々の規約制度等が生ずることを避ける譯には行かない。一つの軍隊には長官あり部下がある。長官の命令と生命とは共に部下に對して重きをなして居る否部下の人々の生命よりは却つて其の馬匹武器軍艦等の方が尊重せられ居るやうな場合がある。從つて人格などいふことが全く無視せられるやうになることは、戰爭の目的を達する上に於て、到底免るべからざる事なのである。戰爭に從事する者は甘じて其の犧牲たることを避けぬであらう。併し彼等の衷心に於て眞の滿足を得るが爲には何か他に慰むる所があることは要しはせぬか。而して此が宗教家の盡すべき任務のある所ではないか。

戰爭の目的を達する上に於ては人格は殆ど無視せられて居る。併し旣に其の目的を達した上に於て尙ほ其の人格に價値が回復せぬであらうか。他語を以ていへば、現實的には職業階級のみならず。人格も尊卑の別があるのであるが、此の區別は現實を離れた處即ち死の後若しくは死を決した其の瞬間にまで續くべきものであらうか。作戰の計畫を立てる參謀官、全軍を掌握する指揮官は部下の將士よりは責任も重く、また其の點に於て人格も尊いといつてよからう。併し愈々戰機旣に熟して砲門開け、銃火起る其の戰線に死を決して居る全軍の將士は此に至つて最早何等の人格的差別もないのである。此の戰線に立ち、此の戰線に斃れた者は、如何に卑賤なる階級に在るものでも全く自己の義務に殉じたのであつて、最も高貴なる人格の境地に達したるものとして自から安んずることを得べき筈である。此の場合に於て初めて得らるゝ平等なる人格の價値を人々に知らせるものは多少超世間的なる宗教家を措いて他に何人があるであらうか、此の人格を認めず、徒に世間の俗人と同一の立脚地に立つて戰爭を論じ、或は將士に宗教心を皷吹しやうとしても何の効果があらうか。斯樣に吾々は

宗教家の大眼目は平等なる人格を人々の心中に自覺せしむるに在り

と考へるのである。而して此の自覺は無論他の修養と相待つべきものであるから、從つて宗教家の言説は是等の修養に大關係を持たねばならぬ。假令戰爭には

如何に勇猛なりといへども、他の德に於て缺けて居つては殆ど何等の價値もない場合が少くない。宗敎家は此點に關して人々の注意を喚起すべき職分がある。現に自分は或る汽車の中で豫備の上等兵が妻子を伴ひ、大勢の旗や人に送られて、召集に應ずるのを見て、一種の感慨に打たれたことであつたが、此の上等兵が切符を檢せられた時に赤切符で二等の車室へ乘込んで居つた事が發見されて、氣の毒とも何ともいへぬ感じがしたのであつた。今將に戰場に臨まんとする勇士が何故斯樣なつまらぬ惡德を犯したことであらうか、是れは決して此の人の罪でなく、むしろ敎ゆるものの罪であらうと思ふ。勿論是れは獨り宗敎家のみの責任ではない、敎育家思想家等の等しく責を負ふべき處と思ふのであるが、苟くも社會の木鐸となるものは、此の點に就いて深く思を凝らさねばならぬではないか。(吾々は此の點に於て姉崎氏の時代思潮などで論ずる所が徒に戰勝に謳歌せずして、國民の根本的性情を陶冶するの必要を說くことを多とするのである)。

斯くの如くしたならば、宗敎家の說も宗敎の本旨を離れずして、社會と近づき、宗敎に冷淡なる吾々國民も宗敎の恩澤に浴することを得るに至るのではあるまいか。世を導くべき宗敎家、思想家が世に阿るに到つては頗る轉倒した現象といはざるを得ないのである。

(記者筆記)

▲在韓本邦勞働者の賃銀

日給

大工	一圓乃至一圓廿五錢	日雇	八十錢
車夫	八十錢以上	仲仕	八十錢乃至一圓
石工	八十五錢乃至一圓四十錢	左官	一圓乃至一圓五十錢
瓦師	一圓乃至一圓四十錢	桶屋	一圓
植木職	八十錢乃至一圓	船大工及鍛冶工	八十錢乃至一圓
鐵葉工	一圓	ペンキ職	一圓
煉瓦職	一圓	手傳	五十錢
木挽	一圓		

月給

小僧	一圓乃至五圓	菓子職人	十五圓乃至十八圓
手代	八圓乃至十五圓	番頭	十五圓乃至廿五圓
下女	一圓十錢乃至五圓	活版職	十圓乃至廿五圓
理髮職	十五圓乃至十八圓		

海外新潮

海外大勢

英獨兩帝の會見に關する世論概觀

（歐洲各國の主要なる新聞雜誌所說拔萃）

▲スフヰーア誌は曰く英王エドワードがキールに於て獨帝ウイルヘルムと會見したるの事實は、世界の耳目をして聳動せしめ、世の好事家は種々の臆測を逞うして、事の眞意を摘抉せんと勉めつゝあるもの丶如し。從來兩國間の交際は、其血緣の最も近きに拘らず、常に面白からざる狀態にあり、殊にウイルヘルム皇帝が彼の有名なる電報をクルゲール氏に發信したる以來其交際益々信實ならざるに至りしは事實なり。其後獨帝が其祖母ヴイクトリア女王の葬式に出席したりしは恰かも黑雲の間に日光のあらはれしが如く、兩國が爾來親交の途に就くべきを豫想せしめしと雖も、此善良なる徵候は戰爭中吾人に對する獨逸の惡意ある態度によりて、直ちに消滅せられたり。而して此惡意に對するスペクテートルの攻擊又激烈にして、其間隙甚だ大を加へたりしが如き今日、突然かゝる會見を見るに至りしなれば扨てこそかゝる囂々たる世論を惹起したるなれと。

▲其後同誌は又論じて曰く。キールの會見は今日尙獨逸諸新聞の論題なり。佛蘭西は最も冷靜に此會見を眺めつゝあるが如し、何となれば彼等は如何なる事件も英佛同盟の堅固を破ることなかるべきを自覺すればなり。英獨兩帝の會見は兩國の同盟を來たすべしとは恐らく誤りたる見解なるべし、何となれば現今に於ては兩國が力を協すべき共同の事業又は驅逐すべき條項の存するなければなり。或人々は此事件を重大視なし、殊に英人の或者は英國が露國及び戰爭に對して誤りたる態度に變ずることなかるべきやを氣遣へり。然れども斯の如き事件に關することは普通の外交的談判によりて決せらるべきとにして殊に兩帝の會見を要すべき理由なきにあらずや。若し此會見にして政治上の意味を含めりとすればそは格別なる事件に對してなるべく、吾人人民の與かり知るべからざる事に相違なかるべし。兎に角吾人は此會見を以て、友誼的親交を溫むるの訪問と見ることの最も誤りなかるべきを信ず。

▲獨逸の半ば政府機關なるノールス、ジャーマン、ガゼットは其讀者を戒めて曰く、今回の會見たるや、政治上重要なる意義を含まざるに非ずと雖も、之が爲めに特別なる新同盟の起らん如く豫想するは大いなる誤なりと。

▲又同國ベルリニル、ターゲブラットは曰く、若し英國が吾人に向て一致を求むることあらば、實に之れ喜ぶべき好機にして、吾人が彼等の詭計に陷ることなくんば、今日の政局上一致によりて吾人の利する處少からざるべし。吾人は此擧の爲めに商業の發展を妨げ、且つ一方に於ては

露國の感情を害することなき限り、極力英獨の一致を祝するものあり。何れにしても英獨の間に軍事上の一致協力あるべきは毫も疑を容れざる所なりと。

▲同國ライプチゲル、ノイエステ、ナハリヒテンは記して曰く。吾政治家が大に其手腕を揮ひ、以て獨國を現在に於ける孤立の窮より救ふべき時期に達したりと。

▲佛蘭西のタンプは曰く。獨逸の新聞紙は如何なる根據を以て、英王の禮儀ある會見は今日の不偏にして幸福なる狀態を固くせんが爲めのみならず、其上兩國の一致又は、秘密なる條件に向て起れるものなりとの妄見を掲ぐるや、其理由こそ知らまほしけれと怪めり。

▲同國デバは此會見を喜んで曰く。英獨兩帝の會見は、第一、平和の保證を意味し、第二、英佛の同盟は或人が信ずる如く獨に對して惡意あるものにあらざるを獨に知らしむるを得るが故に甚だ賀すべしと。

▲露國ノヴオエ、プレミヤは獨逸を戒めて曰く。獨逸は英國の勸告によりて誘惑せらるゝの愚に陷るまじ、何となれば若し獨が英と一致協力するも其最も主なる最も恐るべき敵よりして如何なる利益を得んとするかと論ぜり。

▲タイムスは種々の世論を掲げたる後其意見を述べて曰く。要するに此等の種々なる見解は皆同一の目的を以て述べらる。即ち單なる友誼上の訪問を曲解して政治上の意義を有せしめんとするなり。然れども露國又は佛國に於ける賢明の政治家は、已に誤りたる見解を抱きたるに非ずんば、此會見の眞の意味を推測するの時機にあらざるを悟るべきは疑を容れず、兩帝の會見は或人の考ふるが如く兩國をして密接せしむるか又たは離間せしむるかの一途に出づべしなどいふは誤りなるべし。我が英國に於ては今日の事無き關係を此儘に維持せんとするの外他念なきなり。此れに種々なる意味を附せんとするは全く獨國の淺見にして思慮なきに依る。

▲デーリー、メールは論じて曰く。キールに於て英王の會見したる夕、獨逸諸新聞が取りたるの態度は、明かに此會見によりて早晩獨逸の利益となるべき事件の相談ありたるべきを信じたるが如くに見えたるなり。吾人は毫も斯の如き豫想を有せざりしなり。ビューロー伯の配下にある「ターゲー、ブラット」は極東に於ける戰爭を中止さるべき策を講じたるが如くに極めて曖昧に書きなせり。其目的は素より兩帝が中止の擧を講じたるか如く思はしめんとするなり。然れどもこは素より事實にあらざるは英獨に於けるあらゆる思慮ある人の承認する處なり。中止の擧はキールに於て議せられず、又戰爭の話さへ碌々なされざりしなり。英王エドワードは大いなる才幹を有する外交家なり。然れども彼の外交はビスマークの如く一方に同盟しながら他方にて其同盟國の不利を計るが如きものにはあらざるなり。若し戰を中止せんとせば、たゞ一の道あるのみ。日本が中止を望まば自ら英國に近き、英國は又其爲めに親切なる方法を取らんのみ、日本が中止を望まざれば英は其同盟國なる日本に計らずして其中止を講ずる如き不法なる行爲に出づること決してなかるべし。而して日本が今日戰爭の中止を望まざるは事實なれば斯の如き豫想を逞うするは愚かなる業なりといはざるべからず。かゝる流言をなすものは恐らく英國をして不德なる國民の如く思はしめんとするの惡意より出でたるものにして、眼識あるものは皆其誣妄なるを知るに困まざるべしと信ず。

極東に於ける日本の商業を論ず

（砂糖、紙、羽二重の現況及び南清貿易の將來）

「フイナンシアル、ニユース」

日本外務省内に於ける通商局は、万國砂糖組合の現狀を報じて、日本を始め極東に於ける砂糖の市場に不幸なる結果を來たすべきを豫想せり。今日迄採用せられたる甘蔗砂糖に關する保護の政策が全く廢止せられしに拘らず、歐洲に於ける砂糖の產額はます〳〵增加するの勢を示したるも其需用は更に舊來と異なるなきを以て、其產額に多大なる剩餘を生じ、終には流れて極東に入り、日本の砂糖を市場より驅逐するの恐なきにしも非ざるなり。獨逸及び墺太利匈牙利の砂糖製造者は、常に製造器械に改良を加へ、其費用を著しく節減するを得しを以て、政府の保護の廢止せられし今日に於ても益々其事業を擴張し以て極東迄も之を販賣する所以なり。獨墺以外に於ける歐州砂糖製造者も皆其產額を增加し、極東に向て其販路を大ならしめんと企てつゝあるもの〻如し。

日本の眞相と露助に見ゆる其假相



露助に見ゆる我兵は、時代後れの裝ひして、時代後れの武器を持ち見るも可笑しき木葉武者。眞の日本は右を見よ。洋書開いて新らしき、學問智識に身を委れ、壁にかくるは世界地圖、棚に飾るはモルトケの、偉功を慕ふ半身像。扨ても哀れや露助等の、盲目同志の當推量。

又日本の紙類、殊に西洋式に製造したる日本の紙類の支那に入り込むこと近來著しく增加したれば、近き將來に於て、紙は日本より支那に輸出する最大重要品となることは疑なきなり。此貿易の盛んになりたるは僅々七八年の間に過ぎずと雖も、今や日本は上海の地に紙製造所を設くる程の好況を呈し、而して其賣高は支那が高等教育、又は中等教育の學校を設立し、數百万の教科書を印刷するの機運に向ふによつて非常の增加を見るべきは明かなる事實なり。獨逸も亦此に着眼し、大に此商業に手を出さんとするの野心あり。又支那には合紙を製造する一の工場なし、故にかゝる紙を產する外國製造所に向て其供給を仰ぐに至るべきは論を待たざるべし。

日本人は一於に方て朝鮮に要せらるる物品に向て、注意深き考察をなすことを怠らざるなり。朝鮮の農業は未だ極めて幼穉の狀態にあるは明かなる事なるが、野心ある多數の日本

農民は彼地に渡りて、半島の農業に從事すべければ、彼國の農民も農法を改良せざるべからざるの理を悟り、之によつて新農具を要求するの時必らず來るべし。一度進歩したる農業を知れば、朝鮮人も追々牧畜及び養蠶の業をも倣ひ、此の業に要する材料の大部は日本より輸入せらるべし。

日本の生絲商會か今年に於て外國に輸出する金額は少くとも四千万圓を下らず、其中三千万圓は全く羽二重のみの占むる所となるべしといふ。其販路は重もに歐洲及び亞米利加なり。去る四月迄の計算によるも羽二重の輸出額已に千百八十八万圓六千圓の巨額に上り、爾後益々其賣高を增加すべきの見込あり、其他甲斐絹、絹手巾、及び其他の絹製品は甚だ好評を博しつゝあり。

廣東に於ける三菱物産會社の支配人は南淸に於ける貿易に向て其見解を發表せり。彼は第一に支那に取引する日本の商人及び貿易者が重もに其注意を北淸に向てのみ拂ひ、最も有望なる南淸殊に廣東の貿易に向て冷淡なりしことを、いたく嘆じたり。廣東の前途は實に有望なるものにして一旦漢口よりの鐵道落成したる曉には廣東の貿易は上海よりも遙かに隆盛となるべしといへり。

短評
トルストイの戰爭觀

『ブラック、アンド、ホアイト誌外二新聞』

▲ブラック、アンド、ホアイト誌はタイムスに於けるトルストイの戰爭觀を評して曰く。トルストイの思想はあらゆる戰爭に對する斷乎たる排斥、露人に向て戰ふ勿れとの勸告、及び露國並びに世界各國の政治的社會的組織の攻擊にして、其最も特質とする所は極めて熱誠なると露國土民の受くる所の困難を活けるが如くに描ける所にあり。彼は現今歐洲の政治界には堪ふべからざるの不平を有し、今日の戰爭に入ることを人民一般が拒絕するより外に救助の道なしといへり。「殺すことを拒め」是れトルストイ伯宣言の眞髓なり。露帝に對する彼の攻擊は最も激烈にして些の猶豫なし、此宣言によりて長く行はれんとして行はれざりし追放がいよ〳〵實行せらるゝとも決して驚くに足らざるなり。彼の主義は確かに無政府主義にして露國に對して一時の不幸を招くべきは疑なき事實なり。世人は此教訓を無視することはなかるべきも其決論に向て全く贊成の意を表することは難かるべし。何となれば彼の教訓は多く獨斷にして其理由に至つては明かなる條理を有すること極めて稀なればなりと。

▲デーリー、ニユースの寄書家は曰く。トルストイの宣言は世界に向て最も明かなる、而かも何人にも忘れられたる事實を示し、人をして再び驚きて根本の眞理に歸依せしむるものなりと論ずるは眞なり。斯の如き眞理を忘るゝは實に妄の至りなり。吾人が今極東に見る所の形勢は如何。天使も當さに淚を垂るべきの光景にあらずや。日々の新聞は每朝吾人に向て其事實の眞相を示し、世界の人は其一擧一動を評して其結果の豫測に頭を苦しめつゝあり、然り是れ實に吾人が見る所の形勢なり。あゝ誰か世界をして根本の眞理に歸らしむるものぞ。あゝ誰か世界をして吾人の眼前にある事相は「光榮」にあらず「名譽」にあらず、實に悲慘なる野蠻なる振舞なるを悟し、國際間の爭鬪を定むるに他の勝れたる方法あるを教へ得るものぞ。吾人及ばずと雖も、又世人をして道理に服し、靜かなる心情に立歸り、而して戰爭の愚にして惡なるを悟らしむるの好機を逸せざらしむべきなり。

▲グラスゴー、ヘラルドは曰く。吾人はトルストイの物狂はしき見解とは遙かに異なりたる意見を有するものなり。あらゆる事物の現狀に就て滿足して止むは惡しきに相違なし、然れども吾人は世界に現存する事實に向て目を閉ぢ、而して假にトルストイ的の思想を徹頭徹尾に叫びたりとも何の益かあらん。若し歷史が吾人に教ふる訓戒ありとせば、そは人類の改革及び其進步は極めて徐々として來るものなりとの事實是れなり。かるが故に其進行極めて遲く、吾人の感情は「時」の限界を破りて其速力を早めんとするの迷を起すことあるも、吾人は氣を長くして、以て時の祝福を待つの外道なかるべきなり。而かもそはトルストイ派の短氣なる人の到底忍び能はざる所なるべし。

吾人の眼に映ずる日露戰爭

「グラフィック誌」

今日極東の局面を通觀するに、十年以前のそれと多くの點に於て一致する所あるを認む。而かも一事の忘るべからざるあり、何ぞや、曰く、日本は一千八百九十四年の戰役に於けるよりも一層恐るべき敵に向ひつゝあることと是れなり。十年以前支那は多くの抵抗をなさずして鴨綠江を横ぎられ、又金州城の陷るや僅々十四日にして旅順を占領せられたり。今回の戰爭に於て金州の陷りしや五月の二十六日なりと雖も旅順の形勢は十年前のそれと甚しく異れるにあらずや、現在旅順に立籠る露軍は大いに其城廓を堅固にし、セント、ピータースバルクに於ける露人は旅順は到底陷落すべきものにあらずと信ずる程なり。金州より大連灣に至る道路の構造は防禦のあらゆる手段を應用したるものにして、半島の最も狹隘なる部分は、凡そ二哩の距離ある山脈によりて其兩側を蔽塞せらる。露人はかくも堅固なる位置にありて、新なる城砦を增加し、以て其準備到らざる所なし、之が計畫をなしたるはヴェルナンデル將軍にして、其手腕は嘆ずべし。傍に接近するにあらずんば日本人の眼に入らぬ程巧みに其組織を隱したり。あらゆる手段を以て防禦の工事を盡し、以て其安全を計り、若し陷落す



負傷したる露軍

ることあるも敵に多大の損傷を與ふるや必せり。

然れども日本の兵士の特質は生命の犠牲に就て全く無關心なるにあり。實に今回の戰爭に於て日本の兵士はひとり世界各國の驚嘆を博せしのみならず、其敵國たる露人も亦、其勇氣あり且つ武士的なる擧動を承認せざる能はざりき。今や露人さへ「小なる黄人」に就て輕蔑の口調を以て語ること能はざるに至りぬ。日本の將校及び兵士のあらはしたる技能は歐洲の軍隊に劣ることなく、歐洲の最優國の軍隊も日本のそれに優ること能はざるなり。殊に最も感ずべきは日本の軍隊には無能又は怠惰なる將校の存在することなき是れなり。而して軍事上の計畫は總て默々の間に運ばれ、東京の人民さへ其秘密を知ることなきなり。又日本が敵國に優る最も大いなる利益は其背後に全國民を有することなり。露國は之に反して政府が戰爭しつゝあるも國民は毫も此に對する熱心を有せざるなり。露兵はいや〳〵ながら出發するものにして逃亡者は實に一週三百の多きに達したりといふ。此戰爭の斯くの如き結果に到りたるは全く露人が其國を輕蔑しつゝ戰ふと、日本が騎士的精神を以て其國の名譽の爲めに戰ふとによるなり。

時局の經濟上に及ぼす影響

「スペーカー誌」

南亞戰爭其局を結びてより吾等英人は自國にて受けたる直接又は間接の損失を計算せんと勸めたること已に一再にして止まらざるなり。増加したる負債の金額、陸海軍の維持に支出する豫算に超過したる數百万圓、軍器の消滅及び軍用品の濫費、人命及び動物の死傷、生産盛んなりし工場の減少、其他かくの如きものを數ふれば、其損失實に計るべからざる程にして、政府が年々大藏省より拂込みし二億三千万圓の如きは僅かに其一部たるに過ぎざるなり。

征服者の損失を計算することさへ已に難しとすれば況んや被征服者の損失(よし其悲慘なる有樣を度外に附するも)に向て適當なる經濟上の解釋を與へんことは到底不可能の事なりといはざるべからず。如何なる統計學者と雖も彼の不幸なる國民が南阿戰爭によつて蒙る損失を計算せんことは到底なし能はざる所なるべし。

今や極東に於て日露の間に戰はれつゝある戰爭の如き其損失の計算を明かにせんこと又一層困難なるの問題といはざるを得ず。實際の消費する金額、世界の富豪又は資産家に及ぼす影響の如何、兩國の何れが其資本に對して惱みつゝあるかの如き、容易に知るを得べしとも思はれざるなり。朝鮮に就ては吾人何の知る所なし、朝鮮は無力自ら支ふる能はずと雖も、彼等は元來戰爭好きの國民にあらざるを以て、日本が自ら彼等の開きたる戰爭に於て支拂ふべしとすれば第一戰局に於ては朝鮮の損失極めて少々(コサック兵の侵害を別として)なりといはざるべらず、然れども戰後の經營に對する費用の奈何に至りては多少疑惧の念なきを得ざるなり。

滿洲及び西比利亞に至りては全く朝鮮と異れり。露軍は自由に其住民の宅に宿りつゝあれば西比利亞の大市に於ては商業上の恐慌又は饑饉の起るべしといふも強ちに無理ならざるべしと信ず。幸にも日本は其外國貿易の景況頗る宜しきが故に甚だしき困難を感ずることなかるべきも、然れども一般の不景氣と金融の逼迫を來したるは明かなる事實なり、是れが爲めに資本及び大なる金額の集中を防げ商工業の擴張を沮害したるの形跡決して蔽ふべからず。鐵道延長の計畫は戰爭の開始と共に延期せられ、諸處に於て職業なきに苦しむの歎聲を耳にす、數多の銀行は已に其拂込を中止するの止むを得ざるに至りたるの有樣なり。假令日本は軍事

に於て嚇々たる偉勳をあらはせりと雖も戰爭の速かなる終局を冀ふに至りたるべきは彼國の經濟上の事情を知るものゝ認むるに難からざる所なり。

日本が若し露國の艦隊を占領又は陷落し、以て幾何かの地方を有するに至れば直ちに條約を結び、其局を終ふること速かならんを望むに至るべきや瞭々として明かなり、而して是れ亦露國政治家の中の滿洲に出兵して交戰するの不可なるを唱へたるものによりて贊成せらるべきは疑を容れざるなり。

若し佛獨の新聞紙が論ずる如く、旅順の陷落は今後數日を出でずとすれば、露國は是れによりて船艦、砲銃、用品及び器械等の直接なる損失夥しかるべく、其額を豫算すること始んどなし能はざる程なるべしと信ず、或通信員の報ずる所が見に露國艦隊の價格は最少額に見積るも三億万磅なりしといふが戰爭開始後今日に至るまで其失はれたる價格は少くとも其三分の一を下らざるなり。若し旅順が遠からず陷落なし、其艦隊にして日本の分捕となることあらば露國の損失や實に莫大なりといはざるべからず。然れども斯の如く軍艦のみの損失を擧ぐるは未だ正當なる計算といふべからず、其他の附屬船及び輸送船に關する金額も亦決して少々なりといふべからざるなり。兎に角此戰爭が兩國並びに世界の經濟上に及ぼすの影響は實に大なりといふべし。

ロンドン、ニユースの戰時畫報記者
メルトン、プライオルの描きたる



日本兵出征の光景

日露優劣の主因（射撃の巧拙に因る）

『スピーカー』

日本が今回の戰爭に於て海陸共に大いなる勝利を博したるは、主として武器を用ふるの巧妙なるによること論なしと雖も、此島國民が如何にして大砲及び小銃を用ふること、かくも巧妙の度に達したるかは、世人多少の疑なきを得ざるべし。今露國人を以て彼國人に比するに水夫及び兵士の體格敢て劣れるあらず、其智力及び勇氣敢て少なきに非ず、又其用ふる武器に於て精疎の別あるにあらざるなり。然らば露人が長距離の射擊に於て常に失敗するに拘らず、日本人かよく成功する所以のもの如何といふに、其理由たゞ一つにして極めて簡單なり。日本の兵士及水夫は戰爭の開始する遙か以前に於て熱心に射擊の術を學び、日本政府は多大の費用を投じて屢々實地演習の察をなさしめたり。然るに露國の軍人は開戰の後に至つて始めて長距離の射擊を學びたるもの多く、爲めに敵の優勝なる技術に驚かされ、全く沮喪したるの狀態に陷れり。露人一度沮喪して自信力は益々薄弱となり、失望と不安の念胸中を去ることなく、遂に今日の如き不運に際遇したるなるが、其原因を尋ぬれば主として射擊の拙なるによることは毫も疑なき所なり。

海外雜纂

外人より觀たる日本の皇太子及び妃殿下

『ラヒッド、レヴユース誌』

嘉仁殿下は今年廿六歳の御壯年にして未だ海外に行啓せられしことなきは各殿下中恐らく　殿下御一人なるべし。

日本に於ては吾人の　皇室の風習とは異なり、皇子は幼時より其兩親の傍に成長せざるなり。生れて直ちに皇后の下を離れ、お守役の手に渡さるゝなり。次ぎに日本の　皇室より全く離れ、　嘉仁殿下は東京に於ける貴族の學校に入り、こゝに於て同年輩のものを學友として此れと同時に勉學されたり。昔時は皇子は皆　皇室にありて教訓を受け、其年齡に適せざる古書を習ふことが其風習なりしなり。

然れども　殿下は健康の勝れさせ給はぬより幾何ならずして學校を退かれ、家庭教師を招ぎて勉學し給へり、　殿下は殊に體育及び體操に於て訓練を積まれ、虚弱なりし體格より强健、剛壯なる身體にならせ給へり。

殿下は形式的又は命令的の事項を好み給はず、常に成るべく少數の侍者を從へて旅行をせらる。散步は最も愛せらるゝ所にして、其別邸なる葉山の近隣數里の間に住する農民は皆よく殿下の散步せらるゝを屢々拜するを得るなり。

或時、殿下は一老女、蹣跚として小山を上るを見、微笑して其老女に近き自ら持ち給へる杖を與へ、此れ余の贈物なりと宣へり、かゝる親切なる行爲あるを以て　殿下はいたく日本人の人望を得給へり。

未だ廿一歳を終らざる前　殿下は九條節子姫を娶りて妃となし給へり、

妃殿下は九條公爵の息女にして日本人の觀念に從へば甚だ美人なりといへり。

此御結婚は國中無限の熱心を以て迎へられ、東京には花の門を飾り、官省は休日を與へられ、新らしき郵便切手は其祝算として發せられたり。

妃殿下は日本の最も教養ある部に屬し、華族女學校に於て學び給ひ、歌道、生花、琴曲、茶湯殆んど知り給はぬはなし、　妃殿下は二人の幼子を産まれ、日々宮中に於ける雜務をなさるゝことに就て深き趣味を有せらるゝものゝ如し。

露國學生の愛讀書

『リテラリー、ダイゼスト誌』

露國の一雜誌は中等教育を受けつゝある露國の青年男女に向て其愛讀書の何なるかを投票せしめたり。此れに應答したる其數は極めて多かりしがウヰルリアム、リオン、フエルプス氏は此れが計算をなし、以て其結果を公にせり。今其記する所を見るに其數の最も多きはトルストイにして六百九十一票、其中レサーレクションは最も人望ありて二百九十六票の多きを占めたり。彼に次ぎて多數なるは不思議にも、慘くして汚き、ゴルキーにして實に五百八十六票の多數を得たり。第三、及び第四の當選は最も正當なる人にしてドストイフスキーの四百九十四票及びツルゲネーフの四百七十票なりとす。ツエコプー偉大なる嘲笑家ーは四百五十八票を得、其他露國の記者にして百票以上の點數を得し者總て十五人あり。而して怪しむべきはアレキスートルストイ及びレルモントフが百票以下なることにして、露國第一流の詩人たるプシキン及び大小說家ゴゴルも亦百票以下なるに至りては言語同斷なりといはざるべからず。

露國以外の作者にて百票以上を得しものは一人もなく、五十票以上のものは僅かに十三人あるに過ぎず、其中モーパッサンは第一位を占むるものにして八十六の愛讀者を有し、ゾラ、ユーゴー、デッケンス等之に次ぐ。ゲーテ及びシルレルは五十二の投票を得て僅かに

露國流行の錦繪



右手には鳩を捧げ、左手には百合を携へて、中央にましますは、平和の女神の露西亞國。裸かなる半身と、汚き毛脛をあらはし、惡意ある眼附して短刀を持ち、女神の横に迫り來るは日本人なりとや。宜なるかな露國の俗受けに投じて、非常なる流行を極めしとは。

其鋪張の中に入るに過ぎず、沙翁及びサーヴアンテスは五十以下の投票なりとは實に哀れなりとはいはざるべからず。

外國記者中殊にモーパッサンの第一位を占めしは露國人が寫實主義を貴ぶと又一方にはトルストイが其「ユヌ、ヴイエ」等の著作を激賞せしによるなるべしといへり。モーパッサン及びゴルキーは靑年に對して有益なる書籍にあらずと雖もかゝる書の流行するは露國靑年の智力に對しては自由なる選擇を與へ居るに歸因すと論じたり。

日本勞働者墨其西哥移住

『ゼ、エンジニーア誌』

墨其西哥の南部栽培地及び鑛山地方に於て勤勉にして適宜なる勞働者を充分に雇ひ入るゝことの困難を救ふの良策は日本の勞働者を移住せしむるにありといふ考を以て早速其取運びに從事したり。日本政府は今や露國との戰爭酣なるに關せず、大いに其擧を賛し、其臣民の移住に就ては決して出港禁止の令を出さずとの事なれば日本人が彼地に移住するもの多かるべきは疑を容れざる所なり。

モスコー及びウラジミル地方に於ける勞働賃金の每週平均額は左の如し

男子	八弗乃至八弗半
女子	六弗
十五歳乃至十七歳男子	三弗五十仙
仝　上女子	三弗
男女幼兒	二弗五十仙



雜錄

一味妙悟

茅原華山

私は少さい時は、漢詩を作ることが好きであつた、岩溪裳川詞宗の紹介で、當時、日本の三大家の一人と呼ばれた森春濤翁に謁を通じたことがあつた、余は懷より絶句十二三首を書いた詩稿を出して、翁の雌黄を求めました、大抵の詩人は、詩稿を見ると、讀まぬ前から朱硯を磨り始める、一閲したかせぬ間に、直ぐに添削する、之て宜しいとて返へす、自分が餘計に添削した詩には、餘計に圏點を施す、さうして大層に讃め

た評語を付ける、此れでは人の詩を讃めるのではない、自分の詩を讃めるのである

流石に春濤翁は迥に選を異にして居る、余の詩を手にして、再三繰返へして讀まれた、余は實に勿體なく思ふた、余が先生よ、どうぞ直して戴きたいと申上げたら、翁は莞爾として微笑され、只甘く直した所で仕方がないではないか、詩は自分で作るので、他人から作つて貰ふのではない、旣に自分で作るのだから、上手に作るも、下手に作るも、やはり自分の力である、他人に甘く直して貰つては、直して貰つたゞけが甘いのだ、多く作り多く讀む中に、自分で此處は斯うすべきもの、彼處はア、すべきものと判つて來る、翁は更に語を繼いて曰く、お前は大分詩に苦しんだやうだが、詩は平仄ばかりではない、格律ばかりではない、其以上に一つ悟らねばならぬものがある、滄浪詩話に『一味妙悟』といふ語がある、其『一味妙悟』の何物たるを知るに至らば、占めたものだ

余翁に向ひ、其『一味妙悟』とは何を言ふのですかと問ふたら翁はそれは讀て字の如く『一味妙悟』てある、自身て悟るので、所謂敎外別傳、不立文字サと敎へられた

英語の『サムシンク』といふ字は、實に『一味妙悟』より得來りたるものを指して居る、一味妙悟は何を爾に與へるかといへば『サムシング』を與へるのである、『サムシング』とは『或物』である、『或物』とは何ぞやといへば、到底是れ『或物』である、支那に『個中之趣』若しくは『個中之消息』といふ字面がある、こは恰も所謂『サムシング』である、『個中之趣』は到底『個中之趣』『個中之消息』は到底『個中之消息』てはあるまいか、斯かる『神秘的意義』のある文字は、心會するより外はない、點頭するより外はない

（註）滄浪詩話に曰く『禪家者流、乘に大小あり、宗に南北あり、道に邪正あり、學者須らく最上乘より正法眼を具して第一義を悟るべし、小乘禪、聲聞、辟支果の如きは、皆正に非ざるなり、詩を論ずるは、禪を論ずるが如し、漢魏晋、盛唐の詩と、則ち第一義なり、大曆以還の詩は、則ち小乘禪なり、已に第二義に落つ、晩唐の詩は、則ち聲聞、辟支果なり、漢魏晋と盛唐の詩とを學ぶものは、臨濟の下なり、大曆以還の詩を學ぶものは、曹洞の下なり、大抵禪道は唯妙悟に在り、詩道も亦妙に在り、且つ孟襄陽の學力、韓退之を下る遠きこと甚し、而して其詩獨り退之の上に出づるものは『一味妙悟』のみ、惟悟乃ち當行と爲す、乃ち本色と爲す、然れども

悟に淺深あり、分限あり、透徹の悟あり、但だ一知半解なる悟あり、漢魏は尚し、悟を假らざるなり、謝靈運より盛唐諸公に至ては、透徹の悟なり、他に悟者ありと雖も、皆第一義に非ざるなり（原漢文）

嚴滄浪は『禪道は唯妙悟に在り、詩道亦妙悟に在り』といひしが、余の見る所を以てすれば、政治家には政治家の妙悟がある、經濟家には經濟家の妙悟がある、新聞記者にも新聞記者の妙悟がある、藝術家も文學家も、皆此「一味妙悟」の處に至つて、始めて「得心應手」の境に到り得たのである、金聖嘆が水滸傳を評した語を藉りていへば「心之所レ不レ至、手亦至焉」の境に到り得たのである、獨り之のみならず、凡そ人たるものは、人として妙悟の境に到り得て、始めて人たることを得るので、孔子が心の欲する所に從て、矩を踰えずと言ひしが如く、坐作進退、作爲を用ひずして、自然に節に中るのは、此妙悟の境に到り得たが爲てはあるまいか

米國の或心理學者は「人は暗示的動物である」といつた、人生は暗示(Suggestion)あつて、始めて無窮の受用を生ずるのである、天地も、日月も、星晨も、山川も、草木も、禽獸も、蟲魚も、皆個中に「サムシング」があるを暗示して居る、人と人との交際に於ても、分明に言語で、我意思を通ずるよりも、或は動作に於て、或は顏色に於て、或は眼付に於て、或は爲す可らざるを、故らに爲し、或は爲すべきを、故らに爲さずして、以て暗示する場合が多い、而して言語其物に於ても、露骨に言ふよりも、暗示的に言ふ場合が寧ろ多いてはあるまいか

「意味」といふ語源は、何處に在るかといへば、人は暗示的動物であるから、物事を有の儘に受取らずして、其中の「意味」を知らねばならぬからである、金時計を唯金時計と取つては、別に意味はない、宿屋の亭主が、此れは茶代の澤山取れさうな客だとして、上等の間に安置して歡待するのは、金時計の暗示を宿屋の主人的に解釋したのだ、花を唯花と取つては、別に意味はない、テニソンが花を知り、葉を知り、根を知り、總てを知らば、以て神を知るべしと歌ふたのは、花の暗示を詩人的に解釋したのである

人は何よりも先づ人に爲らねばならぬ、今の學問教育は專門家を作り、技藝家を作るに偏して、人を作るの道に至ては、則ち茫々焉漠々乎として、相關せぬやうである、然らば則ち、如何にして人たらん乎

男としてアダムは耕し、女としてイヴは織る、人は働かんが爲に生れた、勞働は神聖なり、勞働すれば、人たるの道は、それで盡きて居る、星を戴いて出て、星を戴いて歸る農夫は即ち人たるの道を盡くして居るのである、終日機械を運轉して、生産を爲しつゝある勞働者は、即ち人たるの道を盡くして居るのである

然しながら此れだけでは、宇宙の向上は期せられない、否、宇宙は人を待たずして向上しつゝ來つたのであるが、此れだけでは、全く無意識的の向上である、人類が他の萬物に比して唯我獨尊なる所以は、獨り無意識的に宇宙向上の大法に從ふのみならず、又意識的に、我れの向上を圖り、社會の向上を圖り、世界の文明、宇宙の經濟に貢献するからである

人が唯無意識的に宇宙の大法に從ふて動いて居る間は、花に鳴く鶯、水に棲む蛙と何の異なる所がない、人が此境に在るを稱して『自然我』といひ、又は『盲我』といふのである、太古の人は即ち此『自然我』『盲我』の境に在て、禽獸と群を成して居つたのである、小兒の如きも、亦實に此境に在るものである。

舊約聖書に、アダムとイヴとか禁園の果實を喰ふてから、人類が墮落したとあるが、余を以て觀れば、此れは人類の墮落ではなくして、人が『我』を自覺したので、即ち人が始めて人たるべき境に進化したのではあるまいか、若し渴しては飲み、飢えては喰ふてのみ居つたならば、何も帝の則を破ぶるの必要はない、動物の世界には、決して道德はない、動物は不道德を行ふことは出來ぬ、動物は全く無道德である、何となれば『我』の自覺なきものに道德のあるべき筈なければなり、夫れを我自由て禁園の果實を取つて喰ふて、神の怒りに觸れたのであるから、人は始めて『人』たるを自覺し、道德を行ふても出來れば、不道德も行ふても出來るやうに爲つたのであるから、之を人類進化の一大段落なりといふても、決して差支がない、人の此境に在るを名げて『僞我』といふのである

人は決して此れのみては滿足はしない、人が既に『我』を自覺すれば、必ず一種の懷疑心が胸中に湧いて來る、諸行は無常である、例へば人の生命は、暫有的で、巖電石火も啻ならぬ狀態で、吾人の生命あるを自覺すれとも、現實は果して確實なりや否や、吾人は時

間の中に生存するに、過去は永劫に去りて、復た還らず、故に非現實である、又未來は未だ實現せられぬから非現實である、故に現實と云ふのは、時計の針の一刻〳〵の刻みである、或學者の如きは、嚴密にいへば、現在と云ふものはないといふた程である、此方面から觀れば、吾人は暫有的で、現象的である、是に於てか、第一には、吾れ「我」を疑はねばならぬ、第二には、萬有の何物たるかを推究せんとするに至る、所謂宇宙感情とは之を言ふのである、「我」を推究して或極度に至れば、我の外に、「サムシング」があつて、我と關繫をして居る、それから天地萬有も「サムシング」があつて天地萬有の源と爲つて居るといふことを、自覺するに至る、然らば則ち、其「サムシング」とは何であるか、時間空間を超越し、因果を離脱し、何等の差別なく、一切平等であるべき「サムシング」で、之を名けて宇宙の實在といふので、一元哲學では、人類及び萬有は、すべて絶對の現象であつて、我と宇宙の實在とは、一にして二、二にして一であると說いて居る、此宇宙の實在は、何物であるかといへば、到底是れ「サムシング」である、佛敎では、此實在を名けて、眞如法性といふ、眞如法性とは何物であるかといへば、到底是れ「サムシング」である、人此「サムシング」を握り得ば、直に「見性成佛」したので「眞我」の境の到り得たので、懷疑の荊棘より出て、所謂「一味妙悟」の花園に入つたのである

蓋し人一たび「我」を自覺し意識した時は、即ち「暗示」の刺擊を受くる始めである、我心は斷えず我に何物をか暗示して居る、見る物、聞くもの、觸るゝもの感ずる物、皆斷えず我に何物をか暗示して居る、カーライルは「宇宙公然の秘密」といふ字を用ひて居る、公然の秘密とは、誰にも暗示して居るのであるが、下愚のものは、終生之を悟り得ない、而して淺人は淺く之を悟り、深人は深く之を悟る、小乘的に、第二義の悟をなすものがある、大乘的に、第一義の悟りをなすものもある、佛陀は佛陀の如く悟り、基督は基督の如く悟り、ゾロアストルはゾロアストルの如く悟り、マホメットはマホメットの如く悟り、天理敎は天理敎の如く悟り、蓮門敎は蓮門敎の如く悟るのである

人の「我ならぬ我」即ち僞我」を自覺したる時代が最も危險なる時代である、總べての不道德、不倫理、

不勉強、不品行は實に此時代の產物である、生を輕んじ、命を愛せず、人を咎め、天を怨むは、即ち此時代の產物である、華嚴の瀧に投じ、淺間の噴火口に投じたる青年も、亦確に此時代の產物である、而して人が更に進んで『眞我』を自覺するに及べば果して如何、蘇東坡の詩に曰く

　廬山煙雨浙江潮。未レ到千萬恨未レ消。到得歸來無二別事一。廬山煙雨浙江潮

此詩は東坡が『所謂』妙悟した詩である、未だ到らぬ前にも、廬山は煙雨、浙江は潮であつた、既に到り得て歸り來つた後も、廬山は煙雨、浙江は潮であつた、農夫勞働者は未だ到らぬものであるが、一意に勞働して居る、人既に到り得て、歸り來つて見れば、一意に勞働するといふことは、即ち人の道である、道の本源は天より出づ、即ち天の道である、と悟るより外はあるまいと思ふ、無意識的に、向上するのも、勞働である、意識的に、向上するのも、勞働である、然らば則ち二者毫も異つた點がないかといふに、さうではない、同じ勞働をするのでも、前のは『無理想』である、後のは『有理想』である、人の花に啼く鶯、水に棲む蛙が歌を詠むのと異つた點は、即ち此處である、『大人は小兒の心を喪はず』といひ、『大聖は愚なるが如し』といへり、然しながら大人は決して小兒ではない、聖人は決して愚人ではない、其中に『サムシング』がある

　宇宙は常に新なる光を與へんとて、我々に向て『サムシング』を暗示して居る、靜夜の鐘聲を聽いては、夢中の夢を喚び醒まし、澄潭の月影を看ては、身外の身を窺ひ見るの工夫あらんことを要す。

希臘藝術の一瞥

笹川臨風

歐洲文化の源なる希臘半島は、美しくもまた神々しかりけり。是れ曾てトロイ城の勇士を生みし處なり。アテネの策士、スパルタの精兵、テーベの英才孰れか一代の花ならざるべき。辨士は雲の如く、才子は林に似たり、千古の哲理家、稀世の文豪は、文明の歷史を飾り、藝術の鉅匠は、長く後世の渴仰する所たり。その山は紫に、その水は明に、天此に偉大の惠みを垂れて、民は進取の氣象に富めり。試に半島を一觀せよ。ヲリムプスの山盤紆として海に臨み、翠なす丘陵萬疊の

間に白玲瓏の巓を現して、遙にピンダス連峰の外圍を形造れり。神靈此に窟宅して、ゼウスの神は電光下界に射り、ヘルメス及びアテナの神は遠く恵みの露を降し給ふ。山の麓には、河伯、水をペネウス河に灌ぎて、溶々銀蛇の如く、森の神は、そこに桂と甘蕉との亭榭を作りクロリスの女神は、美しき谷に俯瞰して、優しの花もて之を飾れり。更に東して海を踰ゆれば、アトスの山、巍然として、サロニック灣頭に倚り、テムペ一條の谿は豊かなるテッサリー平野に入るの狹路を形づくる。北にはヲリムプス山聳え、西にはピンダスの山々屏風の如く、ペリヲン、ヲッサの海は自然の天險たり。目も遙かなる平野の南に入れば、ヲルツリス山はテッサリーの南を界し、エータ山は中央希臘の北を繞り、獨り南方綫の如くテルモピレーの阨險はエータ山と海との間を奔れり。是れ昔し一世の雄レオニダスが三百の健兒と倶に奮戰して、スパルタの勇名を轟かせし古跡なりとぞ知られたる。北方の峯巒、南方のパルナソス及びヒメタスはボエヲチアの沃野を繞り、パルナソスに近く、デルフヲイにはアポロニの神廟立てり。即ち希臘全土の中樞にして、その神託はヘラス民族の運命を司りぬ。更に南して地峽に出づれば、是をコリントとなす。近くその南にはヲネアンの岡立ちてペロポネソスの門口を閉ぢたり。アルカヂアの中土は連嶂之を繞り獨り西に狹き口ありて、アルヒユース河、海に朝せり。而してアルカヂアの諸山は支脈を四方に出して、アルゴリス、ラユロア、メッセニア、エリス、アケイアの諸州に分てり。

如上、希臘全土を通觀するに、高山、屏嶂を作りて、饒かなる諸小原野に分つと雖も、獨り大路の國土を公開するものあり。何ぞや、海是れなり。港灣出入して海岸線長く、自然はこの形勝を與へて、古希臘の民を或は航海に長ぜしめ、或は山間に馳騁するに馴れしめ、之に賦與するに各殊の氣象を以てせり。海は屏障たらずして、亞細亞沿岸の希臘殖民地に通航する公路となれり。埃及より欵乃一曲、滿帆の風に送られて、蜒蜿たるクリート島、白皚々たるイダの山を遠く烟波浩渺の間に望みて、ミノス王全盛の古を懷ひ、エージアンの海に入れば、ペロポネソスの山、峯白く、山翠に下、深藍の水に臨み、マレアの岬角、斷崖千尺、削るが如く、その古はアテネ航海者の難所たりき。右には炎々たる噴火山を眺め、ついでメロスの島影に立寄れば、此はアテネ技術の精とも稱すべきヴイナス像のありし

處とこそ知られたれ、アルゴスの曲江、前に開け、一灣鏡の如くにして、アルカヂアの山、新粧を凝し、アルキベラゴーの諸島點々として、パロス・ナクソスの島々、フヲエブスの靈峽、いづれも、諸神勇士の奇蹟を留む。舟をサロニク灣頭に繋ぎて、四顧すれば、右には玲瓏、大理石を欺くサニウスの峯あり。其巓にはドリア式のポセイドン廟を遺して、今も猶古の如し。巍乎たる神廟空に倚りて、日光と相映發するとき、遠く海のあなたより還れるアテネの舟夫をして歎呼措く能はざらしむ。エージナ海を過ぎて、春風一路、サラミス島に向へば、ペイレウスの海峽、甕の口を括るに似たり。嗚呼是れ曾て希臘聯合艦隊が、雲霞の如き波斯大艦隊を破りて、西歐文化の爲に萬丈の光焔を揚げし遺蹟なり。エーガレヲス山の巓は波斯王クセルクセスが戰を觀るの玉座を設けし處とぞ傳へらる。然れども事や人や總べて茫々たり。是を山水に問うて答へず、月明き夜、漁郎の歌に滄浪清調の一ふし、獨り古を弔ふ征人の青衫を濕すあるのみ。

希臘の藝術史はまた建築彫刻の藝術史なり繪畫盛ならざるに非ずと雖も、固より建築彫刻の偉大なる發展ありたるに似ずペリクレスの黄金時代はアテネ全盛の世にして、アテネは希臘文明の中心なりければ、希臘文化は此時代以後に於て、その高潮に達し、繪畫の觀るべきもの、丹青に堪能なる藝術家の我が藝術史を飾るものありと雖も、輪奐の美、半島到る處に異彩を放ち、神の像、人の像とともに、精巧の妙技に達したるに比すれば、甚だ云ふに足らず。その古に遡れば、建築に在りては、ミケネーのアトリウス寳藏は、埃及、アッシリアの感化を受けて、上代の珍たり。ドリア式の質實、イヲニア式の瀟洒、コリント式の優美は、希臘建築の基にして、三期の區分は發展の跡を示せり。ソロン王より波斯戰爭に至る第一期の遺物には、カストル・ポラックスの殿堂は今もその一片を殘し、ペッウムのポセイドン廟は此時期の白眉と稱せらる。ピシストラトスの世には、デルフヲイのアポロン廟も再興せられ、アテネのゼウス廟も修復せられぬ、アトスの殿堂も廢墟、空しく落日蒼茫の裏にありと雖も、曾てはポセインドン廟とともにドリア式の偉觀なりしなり。第二期は波斯戰爭よりアケドニア全盛時代に涉りて、希臘文化の紛紅駭綠、百花爛熳の世なり。エージナの殿堂はドリア式の建築にして、アテネのテッシウス廟はアチック・ドリア式の最も粹なるものなり。希臘建築の

粹なるアクロポリスのパルテノンは、一たび波斯人の一炬に憐むべし焦土と化したりしも、星霜十六を費して、紀元前四百三十八年に再興の工を竣り、神彩陸離、アテネの鎮たり。殿はイクチヌス・カリクレーツの手に依りて成り、彫刻の大家フイヂアス及びその門下之を装飾し、イヲニア式の精華を鍾めて、長く藝術史に朽ちざる響を留めたり。アクロポリスのプロピデー門もまた同じくペリクレス時代の華にして、ムネシクルスの心血を瀝ぎて造りし所なり。アクロポリスのエレクテイウム堂エリウシスのデメテル廟、ラムヌスのネメシス堂、ヲリムピアのゼウス廟等、いづれも此時期に屬せり。第三期は希臘自由衰退の時期に至るまでを云ふ。歷山大王の雄圖は東洋の榮華を輸入して、希臘文化に偉大の影響を及ぼせり。戯場大厦の建築頻々として起りコリント式はその壯麗優雅を以て此時代の華となれり。テゲアのアテネ・アリアはペロポネソスの殿堂中の奇觀と稱せられき。リシクレーツの紀念塔、アンドロンクス・キレーステスの風塔は、コリント式の面影を留め、カリアのプリエネに於けるアテナ廟はピテウスの妙手に成りて、歷山大王の歸依も淺からず。ミレトスのヂヂミアン・アポロン廟は一代の精工を以て目せられぬ。

更に彫刻を見れば、ヲリムピアのヘラ堂のシセリユースの胸像は希臘最古の逸品にして、エージナのミネルヴァ廟の諸像は遠く妙技を千載の下に殘せり。パルテノンのアテナ像はフイヂアスの傑作として、その名高く、殿中の諸彫刻は、フイヂアス及びその門下の手に成りて、妙盤に通ず。ヲリムピアのゼウス像は、今日羅馬にあるオートリコリのゼウス像の模本として傳ふるものあり。ニヲベ諸兒の遭難はスコパスの巨腕に依りて刻まれ、ヴイナス像、ヘルメス懷兒の像は、名工プラキシテレスの一向專念の技に成り、リツポスの精巧は、今日ナポリのファルネース・ヘルキユールにその模型を存じ、メロスのヴイナス像は形韻倶に至きの致ありマケドニア時代に入りて、ラヲコーンの像はローヴ派の最も巧なるものにして、後世レツシングの好題目となり、ナポリのファルセース・ブル之と相對して遜色なし。垂死の武士はペルガモス派の作として神情兼ね到るの境に達せり。

地も華やかに、歷史も華やかに、藝術も華やかな希臘半島の古に逍遙すれば、縹緲たる神韻幽にして盡きず。形釋け、神凝りて、我は夢幻の境に遊び、理想の

郷に搖曳するなり。(西洋書史中、希臘篇の緒言)

往時に於ける歐人の北海探險者

文學士 煙山專太郎

一、北洋航路の探檢

歐人の多く我が北海地方の探撿に從事せしは近く十八世紀末以降の事に屬すと雖、其大西洋よりして北西し又は北東して東洋の地に達せんと努力せしは頗る古き時代にあり。蓋し喜望峯の發見や、印度に至る水路の初航は十五世紀の末造に於て已に之ありし所なりと雖、數千里の遠き、アフリカ大陸を迂回して印度に至らんとするは、徒に時日を要すると多く、航海者の實に堪へ得ずとなせし所なり。これ大膽なる當時の歐洲探撿者の大西洋よりアジアの北方を回航し、又はアメリカ大陸の北方を通過して從來の航路によるよりも、假令、稍、危險を免れずとするも、一層近き新水道を發見せんとしたりし所以なり。今之を太西洋より北西するの航路を採りしものに付て見るに、十五世紀の末にありてウエネチアの航海士ジヨン、及セバスチアンアボットの兄弟あり。時のイギリス政府の招聘する所となり、一四八七年必成を期して人跡未達の北洋に向ひ、遙に北緯六十度の一帶にまでも進達したりしかども、四周に徐行する氷山の爲に到底其行を繼續する能はず。僅にニユーフアウンドランド及ラブラドルの海岸を發見して歸りたり。カボットの探撿は遂に失敗に歸し、之と同時にブリストルの一商人某は更に北西の探撿を企て、之をヘンリ八世に乞ふ所ありしも、終に其意を遂ぐること能はざりしが、然れども此時よりしてアメリカ北方の探撿は漸にして時の歐人の注意する所となり、十六世紀の後半期に及びてはサー、マルチン、フオルビツシエルは第二の北西航海を企て、一度其功を成さゞりしに及び、更に一五七七年五月を以てエリザベス女王の保護の下に第二回の探撿船隊を艤裝してオークニー諸島に至り、進で北緯六十三度三十分に達し、アメリカ大陸の北方、北緯五十二度に上陸し、蠻人を發見して歸りたり。續て一五八三年、サー、ハムフリー、ギルバートはアメリカに沿ひ北航してセント、ローレンス灣に至り、越へて八五年に於てはジヨン、ダヴイス、北西航してグリーンランドとアメリカ

大陸との間なる海峽を發見せり。これ即ダヴイス海峽なり、彼、北緯六十六度四十分に至り、從來、北方面に於て何人も到り得ざりし最高緯度に達しぬ。此後十七世紀の初に至りてはハドソンは一六一〇年に於てハドソン灣を發見し、三一年に於てジヤコブソンの之を探撿したるありと雖、要するにアメリカの北方より北洋を横斷して東洋に到らんとするの企は全然不可能なりとせられたりしが如し

二　シメオン、デジユネフのベーリング海峽の發見

更に之を北東の航海に就て見るに、十六世紀十七世紀の頃歐人は當時地理學者の所謂カタヤ即キタイなるアジヤの東方とアメリカ大陸との間にはアニアン海峽なる水路の存ずるありて、南洋と北洋とに連絡することを信じければ、彼等は寒氣にして凌ぎ得らるゝ限り、太西洋より北東、アジアの北岸に沿ひて東せば、アニアン海峽に達し得ざるの理由なしとなし、イギリス人の如きは之を以て北西の航路を捨ると同時に亦北東に向つても船隊を派して此目論見の果して可能なるや否やを實驗せしめたり。即、此計畫によりて一五五三年、サー、ヒユー、ヰロービーは三艘より成る船隊を組織してロンドン市民の盛大なる送別の下に其春、テームス河口を解纜したりしが、一行は進てノルウエー北端のノルドカツプを回航し、北緯七十二度の地に到るを得しに拘らず、海路を發見せざるに、早くも氷の閉す所となり、ヰロービーに副たりしリチヤードチヤンセロルのみはアルハンゲルスクより、露國を横り、長き橇旅行の後、辛うじて歸國することを得しかども、其餘の船員はラプランドの海岸に於て盡く凍餓の爲に斃れたり。ヰロービーの此悲慘なる出來事ありて後、三年即一五五六年を以てステフアン、バローは前者の失敗に屈せずして又其後を襲ひ、更に東してノーヴアヤ、ゼムリヤの二大島を發見したりしが、而も亦遂にアニアン海峽に至ること能はず。此後ペトレウス、ジヤクマン等の徒も亦北東航路の發見に從事したりしも、ノーヴアヤ、ゼムリヤより東すること能はざるの有様なりしが、一五九四年に至りてヰリアム、ベレンツンなる者、アジヤ大陸の北岸に沿ひて是非に日本に到らんとし、ノーヴアヤ、ゼムリヤ南方の海峽（今のカルスキイエ、ウオロータ海峽）を越へて終に東航二回に及べり。此時に當りオランダ人は慶長二年即一五九七年を以て初

めて我が平戸に至り、又其本國よりは日本との通商關係を開かんとて翌一五九八年を以て五艘より成れる第一回の遠航船隊を派遣したりければ、(此遠航隊の中四艘は難破し、唯一艘のみは一六〇〇年を以て豐後に漂着し、乘組員中英人アダムス及オランダ人ヤン、ヨウステンの二人は大阪に至りて家康に謁見し、永く江戸に留まれり。漂着船の船長クアケルナークは五年の後歸國を許されしかば、彼は日本との貿易の好望なるを本國に通じ、本國よりは一六〇七年を以て更に十三艘より成る第二回の遠航隊を東派し、一行恙なく一六〇九年を以て平戸に着してヤックス、スペクスは一行の代表者として駿府に家康に面し通商の免許状を得たり。これよりオランダ貿易漸にして盛大となる。)これ等北洋東航の冒險を見て、若し新にこゝに日本渡航の航路を見出すことを得るに至るとせば、喜望峯迂航の時日及勞力を縮減することを得て如何に自國將來の貿易事業に利あるべきかを測算し、成功の曉に於ては莫大の賞金を付すべきを約してベレンツンをして第三回の探撿に從はしめ、彼を司令として大小の二船をヤコブ、ヘムスケルク及コルネリゾン、ライプに卒ゐしめて發せしめたり。二船、ノーヴアヤ、ゼムリヤより行くこと北方七度、こゝに綠草あり、家畜あるの一大陸を發見しぬ。(此の如く記しありと雖、これ恐らくは錯誤ならむ)然れども亦終に東漸する能はずしてアムステルダムに歸れり。此後十餘年にして一六〇八年、及九年、ヘンリ、ハドソンはイギリスより發し、アジアの北方を横らんと企てしが、二回共にノーヴアヤ、ゼムリヤの西岸以外に出づること能はず。續て一六二五年にもコルネリウス、ボッスマンなる者、オランダより出帆せしかど、僅にカラ海の西邊に到るを得しのみ。これより三十三年にして、デンマルク政府も亦此探撿に從事したりしが、これ又ノヴアヤ、ゼムリヤの南隣ワイガツ島より外に達するを得ずして已み、一六七六年には英國のカピテン、ウッド亦之を試みて失敗せり。後ノルウエーの漁夫のカラ海に達せしことを聞きてオーストリア政府は又遠航隊を派し、其目的を遂ぐること能はざりしにも拘らず、偶然スピツバーゲンの東方に一陸土を發見し、之をフランツ、ヨセフ州と命名したり。此の如くに歐人の二百年來凝望して已まざりし北方の航路は遂に之を發見すること能はざりしに、一六四八年に至り、彼のアニアン海峽即後のベーリング海峽は偶然一のカザクによりて通行せられたり。此者、名をシメオン、デジユネフと云ひ、チウクチー人民の居住する東方に赴きてこゝに象牙を得來らんと欲し、六月二十日を以て三艘の木舟に乘じてシベリ北岸のコリマ河口を發したりしが、進むこと暫くにして次第に歸路を失ひ、已むなく、極力道を開き海岸に沿ひて東進しつゝ終に一の海峽を通過し、上陸せり。これ實に九月なり。彼の一行中、此進

航に於てアメリカ大陸を見たりと云へるものなしと雖、思ふに彼等のアラスカ半島を目撃せしは疑ふべからざるが如し。何となれば彼等はアジアの方面よりして遥に高きプリンス、オフ、ウエールスの海角を晴天の一日望みたればなり。デジュネフが此探撿は實にベーリング北海航行に先つと一百年、彼が海峽發見に於て祖鞭をつけたるの大功は決して無視する能はざる所なり。

三、オランダ人の極東利權の擴張

（金銀島の探撿）

扨てオランダ人は一六〇九年初めて御朱印を得てより、正德年間に至るまで一百年の間盛に貿易を營み、殊に寛永十四年島原の亂あり、南蠻人即イスパニヤ人ポルトガル人が全然長崎より放逐せらるゝに及びて寛永十八年（一六四一年）を以て平戸より出島に移され、盛に通商の事に從ひたり。出島に移されてより二年にして彼等は初めて太平洋の南海よりして北海を探撿するの擧を企てぬ。蓋し歐人の從來計畫したりし北洋航路の發見は數回の失敗と共に到底不可能事たるが如くに認められしを以て、日本の貿易事業を專握せるオランダ人は早くも己が殊遇の地位を利用して益々利權を極東の地に擴張せんとはしたりしなり。是より先、歐人の間に一種の流言あり。曰、日本奥州の東、百五十哩ばかりなるに二つの島あり。日本人は之を以て己の領地なりとし其小なる方、即北にあるものに銀島の名を附し、其南にある大島に金島の名を附し、歐人の之を窺窬せんとを恐れて極めて秘密にしつゝ有と。貞享三年（一六八六年）我國に來り時の將軍に謁見したりしオランダ、カピタン、ケンプエルは己の書中に記して、イスパニア王は十七世紀の初年に於て此小說的寶島を探らしめん爲め、熟練なる水夫を送りて之に向はしめたる由を記せり。（クルーセンステルンの世界週航記には一六一〇及一一年、イスパニア人はアカプルコより一船を日本に派出し、此寶島に訪らしめんとせしに失敗に歸せりとなり）此イスパニア人の失敗にも拘らず、オランダ人は斷然此等二島の探索を兼ねて日本の東方より韃靼の沿岸に航し、アメリカ極西のポリサング河（かゝる名の河なし。オランダ人は當時之あるを妄想して其地圖を作りたりしなり）に至らんとを目的とし、バタビア領事ファンデイメンは、一六四三年（寛永二十年）二月三日を以て二船を艤し、之をしてバタビアより發せしめたり。マルテン、ゲリッエン・デ・フリース、カストリクム號を率ゐ、コルネリゾン・スハエプ、ブレスケンス號

に船長たり。二船日本の南より北東に航し、進て三十九度に至らば日本の極北端に達すべく、なほ之より北西して北緯五十六度に及ばゞこゝにはポリサンゲ河の南海に注入するあり。其河に有名なる貿易場ありとなして我が奥州の東岸を北行せしが、五月十九日夜、三十四度の邊に於て暴風の爲め兩船互に相失し、ブレスケンスはカストリクムを探求して日本北東隅に至り、頻に所在を尋ねたるも、遂に再び邂逅すると能はずして月の末、又日本沿岸に至り、(一書に云ふ、スハエブ此時我津輕海峽を發見したりと)六月十一日、淸水を得んとて北緯四十度の南部港に入り、(折角研究中なるも、此港の何處なるかを未だたしかむるに由なし恐らくは南部八戸港には非ざるか)目的を遂して更に出帆し、針路を日本の南東隅に向けて行くと二百里ばかりに及びぬ。然るに南風强烈、加ふるに潮流の急なるが爲に次第に北方に流され、洋上に漂ふと四十八日にして七月末又再、南部港に入り船長スハエブ以下十人、之に上陸したりしが、港の日本官吏は陽に大に之を歡迎するの樣して俄に起て一同を縛し、終に之を江戸に送致せり。オランダ人は日本政府嚴禁する所の耶蘇敎を弘布するものに非ずやの嫌疑を被りて嚴重なる訊問を受けしが、四ヶ月の拘留の後漸にして解放せらるゝとを得たり。ブレスケンスと別れたる今一艘のカストリクムはこれよりも遥に北行して蝦夷島の東に至り、こゝにエトロフ及ウルップの二島を發見して前者を國家島、後者を商會島と命名し、兩島間の海峽にはデ・フリース海峽の名を、クナシリとエトロフとの間にはピコ海峽の名を命じ、なほ進てサハリンの東方に至りて歸れり。これより先、一六一八年歐人として初めて蝦夷島に入りたるフエスイタの宣敎師ジエローム・デ・ザンジエリは松前に渡海して此地方の言語風習を究め、當時世人の信じつゝありし蝦夷の支那、韃靼の半島なりてふ説の妄なるを辯じたりしが、カストリクムのデ・フリースは身親く北地を踏査したりしにも拘らず、ラペルーズ海峽のあるを知らずしてサハリンの蝦夷島と同一連地の一大邦土たるを信じつゝありき。之を要するにオランダ人の此探撿は金銀島を發見せず、韃靼の岸に達せず、アメリカの西端を究めず、全然失敗に了りて、これより後しばらくヨーロッパ人の亦來りて北海に渡航せんとするものなく、百五十年の久しき、歐人の日本北方に關する智識は終にジエロームの覺書とデ・フリース及スハエブの紀行との上に出づると能はざりき。

四、露國東方蠶食の歩武大に進む

（露船、我東北海に跳梁を試む）

此の如く西ヨーロッパの人々が殆んど北海あるを忘れつゝありしが如きの時に當りて復、大に人心を刺戟して彼等の北方冒險心、探撿熱を鼓勵したりしものは實にロシアのアジア極東に於ける經營事業是なりき。ロシアは既に十六世紀の中葉よりしてシベリの侵略に從事せしが、其東方蠶食は年所を經るに從ひて次第に其歩武を進め、十七世紀の末に至りてはオホートスクの海濱に達し、更にカムチヤツカの大半島を發見するに至りたりき。時恰かもピオトル大帝の御代に際しけるが、慧眼なる大帝は自國の外國貿易の殆んど外商の專握する所となりてロシヤ人民は空しく手を懷にして彼等の收利を傍觀するの憫むべき地位にあるとを慨嘆し、鋭意、地を極東アジアに拓き、民人を移殖し、土地の利益は擧げて之をロシアの物たらしめざるべからずとなり。而して之れと同時に帝は北海探撿の一刻も忽にすべからざるを斷じ、殊にカムチヤツカの沿岸を窮め、並にアジア、アメリカ兩大陸の間隔を識知するは將來の經營施設の爲めに最も緊切の事業たるとを認めて一七一〇年代よりして或は船を艤してオホトスク港よりカムチヤツカに向はしめ、或は千島列島を探らしめ、其逝去の稍以前に於ては、有名なるベーリングを起して此事に當らしめたり。是に於てベーリングは船舶構造に必要なる材料と數多の造船船匠、鍛冶匠、等とを率ゐ、スパンベルグとチリコフの二尉官を幕僚として一七二五年春、彼得堡を發し、陸行ヤクートスクに著し、一七二七年七月を以て一行漸にして盡くオホートスクに到れり。此旅行日を閲するもの實に二年半に及ぶ。以て當時シベリ交通の如何に不便なりしやを想見すべし。ベーリングは之より迅速に材料の組み立てを了へて翌一七二八年七月を以て第一回の遠航に出て行きたりしが、此行、北緯六十七度十八分なるセルジエ・カーメン岬に及びてベーリングは以てアジアの極端なりと誤認して歸り、翌年更に第二回の遠航を行ひてアメリカ大陸を發見せんとしたりしが、遂に之を遂げざりき。彼は之より彼得堡に歸りて具に事情を復命し、アンナ女帝に提言するに、此失敗に屈せずして尚ほ新なる探檢船隊を組織し、以てアメリカの沿岸を探らしめんとを以てせしが、女帝之を嘉納し、直に八

人の尉官を任命し、之を三分し、其一をして多年ヨーロッパ人の探撿して終に其功を收むる能はざりし北洋より極東アジアに至らんとする航路の可能なりや否やを檢せしめ、其二はスパンベルグをして之を率ゐしめて日本近海を探檢せしめ、第三はベーリング自ら之を主宰して遠航第一の目的たるアメリカ、アジア間の地理を究めしめたるに、レナ河口を發して北洋より東航の途に就きたりし第一の探檢船隊は終に南洋に通ずる水道に達するに至らずして氷山の爲に其前進を抑阻せられたり。（この後此航路は主としてロシヤ政府の計畫により、幾度となく、探檢せられたれども、永く其目的を遂ずると能はざりしが、一八七九年に至り、スウイデンの大探險者ノルデンスキヨルドは汽船ウエガ號に乗じて東航、首尾能くベーリング海峽を通過し、歸途我横濱へ立寄れり。）スパンベルグは此間に於てオホートスクに至り、頻に船の竣工を取り急ぎて一七三八年漸く之を進水せしめ、萬般の準備全く成るに及びて六月、其三船希望號及アルハンゲル・ミハイル號等を率ゐて先づ千島及日本の近海に至り、翌年第二回の航海に於て一船、嵐の爲に分離し、スパンベルグは北緯三十八度四十一分及二十五分の二ヶ所に於て、他の一艘に長たりしワルトンは三十八度十七分より四十八分に至るの間に於て日本本州の東岸に接觸したり。我國の舊記に元文四年、仙臺及安房の海岸に近着したりし異國船とあるは實にスパンベルグがロシアの探檢船隊たるなり。

今舊記によりて當時の有樣を見るに、元文四年一七三八年五月二十三日、仙臺、牝鹿郡の沖合に日本人の見なれざる船出沒し、翌二十四日、亦亘理郡濱沖にも現れ出でたり。二十七日。薄暮、牡鹿郡網地濱の一漁夫、漁に出でゝ田代濱沖にさしかゝり、空腹なるまゝ急ぎ歸陸せんとしつゝありしに、會、大船一艘近づき來るに遭へり。之を熟視するに實に外船なり。船上に大男四五十人あり。何やら食し居るの樣なる故、飢に堪へて手まねにて食を乞ふの態をなせしに、彼は其食する所のパンを與へ、漁夫に向て煙草を乞ひ、其望を容るゝに及び十字を刻する札一枚を渡して行けり。此船なほ近海に出沒せしを仙臺に回へりたりしかば、藩臣、千葉勘七郎なる者、見分の爲に急派せられ、即該船に近きて之を見物せんことを求むるもの、如くせしに彼は直に之を招きて船室に請じ、船將出でゝ壯に酒を與へ、又萬國地圖を出して日本近海に至りしを云ひぬ。船中、武器を見ず。只獸皮堆積するのみ。田代濱沖にある異船に向ては名主善兵衞、赴きて船中殘る隈なく、見物せり。此時善兵衞の會釋せしに、外人は彼の頭を撫して其手に油のつきたるを見て一笑せしと云ふ。又同所

沖合にて谷川濱の漁夫某は此異船にあひたりしが、船中より聲を發してトバコと云ふより、彼はこの携ふる所の煙草を把出し、之を船中に投げ入れ、船中よりは又其代りに銀貨を之に付與したり。此月二十五日、又、安房國にても、長狹郡天津村の二里沖に異船一艘出現し、數名の外人、端艇に乘じて陸岸近く漕ぎ來り、手に水桶を提げ、何れも靴を穿ちて上陸し、井戸を尋ねて水を汲み、糸に連ねたる玉十七、外に玉七個を置き、謝するの意を示して去り、又井戸の傍なる漁夫太郎兵衞の宅に腰うちかけて其家に在る煙草を引寄せて之を喫せり。筆紙を與へて書せしめんとすれども書せず。なほ隣家の戶口に置ける大根數本を取り、銀貨を置きて端艇に向ひ去れり。家人之を返さんとするもきかず。即事の顛末を名主に急報せしかば、吏員馳せ來ると雖、異船ははや錨を揚げ南に向て出帆せし後なりき。後これ等の銀貨、札及玉はそれ〴〵地方の藩侯より之を幕府に傳送し、幕府更に之を長崎奉行に下し、オランダ、カピタンをして鑑定せしめしに銀貨はロシアの貨幣にして札は骨牌、玉は坊間鬻く所のものなりしと云ふ。これ實に吉宗の時代にしてロシア人の我國に來れる、之を以て嚆矢とすべし。スパンベルグは又此時普く千島列島を探りて其二十二島を製圖し、續て一七四一年及四二年に於ても亦其探檢を行ひたり。シムシル島とウルップ島との間なる海峽は一七八七年に至りてラペルーズ之を横行してブーッール海峽の名を付したれども、こは實に一七三九年に於て日本よりカムチヤッカへの歸途、スパンベルグの既に通過したりし所なり。

（未完）

中亞馬蹄の塵

柞原生

▲銅の茶グン。　初めて喀什噶爾（カシュガル）の城に入りし時。旅行の最要具なる茶グンを買はむとて。街上を搜し行た、茶ダンは砂漠中の旅行中之れにて水を汲み來り、之れにて茶を沸す等、實に有要なる茶鑵である、大抵銅製のもの許りであるが、鐵製のものが衞生上宜いからそを求めむとて搜したれども見當らぬ、そこで一行の一人が實に銅製ばかりで困（コマス）と初めたら、汝が銅でも宜いと合した、すると他の一人は苦み切つて、アカネーしやれだとつぶやいた

▲コスミック、エモーション　是も喀什噶爾で或る

ロファザーヘンドリックスと云ふ幾十年中亞の天地に彷徨する羅馬舊敎の僧侶と種々の話の末は、理窟ポイ問題に入りてコスミックエモーションの話に移りた、すると側に徐かにシガーを吹かして居た某英中佐はCosmic emotion ?! oh, that is earthquake! と鋭い横鎗を入れたので、話の腰を折られた

▲踊の所望を受く　庫車滯留中ある日ソゲッテクジヲックと云ふ、砂漠の裾野の一村に到りた、村人は一行の接待の爲めに、舞踏會を催した事がある、歲五六十の老人より十六七の娘達迄三十人許り集つて、一行の前に輪になりて危坐した、踊は此の坐せし者の中より女一人男一人立あがりて、音樂に合して舞ふのである、音樂と云へば胡桐胴のピタヂャミセン見た樣な三絃に、片皮張りの大皷と、外に皿の腹を叩いて賑敷合奏するのである、二番三番と舞ひ行きて一坐の者悉く舞ひ終りた時、主人は生に一番の踊を所望した、固辭したれとも衆は聽き容れぬのみか、土地の風なれば强いて舞ふて一同を嬉ばせて吳れと、一坐の中の最も秀逸の美人を連れ舞に起たしめた、生も最早辭み兼ね且つ半發地の舞樣何程の事やあるいざ舞つて吳れむと、土耳其流の上衣を着て舞ひ初めたが、薩張步調が音樂に合はぬのと、上衣の長袖を矢鱈に振り廻はすので連舞の邪魔をするので、一座ドート大笑となり生は恥を忍で坐に就いた、爾來舞の所望は眞平と云ふ事にした、

▲氣の利た贈物、　庫車の近莊クムトラ村に到りし數週前、其村に彼の獨逸の探檢家グルンウッデル一行が一週間許り滯在した事がある、一行の宿坊も萬事勝手が分つて居てよいと云ふ事で博士一行の寓せし民家に定めた、土人の家に宿るには其謝禮として幾干の金錢を以てせんより土人は寧ろ文明國より齎らし來りたる物品を喜ぶのである、鑵詰の殼や石鹼の空箱、洋紐や古シャツの類悉く重寳の贈物とならぬはない、宿りし此のクムトラの民家の主人は博士一行が多くの珍品を惠まれたとて賞讃措かず、其品を一々大事に室内に携へ來りて見せた中には發堀用に用ひ果した洋蠟、鑵詰の殼、油藥、貝殼細工の玩具等であつたが、其中一個の實入りの鑵詰があつた、主人曰く其中に何があるかは知らねども確か七五三の大した馳走がある樣に洋人の話てあつたとさも得意であつた、生は好奇心にかられて主人の同意を得て此の鑵を開いたら、驚いた、これら回敎徒の假令人糞を甜めても是丈けは嚴禁物なる豚肉の鑵詰てあつたので、主人は餘りの事に物をも言はず呆

をつまんで鏟ごめ前の小川にどぼんと投じた

▲氣の利かぬ稅關吏　中亞の食事の單調一味なるには大閉口であつた、一年三百六十五日羊の肉食ばかりである、會々淸人に邂逅して支那料理にありつく事もあれば胃腑の虫を慰殺せむ許りである、されば氣性も下賤となりて淸人さへ見れば、支那食にあり付きはせぬかと先づ夫を考へる樣になる、或る日一行の荷車はカラユルグンと云ふ所についた、此の所に淸人の稅關吏が駐在して通過する貨物に課稅して居る、されど生等洋人の荷物は彼等指一本さゝぬ事となりて居るのである、然るに洋人の荷物と知らざりし稅吏は之を檢せむとし、車子は洋人の荷物なればと之に反對して、玆に淸國稅關吏と土人との間に一悶着が起りた、騎馬にて幾淸里先きに進み居りし生等は、此の注進を得てトッテ返し直ちに稅關に怒なり込むだ、生は殊更に聲を荒らゝげて、生等の荷物を檢せよと云ふ新疆巡撫の差紙でもあるか、さもなければ指一本させるならさして見よと、叱りつけたは勿論土人に對して生等洋人の威嚴を張る考てはあるが、今一つには稅吏の詫の結果は、支那料理の晩餐にありつきたい賤しい下心もあつたのである、稅吏は只管謝罪して遂に一聯の揮毫を生等に所望した、此の謝罪と揮毫の謝禮とは、必らず晩餐の招待となる事と下心の慾が半ば成就した氣で、一應木賃宿に引返した、暫くして稅吏衣を改て訪ね來れりそは必定案內ならむと、胃腑も聊か熱して來たが、稅吏は種々の御世辭に生等を賞め揚げてさらばと辭し歸たので落膽一方ならず晩雪生と共に羊鍋に對して無言て無意識に食事を了つた、

▲飛入りの舞姬　庫車に寓居せし時、庭園の小亭に庫車駐在の淸國官吏を招きて、支那料理の饗應した事がある、燕巢やら、鹿筋やら、數奇を極めし丈けに、倫敦のサボイレストランに、贅澤なるアラカートの晩餐をせしよりも高價の勘定となり、若や間違がありしにやと勘定書を再三再四檢した事がある、其宴會の時、籬の上に昇りてアレバンの酒宴を見物し居た土人の小娘があつた、アレバンの從者は直に此の小娘を連れ來りて、食卓の傍にて宴の終る迄舞はしたので、宴中一輪の花が加はりた、此の小娘は未だ十一歲の髫髮の兒女であつたが、聞けば既に結婚して廿五歲になる夫ありとの事である、但し娘にして十五歲迄に結婚せねば此地方では貰ひ手なくなるとの事である。又嫁を迎ふる時恰かも日本て新嫁の兄弟姉妹は幾人あるかと聞く

が如く、此地方では今迄に幾人の夫を換へしやと聞くのである

▲中亞の石炭　庫車近傍は種々の礦物に富むで居る、銅、硫黄、石油、石炭等は實に澤山出る殊に硫黄は山中にありて炎々として燃へて居るので、唐の詩人の岑參が之を火山と思ふて我初め火山を見ると歌たのが、天山は火山脈なりとの議論を惹起さしめた遠因となりて居る。カインと云ふ所に往きて銅の製錬所を見るに、不思議にも此の澤山の石炭を用ずして木炭を用ひ居るを訝り尋ねしに、石炭はまことに澤山ありて之れを煖用に使用する事を知れば重寶なるも之を知らざる爲め不經濟の木炭を燃用して居るとの事であつた。又、一行がウルムチを出立して天山の麓を夜間旅行して居るとき、彼の神聖視せられたる高峯ボグドウラ山の麓に恰かも山火事の如く、炎燃谷間を焦し高くボグドの白雪に紅く映ずるものを毎夜見た、何事ならむと土人に尋ねたら谷間で一度石炭を半燃してコークスを作り、室内毘爐用の燃料を製するとの事に、其贅澤さ加減に驚いた、ウルムチより十八日間の夜間旅行して哈密(或はカミル)と云ふ所に着いた。此の所には土人の王族あつて幅を利かして居る、一行を最も歡迎して種々の物品を贈り與れた中には厚さも幅も三尺有餘の無煙石炭塊の數個が荷車で運ばれて贈られた

▲キルギズの唯一政略　生等のウッシュトルフワンよりカシュガルに到る間は、途は全く山間にて人煙斷絕、稀れにキルギス遊牧の民のテントが乙地甲地にあるのみてある、或る日山間に數時間途案内のキルギスを驅使して漸く四箇のキルギステントを發見して之れに宿りた、テントの外に數羽の雞を見付た一行は、直に五六十許りのテントの主人のキルギズに雞の有無を殊更に訊ねた、彼は問に應じて否と對へた、生等は更に羊の有無を尋た、彼は亦否と叫んだ生は餘りの腹立たしさに、されば明朝出立の時宿泊の謝禮はせぬと云つたら彼等は言下に亦ヨークと絕叫した餘りに意外の答へに後に下僕に彼のヨークの一天張の理由を問へば、時々此地方を旅行する淸人は猶彼等キルギスに對しては征服者の位置にあるより、其意自ら驕りて雞を割けども其價を拂はず、羊を屠らしめても其代を與へざるより、何を言はれても、かを問はれても、否定の答を以てするを六韜三略と心得たのである

▲雞卵の死斯　トルキスタンの土人はまことに禮讓を知りたる人民にて、人に物を捧ぐる時には必らず兩

手にて之をさゝげ、坐に就くときは必ず先づ之を他人に譲り其禮儀の嚴格なるとは、峻嚴なる etiquette の下に養育せられたる英人さへ時に後へに瞠若たることありとの事である、然るに其未開の周圍は生等をして律儀心を鈍らしめ數々不遜の失錯をなさしむる事がある。此地方の最安價にして最得易き雞卵を常食の一とする生等は不識の間に砲發を洩して耻目を見る事かある。ある日下僕の一人生等の居間を掃除して居たる時に不意に一發を逸した、之を聞いた下僕のモミン(彼の名)は顔を赧(アカ)らめて自身に失誤でもありた樣の風てありたが、素知らぬ顔に掃除を續けしが、折も折とて運惡く愼み切れず、第二砲は慘酷にも初發に倍した勢で破裂した、此時は最早モミンも默し切れなかつたので、ア、、サヒブと呼むだのが、アーアサ、屁ブーと聞へたので、耻しさと可笑さとに耐へなかた、但しサヒブとは印度語にして紳士を呼ぶ敬稱である。

始めて韓土を踏む

椨猿生

社友椨猿生は或る特別の任務を帶ひて彼の滿洲丸に乘込み、觀戰の途に上られた。歸來觀察し得たものを集めて『びつくり集』と名づけ、吾社に寄せられたのである。今其韓國に關する數節を拔いてこゝに紹介せむと思ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一、仁川居留民の屁輕──二、意外も意外京城の光景──三、在京城日本人の現狀──四、韓國人の住宅──五、市街は便所──六、韓國人の天性と教育──七、美術は皆無──八、喫煙の終局、侍衛隊──九、面白き外人の觀察──大同江沿岸の利用──十一、喫煙法と一國の文野──。

一

仁川は明治十五年以後、日本人が着々地盤を作て居る處てあるから、其居留地の如きは今少し永久的のものが澤山あるだろうと思ふて居たに、持家として相當金を懸たものは銀行とか會社とかて、個人的のものにしては、ホンノ五本の指を屈する位てある、實は此地は僅かに二時間斗りの觀察てあるから餘り精しいことが書けないけれども、概して言へば明治三十年頃の臺灣の狀態と大差ない樣に思ふ、政府とか政黨とか多少國家の經綸を云々する者か此韓半島に就ては相當の著述

もあり計畫もある樣に見受けるが、實際に於て其實力の發展を圖るべき商人が如此腰掛的の者のみではと、是又驚かざるを得ないである。

二

然るに是れよりは今一層驚いたのは、所謂大韓國大皇帝陛下の輦轂の下と云ふ可き京城と云ふ所の光景である、意外も意外、余は是迄て斯程に迄て想像以外であつた事は餘りにないと思ふ位てある、何が意外？先づ綴々と書き列べて見よう！。

先づ汽車が南大門停車場と云ふに着いた、スルト歡迎人、驛員、見物人、荷運夫、(假に日本の名稱を用ふ)人力車夫、偕ては京城にある各種の人物が、一度に闖入して來て何が何やら更に解からず、殊に小荷物渡場などの設けなき事迚、車を命じたり荷物を直接に荷物車より受取たり、凡て自分に之れをせなければならぬから、先きを爭ふて銘々が、不案内の土地て唯ださへ混雜の處へ、又其種子を蒔いたから此混雜も亦一層にて、漸くに半分喧嘩と云ふ有樣て荷物を受取り、ヤットの事て居留地にある巴城館と云ふ宿屋に赴いたが、數月來殆ど降雨なきと一體地質が砂深い處てあるから、砂塵殊に甚だしく有名なる南大門に到れば、人馬絡繹として其混雜加減中々のものにて、塵埃と異臭に鼻持ならず、城内に入り二丁斗て右に折れたが、此邊からが日本の居留地とかにて、領事館とか郵便局とか居留民役所とかがある、日本商人の家も軒を列らねてあると云ふ有樣て、先づ異臭丈には遠かつた樣な氣がする、漸くの事て旅館の門前に來たが、其構造は純然たる洋風の新築て、内部には中々立派なる日本風の座敷もある樣子だが、是れ等の上等の座敷は神鞭知常サンヤラ丹羽藤吉郎サンヤラ先來の御客樣が占領して居るので、一度に押込た我々道者連は其他の部屋に我勝に這入り込んだから、中には立派な公達が裏座敷(此家が御前金殿玉樓として客を案内して居た部屋ならん)に追ひ込められて、一ト晩の中に臭虫(例の南京虫のこと)に二三ヶ所も襲撃されたと云ふ次第て、何が何やら更に名狀すべからざるものであつた、併し宿屋としては幾分か突然殿樣方が多數の御入來て人に酔ふた爲めとして大に恕すべき處があると、自ら慰めて先づ、試に二楷の椽側に出て視線を四方に放て見ると、目に入る程のものは皆料理屋風のもののみて、商權擴張の本城となる可き商店其物は殆ど其蔭に隱れて見へないと云ふても好い位てある、先刻表て通りから見た時は久し

く海上の漠々たる處を見て居た眼であるから、相當繁榮の樣に見へて居たけれ共、今此處から其裏側を見ることになると、店とした部分を除いては臺所と便所是れも極めて粗造な板圍ひ樣なものが見へる許りて、倉庫などは勿論の事、主人なり家族なり乃至店員等が、一日の勞苦を慰むべき團欒の場處らしきものも、又娯樂場の如きものも見へぬ、是れは獨り此地許りではない、臺灣でも仝樣の有樣であつたが、臺灣は尚ほ創業の時代であつたから中々其邊迄は手が屆かぬのであろうと自分で理屈附けて見て居たが、久しい以前から渡航して居る者がある此京城でも、矢張り此有樣と云ふのが余の驚いた所以である。

三

是なるが故に主人も少し貯蓄すると一寸內地へと云ふ氣になり、家族もアー去年の今頃はアノ座敷で雛壇を飾りて親類の誰彼れ、近所の甲乙と面白く遊んだのにとか、又は今頃內地で庭に打水でもして椽端たて涼んだら宜い心持てあるのになどと、所謂ホームシックを起さしめ、又店員等には自分で快樂を求むる途がないから、自然面白くない處へ出入すると云ふ有樣で、勢い眞面目に貯蓄でもして他日の計を爲そうと云ふ樣な希望を抱くものが少なくなり、且つ自然の結果として或は丁場の帳面に汚點を殘すとか、負債の結果折角の人間一人を遠い他國で疵物にして仕舞ふ樣な事が生ずるナドト、大に理屈に走つたが要するに此地の如き年月久しく扶植して來た處では、是等に對する設備は、相當に出來て居て、臺灣だとか又は未來に得有すべき新占領地に對する參考なり摸範なりが相當得らるゝ事と豫想して居たのが、前の通りの次第であるから一驚せざるを得ないではないか、

ソレカラ價の高い事だ、是れも戰爭の影響と云へば云へだがソレニシテも實に餘りと云はねばならぬ、是れは獨り貧乏な余が驚いた許りではない樣だ。

併し或る人は娯樂場としては、京城在住の日本人の倶樂部があると云ふ人もあろうが、ソレは所謂店主とか何とか、兎に角紳士紳商連の發企したもので、決して前に言ふた家族のものとか、店員即ち主人をして成効せしむべき原素を娯ましむる趣旨ではない樣に見受けた、それは余の希望するものでなくて、余は主人等が樂むと仝時に家族は勿論店員等を能く保護せねば決して其市街(內地でも)を繁榮せしむることは出來ないと斷言

する。

四

今度は土人の側だが、着城の夕刻、往昔小西行長が占領した倭城臺（後に土人が附けた名であらう）に登りて、睨一睨したが、目立て見ゆるものは眼下の日本居留地は暫く措き、其他は外國人の所有物か左もなければ宮殿で、其他は一面に稻叢の竝列して居る樣な風に見へる、又翌日市街を散歩して細かに觀察をして見ると、如何に御馳走振りに批評しても金持と云ふは勿論、相當の店構へと云ふものか見當らない少し大きい瓦葺があると思へば、何ぞ圖らん支那人がチャンと店先きに腰掛けて居るのである、ソレカラ少し横町に入り込て見ると、屋根破れ疵傾きたる見るから昔の忍ばれる樣な家に正三品何某とか從二品何某とか云ふ標札が打附けられてあるから、正しく是れが朝鮮官吏の住宅であるには違ひないが、外側から測量した處では庭らしきものも見へず、唯だ僅かに雨露を凌ぎ得る許りとしか思はれない、今日の如く國祭疲弊の折柄即ち炊煙の高く昇らざる今日、決して官吏が立派な邸宅を構へ得べきものではないが、官廷の搆造振、又は苞苴の好加減に行なはれて居る今日、尙此有樣で居るのは彼等が左樣な嗜好潔癖を有せぬとならば兎に角なれど、一寸我れには意外に思はれぬでもない。

五

それから市街の不潔なる事である是れは曾て京城內でも市街は即ち便所たりと云ふ事を聞て居たが、如何に朝鮮が亂雜でもソレ程ではあるまいと想像して居たのに、實際は成程風聞通りで其臭氣と云ふものは實に評定の書き方に苦む位で、今日は多少警察（朝鮮の）で取締る事となつて居るそうだから、一人も現行犯は認めなかつたが、家內で便したものを門外の溝に捨るのは事實と認められるから、大雨の後でもあつたら、是れ等も漢江へ押し流されて少しは通行も樂であろうが、昨今の如く天氣續きて砂塵飛ぶときは、唯でさへ相當閉口するのに、彼等土人は其溝の臭ふた水を、得意氣に捲き散らすに至ては迚も通行の出來たものではない。

六

それから人間問題だが是迄一般の觀察としては、國民

は全く見込のないものと殆と斷定されて居たが、成程長い煙管を口にして、用もないのにブラ〳〵して居る處は迚もお役に立ちそうにもないが、現に京釜鐵道で使役し居る樣子を聞くと、中々、日本人共に負けては居らぬ、朝六時頃から始て日沒(午後八時頃)位迄て、追ひ廻して居るが差して閉口する樣子もなく、極めて柔順に、ソシテ善く働くと云ふことであるから、矢張り使ひ方一つでソー見捨てたものではないらしい、是れも先づ意外の一つである

教育と云ふ事も試みに書籍店に(京城の内に五六軒有)入て如何なる種類のものを販賣して居るかを觀察したが、四書五經、三字經千字文が漢籍としては多數で、左傳とか八家文とかも稀れにはあるが、餘り賣れるものではないそうな、其外には朝鮮文字を以て、支那の古人の傳記等を簡單に飜譯したものが、僅かに十二三枚の小册として二十種許りもある、是れ等が先づ一般の教育材料となるもので、前記の漢籍中、三字經千字文位が普通に習ふもので、其以上は所謂高等教育の部類に屬するものなる由、成程是れでは材能の大體が推測されるが何と驚くべき低い程度のものではないか、

七

從て美術と云ふ事も極めて幼稚なもので、城壁の各門とか宮城の或る部分は一寸した建築であるが、其以外即ち人民の家屋には、全く美と云ふ觀念を現した處が一つも見得ぬ、又其他の器具なり圖書なり、何一つ是れは美術の參考品となろうと云ふ者を見出し得なかつた、其癖其古へに高麗燒など丶云ふ中々立派な磁器も出來たが、今は古墳より掘り出す者の外は全く市上に其跡を絕たと云ふ事である、そうして前の建築は決して此國民の力でなくて何れ支那から輸入されたものと思はれるから、結局朝鮮としては美術は皆無と云ふても差支ない樣である、

八

まだ外にも隨分書けば書けないこともないか、先づ此位として最後に一つ大韓國侍衞隊と云ふ軍隊の事を以て喫驚の終局としよう、此軍隊は從來あつた韓國自身の軍隊より撰拔して、一部は日本の組織に從い、一部は露國の教育法により、教育したもので陸軍士官學校に來て居たものも、歸國の上は相當の將校として勤務

して居たが其多數は今は暗殺されるとか、免官せられるとかして殆ど其跡を絶たと云ふ噂である、ソウして余が見たのは即ち露國風の教育を受けた一大隊を五中隊として、銃を左肩に擔ひ、轉回を右にする流儀である、當日は東大門内に訓練院と云ふ堂があつて、其前が練兵場となつて居る軍部大臣等も出場して大隊長の號令の下に大隊運動を施行した、其將校の服裝は日本の正裝様のものを着用して居て中々立派なものであるし、又下士以下のものも近衛式の赤澤山て、中々立派であるが、地質は極めて粗惡の物て、到底軍服と云ふ要素を具備したものてはない、且つ下士以下の體格と來ては實に閻魔堂にある地獄の圖の亡者先生と殆ど好一對のもので、士氣も亂れて見へるし勇氣などは何處を探しても見出せない位てある、殊に相互の安寧を保持する爲めだとか云ふので、凡て銃劍を帶用せず、唯だ帶革丈を臀の先きの處に巻き附けて居る、其不體裁な事と云ふたら寧ろ氣の毒な位てあるが、號令の下に密集して運動する處を見ると、迚も此亡者先生とは思はれない、實に立派な軍隊てあつて或る場合には日本の軍隊も之れには及ぶまいと思はした位であつたには、眞に〳〵喫驚仰天したか或る人から、散開運動をして見せて下さいと注文するとサー事だ!、平生唯だ御飾り物的に訓練されたものてあるから、此方面の事は極めて僅かしか敎へられてないものと見へ、先の大隊長は馬から下りて第一中隊長に、一ヶ中隊の運動を命じて、自分は責任を免れたらしい、處が中隊長殿も余程ギヨツトしたものと見へて、彼是三十分位は高級官衙附の上長官らしい者等と、鳩首熟議をして漸々第一の命令を發したが、其運動の迂遠な事と云ふたら實にお話しにならぬ事て、同じ様な事を幾度も繰り返し、ヤットの事て突撃を試みて此演習を終た、其苦心の程は實に名狀すべからざるもので、此時は喫驚を通り越して寧ろ氣の毒であつた。

九

尙ほ最後に少し許り人の話を附け加へよう

或る外國人の話であるが、朝鮮と云ふ處は人種なり地形なり、日本と全く其趣を同ふして居て文明の根源も往古は均しく支那から輸入されて居て、發達の順序等も同一にならねばならぬと思ふ、然るに山を見れば赭々たる赤裸かてあるし、田畠も亦た日本とは丸で培養の程度が違て居る、尙ほ其他各種の方面に進化の相違

して居るのを見るか、是れは他に原因もあらうが、惡政と云ふ事が其主たる原因であるだろうと云ふことは、容易に想像が出來るが唯だ茲に一つ不審に堪へぬ事がある、ソレは不潔と云ふことであつて、如何に惡政と云ふものが種々の妨害を爲すとは云へ、湯に入ると迄も邪魔する者てはあるまいかと思ふ、一體日本人はチト潔癖に過ぎるかと思ふ位てあるに、反して朝鮮人と云へば先づ野蠻人種と同一の不潔さ加減てあつて、ドーしても此一點の相違に就ては想像判斷が附け兼ねると云ふたが、一寸面白い觀察の樣に思はれる。

十

それから大同江を遡て平壤を訪ふた時である、或る人の話に大同江の深さ河の廣さ沿岸の土地の廣濶なる、僅かに甘く利用さへすれば、國の富を益す上に於て充分の價値があることは、專門家許斗りてなく、素人にも善く分かる話だ、然るに今朝鎭南浦を出發して、以來、軍需品を積載した船許りて、是等運輸の用に供せられる船舶の一も上下したのを見ない、如何に此國が疲弊して居るとしても餘り憐れな有樣てあるまいかと云ふたら、他の人がソレは今收獲期てないから輸出すべき材料がない、從て輸入を計る財源が缺乏して、如此有樣を呈するのであろうと云ふた時に、或る朝鮮通の先生が收獲期でも決して諸君が想像する如き現象を呈するものてはない、實は我々もそれを十年以上の宿題として研究して居るが、今に解決されないのであると云ふた、左すれば是れは相當大きい問題と見へると云ふことが想像せられるし、又韓半島に對する研究資料として相當價値ある問題だと云ふことも思料される。

十一

其次に或る人がコー云ふ定義を作たと云ふことを聞いた、曰く一國に對する文明の程度は、其國民の煙草の呑み方によりて測量し得られるとて其說明は下の如くである、朝鮮人や支那人は有名な呑氣者だから見らるゝ通り二尺も三尺もある長い煙管を、シカも手から離さずに持て居て隙さへあればスパ〳〵とやつて居る、日本人も此頃は段々卷煙草の樣な簡便なものを用ゆる樣になつたが、マダ一般に長い竹を附けたものを用ゆる、ソレから歐米の人は煙管としては、例の雁首の大きい柄の三四寸のものを用ゆるが、先づ其多數は卷煙草である、然るに此頃は更に其程度を高めて吸口

を附ける間の時間も惜しいと云ふので、直ぐに煙草にかじり附く樣になつた、今少し進んだら、時と云ふものゝ價値が貴くなつて、來て、銘々が自分で吸ふて居るのも面倒だと云ふので、煙草の烟をパイプで部屋に送り込み、部屋中のものが一度に之れを吸ふ樣にするかも知れない、即ち多忙な國民の用ふる器具は、可成簡便なものを撰み、支那朝鮮の樣な呑氣な人種は不便でも風味を善くするものを撰ぶ傾向があると云ふて、大笑いをしたが、是れも亦大に趣味のある話であつたと思ふ

◎豫告

次號には無線電信の成功によりて勳位を授けられたる電信技師松代松之助氏の

○○○○○○無線電信の話

及び英國某貴夫人のものしたるものにして弊社飜譯部員の輕快なる筆によりて譯出したるを揭ぐべし

○○○○○○○日本內地旅行記



思潮

宗教と青年の元氣

『六合雜誌』

青年の墮落が無宗教より來ることは吾人の常に論ずる所であるが、吾人の見る所を以てすれば無宗教は單に青年をして不品行に陷らしむる許でない、亦實に青年特有の元氣を消耗するものである。世には宗教を以て老人の信ずべきものとなし、これを以て却つて青年の元氣を減ずるものと考へて居る人があるけれども、これは大なる誤謬である。宗教を信ずる青年中には全く柔弱に陷れるものもないではないが、これは例外であつて決して一概に論ずべきことではない(中略)

今日の青年には宗教的教育がないから沈思默考などいふことは殆ど經驗したことがあるまい。從つて彼等は自然の美に對して陶然として醉ふが如きこともない。故に彼等は田舍にありて閑靜なる生涯を送るといふよふな考は毛頭も起らない。彼等の多分は一ケ月も閑靜なる處に住居したならば寂寞に堪へ得ずして病氣を惹き起すかも知れぬ。彼等は一日に一度位は銀座街の如き所をブラ〳〵歩きするか、上野淺草を訪ふか、縁日に出掛くるか寄席を見舞ふかせざれば氣が濟まぬといふ有樣である人類は

勿論社會的動物であるから賑かなる所に出掛くるのも別段不思議はないが、今の青年は餘りに物質的である。彼等は義太夫によりてのみ音樂を聽くことを知つて居るが、天地の間に美妙なる音樂のあるといふことは知つて居ない。彼等は毎晩でも繁華なる場所に行くことを辭しないけれども唯の一週間でも單獨にて山寺に住居するといふ風流心はないのである。吾人は今日の青年が如何にも風俗的、物質的であるを見て、今更の如く宗教々育の必要を感ずる。戸外遊戯程無邪氣にして面白く、高尚にして男らしきものはない。然るに多數青年の足が運動場に向はずして、塵埃に汚れたる市街に向ふのは慥に不健全の兆候ではないか。畢竟するに青年は未だ學問や宗教に於て快樂を見出すの程度に達して居らぬ。然るに運動は餘りに單純にして物質的でないから、彼等は已むなく市街に出てゝ目の慾、口の慾、耳の慾を滿足せしめんとするのである。思へは實に憫然の至りてある。青年の教育を以て自ら任ずるの人は大に此點に注意する所がなくてはならぬ

韓國經營者の輩出

【日本人】

韓といひ、滿といひ、ともに我が國民の生計を營むべきところ、而して同人の此を志ざして奔勞するもの決して少しとせざるに、其の能く成功せるの業極めて少きもの、抑々何の故なりとするか、我が國人の韓國に移住する者既に數萬、中に於て彼國の事情に精通せるも亦少からず、特に有志家として彼の國内を徘徊せる者は總じて事情に通ずる頗る精しきもの元と彼等は治國平天下を策するを念とし、商工業の如きは其の專念從事し能はざる所、但だ韓國の事情を觀察し、彼に對する我國の態度に就て批評し又た助言するをあり、口を開けば則ち彼の國王は如何、彼の朝廷は如何、若くは某々の地方に某々の鑛山あるを陳べ、一種の韓國經綸策として聽くべきの言尠からずと雖、而も大抵は資産なく信望なく又衆人と伍して運動を共にするを能はず、人をして大言益なきの觀を爲さしめざる鮮し。顧みて我國の資本家を觀るに、其多くは皆な我が内地に在りて成業したりし者、大資本家を以て稱すべきは稀れなりとはいへ、韓國に事業を經營するに堪ふる程の資本を作りたる多し、然れども此等の資本家は既に内地に於て一定の事業を營み日夕孜々として其の業務に忙はしく、復た自身韓地に赴きて事業を興こすの暇なく、たとへ自ら彼地に赴き得るにせよ、其の新たに爲さんとする所は即ち新たに經驗せざるべからざる所にして、能く成功せんこと豫め期し難たきに因り、遂に彼地に赴く者なく、偶々之有るも能く久しく留まるなし、是れ故に韓地に事業を興さんとする、必ず他に人を用ゐざるべからず、而も他に其の人を得んこと易きに非ず、蓋し自家に傭使する番頭手代等は皆な已れの店に在りて成長したる者、店務は即ち經驗を積み又た能く巧みなれども、此をして韓地に事業を營ましむるには少しの經驗なく又た少しの自信力なし、即ち人をして韓地に事業を營ましむる亦た難たし。（中略）

今日は決して韓國に事業を興すべき資本なきに非ず、又た事業を營ましむべき人物なきに非ず、實は調和術は能く整はざる過渡の時代に在る者にして、更に若干の年月を累ぬると共に、必ずや善く調和を得て成功を見るに至らん。然るも今日の過渡時代は即ち謂ゆる適者生存の大に行はるべき時たり、資本家は先づ單獨若くは團體にて或る人物に事業を營ましむべく、其或る者は失敗し、或る者は稍々成功し、時としては特に堪能なる者の現れ出づるあり、衆多の囑望を負ひて事に當り却て失敗するものあるべく、幾失敗幾成功の相ひ接續する間に於て幾多の能者顯はれ出て、幾多の能者顯はれ出づる中に於て更に能中の能なる者の顯はれ出づるあらん、是れ即ち眞の經營者にして、大なる事業の其手腕に依りて遂

行せらるゝことなるへし。而して此等能中の能なる者は固より資本家の頤使に甘んずべきに非らずして、而も能く資本家の財を善用し、此に不服を唱ふる能はざらしめむるを得、多くの資本家を集め、聯合出資せしめて之を活用し。且つ多數の傭者を指使して各々其の處を得せしむべし。

韓地に於ける我が國人の事業多きも、若し能中の能なる者の出づるなくば、經營の實は到底擧らざるべく而も其の人なきかといへば決して然らず、たゞ有れとも之を顯はれしむるの機會なきのみ。而して斯の機會は幾多の人物接踵事業を營みて一成一敗する間に於て作らるべきもの、其の速かに來ると來らざるとは豫め之を言ふこと難たし。觀るべし韓地に於ける眞の經營者たらん者、我國決して其の人なきに非ざることを、而も今後其の人の出づる時、獨り韓國に於てのみならず、更に一層廣き舞臺に於てするを見るべし。

韓國の富源は相像の如く豐かならざれど、獨ほ以て大に手腕を揮ふに堪へずとせず、特に見下頗る希望の嘱すべき者ありとして目せらる、必ずや今後大に其地に手腕を揮はんとする者の出づるなるべく、中には鴻圖雄略夫のセシルローヅに等しき者なしとせざらん、徒らに其の人の出でざるを想て悶々たるが如きは愚の極のみ。而して眞の經營者の猶ほ出でざる間は自ら種々の紛擾の絕えざるべしと雖も斯かる者の必ず顯出すべきを念ひて巧みに事を運行する者こそ、即ち彼地の經營を助くる者なれ、之を稱して天才といひて可、又た時勢之を作るといふも不可なし。韓といひ滿といひ、猶ほ幾多困難の徑途に橫はるあるにせよ、利益は我れ之を收得すべきこと疑ひなし、而して謂ふ所の適當の人物とは時勢に應じて出づるを指すの義にして、かゝる人物の出づるは元と當然の事たり、韓國に於ける將來の經營を按ずる者、其の人物なしといふべからず又た其の資本なしといふべからず、唯だ斯かる者をして充分の働らきを爲し得せしむる如く勢を進むること最も肝要なれ。

領土の擴張

『時代思潮』

利益を保護する爲に、民衆ありて玆に國土の要あり、産業の望十分にて玆に植民を開拓すべし。殖産の實力伴はず、植民の經驗十分ならずして、徒に國土を擴張し、漫に遠き將來の慮りと稱し、徒に軍略の便宜を理由とする者は、恰も新春欝勃の氣に乘じて、徒に蔕枝を生ずる櫻樹の如しその蔕は終に花を害し、木を枯らすの不幸を見ずんば幸なり。

殷鑑遠からず、敵國ロシアにあり。民衆中に充ちたるにあらずして領土を延ばし、外國の資本に依りて漸くその經營の一端を行ひ、終には不凍港の夢を追ひ、その陸上の連絡に狂熱し、爲に不當の膨脹を行ひ、終に今日の醜態を暴露するに至る。戰ひに敗るゝも、彼れは、敵たる日本を怨むよりも、先づ第一に自己自らを怨むべきなり。今や戰勝の餘威に乘じて徒に領土の擴大を望む者は、我が國をして敵國の覆轍を踏ましめんとするものにあらずや。

我が國が海外に膨脹するの要あるは論なく、この點に於て敵國ロシヤと事情相異なりと雖、而も植民膨脹の餘地は尙南北邊陲に多く、滿韓の野亦遺利、餘地甚多し。一韓國の經營にすら未だ十分の技量を表はさゞる我が國は、何の自信と必要とありてか遠く北洋の岸、勘察加の邊に垂涎するや。我が國民は戰陣の間には十分の技能を表はせり、而も平和の戰爭たる、産業、植民の事に關しては尙周到の注意と用心とを要す。この間に當りての必要、領土の擴張よりも何よりも、國民の鍛練にあり、平和事業の平和的畫策にあり。この必要なる根底を捨てゝ領土の擴張を地圖の上に畫策し、又その擴張に伴ふ軍備の殆ど無限なる擴張を國民に豫約するが如きは、抑も國家の爲に畫策し、國民將來の根底なる繁榮を

庶幾する者の言なるか。
　吾等は固より此の如き論者の空論が今日直に實行せらるを信ぜず。而も世には往々にして戰勝の餘威何事をもなし得べしと信じて、此の如き言論に雷同する者なきにあらざるべし。此の如き空望を抱き、而してそが實にせられざる時徒に失望するが如きは、戰勝より生ずる自負倨傲と共に恐るべき國民の憂ならずや。此の如き論者は、ダンテの神曲中にある貪慾の罪人が幽府の暗黑中にて屑を捲く寒風に吹き捲かれ、氷霰、雹霰に打たるゝを見て三省すべきなり。
　國土の膨脹は經濟の望みと力とに伴はざるべからず。土地を得たりとて金鑛は直に出て來らず。植民を樹立しても永久の基礎によりて之を固成するの覺悟なかるべからず。

紀念碑に値するものは果して誰ぞや

『新人』　ドクトル、アーサー、ロイド氏

過ぐる三月三十一日、東京青年會々館に開かれたる日米人の大會は、監督マキムの發成により、恰も五十年の古、其氣力と忍耐と、手腕とによりて日本國を世界に向つて開きたる、かの米國の水師提督ペリー紀念の基金を募らむことを決議したり。今や日本が、過去半世紀間に於ける其改進的勤勞に對し、光榮ある報酬を收めつゝあるに際し、此舉ある、最も其時をえたるものといふべし。
予は、提督ペリーが日本及び世界に貢獻したる大業を輕減せんとするものにあらず、彼れは今迄彼れが受けたる凡ての讚辭に値するもの也。また予は、戰時困難者の救護といふが如き高尚の事業に投せんとする、此紀念資金に義捐することに、決して反對せんとするの意志なし。唯た予が一片の注意を世人に惹起せんと欲するところは、若しペリーにして、本日の開國に盡力したる功を以て紀念に値すとせば、東京を距る數哩片田舍の小墳墓に於て、あはれ人訪はぬ墓中に横はりて世に忘れられたる一個の日本政治家は、更らに多大の紀念に値すといふこと是れ也、
　とペルリ來航當時の日本の狀態を述べ外には諸外國の開港を迫まるあり内には大諸侯の幕府の窮狀を利して封建制度の破壞を立つるものあり併かも德川一門は四分五裂の狀に陷りたることを述べて
しかるに玆に幸なるは、德川幕府の組織に於て、羅馬の共和政時代に用ひられしとやゝ相似たる制度の設けありて、かゝる難局に處するの道を講じありしこと也。即ち將軍は特に大老なる一官職を任命して『國家が何等の危害をうけざるやう』監督せしめ、之れに一切の全權を委ぬるをうる也。是に於て、將軍家定は自ら其難局を免れんが爲に此大老を任命せんと決し、彥根侯井伊掃部頭を擢んでゝ其職に就かしめぬ。(中略)井伊掃部は雄偉の精神を以て困難なる地位につきぬ。彼れは明に其義務の存するところを辨知し、しかして曾つて一たびも之を遂行することを憚らざりき。
外國人に通商を許すは、彼れの一身に取つて最も危險に充ちたる政策なりき。されどこれ日本が其獨立を失ふことなくして執りうる唯一の方策なりし也。千八百五十七年に於ける日本は、アメリカ、ロシヤ、フランス、イギリス等の列強に對し、よく何事をかなしえんや、況んや此等列强が其力を併せて向ひ來るの恐なきにあらざるをや。彼れは米國が遠きに位してロシヤが近きに接するを知れり、されど同時に彼れは米國がロシヤに對する我國の防衛となるべきを知れり、是に於

てか彼れは二者の間に其撰擇を施しぬ、しかして今日彼れの撰擇に最も明をえたりしを見るにあらずや。この最も危急なる秋――よく日本の歴史に通ずるものにあらざれば決して之を理會し能はざる危機――に於て、彼れは米國と條約を締結し、之れに由つて自ら其邦家の眞救濟者となりし也。

されど此擧や彼れをして其生命を賭せしめたるもの也。彼れはこれによりて多くの敵を一身に蝟集せしめたり。

嗚呼五十年前かの時ならぬ悲劇を演じ出しゝ地、今や電車は振鈴を鳴して之を過ぎ、帝國首都の大官闕は其邊に聳ゆれども、人多く其古を懐ふことなき也。時は五十年前の彌生三月雪ふる日、大老は肩輿に駕して將軍に見參せんと出て行きしが、其正に引橋にさしかゝらんとするや、一隊の侍は突然躍り出てゝ、予が今此記事を誌すほどの時の間もあらせず、之を殺して其頭をはねぬ。從者二人は其主の通り命に殉じつ、敵は其目指す犠牲の首を携へて跡を沒しぬ。彼等は水戸藩の浪人と、及び薩州其他の浮浪の徒なりき。

これ誤解せられたる偉人の運命なりき。彼れ逝いて五十年、たゞ一片の甚だ質素なる墓石の、世田ケ谷の塋域に其埋骨の處を標するあるの外、未だ何等の紀念碑も彼れの爲に建てられたるを見ず、遺憾何ぞ極まらんや。しかして藩派的精神の非常に強く支配せし結果日米條約の締結者たる此大老に關して、多言し高言することは、今日といへども尚日本に於ては頗る謹愼を要すべき事に屬す。しかりといへども、彼れが困難を排して斷行せしことは、悉く遂げられたり、彼れが締結せし條約は、數年前年條約の改正に至るまで永く保たれたり、しかして最も劇烈なる當時の反對者は、今や彼れの果敢なる外交によりてえられたる利益を、最も多くうけて感謝するものならずや。日本今日の陸海常備軍の基を開き、條約の與ふる一大利益は、他日日本を歐米諸國と同一水平線上に上らしむべきやう其軍備を整えしむるにあることを看破したるものは彼れなりき。全力を擧げて、其當時に理會せられし如き國民的統一を保たんが爲に奮鬪せしものは彼れなりき。是に於てか予は問はざるをえず、もし夫れ玆に紀念物もしくは紀念碑を企つべしとせば、誰か之に値するものぞと。

時局と教育及教育の目的

『時代思潮』 文學博士 菊池大麓氏

戰爭開始以來勤儉々々の聲四方に反響したり、勤儉は常事吾人の美德とする所豈啻に戰時に於てのみ然らむや、吾人は實に平素より有事の日を想ふて是が實行を怠るべきにあらず、殊に日清役以來吾人は互に臥薪嘗膽を以て默契せしに非ずや、此十年來我が國民は果して臥薪嘗膽の實ありしや否やは別問題なれど戰爭始りたればとて遽に大聲疾呼して勤儉を唱ふるが如き平素の心掛思ひ遣られて寧ろ心細き至りなり、吾人が迪むべき勤儉は戰時は勿論平時尚是を忽にすべからざるものなり、東亞の形勢日々に切迫し、將さに世界の競爭場たらむとす、這回の戰爭は尚益々此勢を促進す可し、されば吾人は勤儉の實行に就ては將來愈々持續すべきなり、唯注意すべきは、勤儉とは金を遣はぬこと、甚しきは進んで爲べき事業すら是を中止すべきものと思惟するが如き誤見を避く可きことなり、聞く、或地方の如き、醫療衛生の如きすら規約を定めて制限し、又は物品を購ふことは縫針の末に至るまで是を嚴禁したりと是れ果して勤儉の旨趣を得たるものなるや否や、這回の戰爭は決して容易に終結を見ること勿るべし、短きも數月、長きは數年、此間吾人は唯何事をも爲さずに手を束ねて俟つべきか、一日三食を二食に減じつゝ拱手

して時の經過を俟つべきか、否々吾人は此際大に働き、多く貯へ進んで資源を求め有利の事業を起すべきにあらずや、寧ろ冗費を節し奢侈を省き、是を有益の事業に使用して愈々國富を圖ること是實に勤儉論の大眼目なりとす、

戰爭は事業を中止せしむ、されど時の經過を中絶せず、今日の少年は明日の青年なり、今日の教育を忘れば明日成人の曉を如何せん、教育の事業は其効果を或時間後に期するものなり、空腹に食を投じて飢を凌ぐが如き即刻的にあらずされど實に一瞬刻々等閑視すべきものにあらざるなり、

個々の人々に就て教育の必要なるは勿論、國家其者に就て又教育は大切なり、陸海軍強弱の由て分るる所も是を組織する所の單位即個人の教育有無に繫る、

教育の事業は其の奏功甚遲緩なれど然れども甚だ確實のものなり教育に基かざる成功は確實なる成功に非らざることを余は斷言せんとす、這回の戰爭は或は一時的の顯象ならん、されど此戰爭の結果が如何なるにせよ次に來るべきは實業上の戰爭、平和の戰爭にて此戰爭は瞬時絶えず襲來せん、此時に當つて若しも是が將校兵卒にして脆弱ならば我國たるもの果して如何なる狀態に陷る可きか、教育を以て不急の事業なりと沒却し去らんとする愚を悟り得ん。

實業教育を施すにも其程度如何に由りて是に相當したる普通教育の素養を有す可きなり、例令ば大學に於ける實業教育、即工科大學の如き農科大學の如き或ば法科に於ける商業（別に商科とは云はざれど卒業者は商業に從事し得るを以て普通の徑路とす）以上の如き學科を修むる迄、又は諸種の實業專門學校即ち東京高等工業學校或は高等商業學校の卒業者若くは地方各種の實業學校卒業者、各其修學に高下ありと雖も未だ是に比例して相當の普通教育の素養なくして單に專門上の智識ありとも其着眼狹少に陷るを免れず、且部局の事を任ずるに支障なくとも進んで大事を企劃するに當りては必ず不便を感ずべきなり、斯く實業教育に就て普通教育の必要なるが如く、普通教育は總ての基礎たるべきものにて單に讀み書き、算用の道を教ふるかの如くに輕視すべからず、

然るに我邦に於ては唯、皆專門の智識をのみ尊び法律家は法律以外何をも要せざる如くに、工業家は工業以外の智識を無視し其結果所謂コンモンセンスの素養なく、遂には少からぬ失態を釀すことあるなり、實業教育の如きも是を授くると同時に常識の養成即普通教育を忽にすべからず

又普通教育には常識養成を主要とす予は決して專門教育の必要を排するものにあらざれど是と同時に普通教育特に常識養成の必要を大聲唱導せんとするものなり、此點より云へば昔の漢學の如き、取るべき點あり、即ち種々の書物を讀みよく之を味ひ十分に同化し其等の智識を以て我心を鍛練し是を種々の場合に應用せしなり、されど大體の教授方法には宜しきを得ざるもの多く專門智識の如きも輕視し發達せざりき。されば吾人は古昔漢學流の教授を推奬するものにあらざれど、只古昔行はれたる心身の鍛練に於ては諸君の特に一考せられんこと切望に堪へざるところなり。

要之教育は決して不急の事業と見做すべきにあらず、戰爭の際と雖も閑却することを許さず而して實業教育の如き現下尤も必要とする所なり、其實業教育の基礎は普通教育にあり、普通教育は心身の鍛練を以て必要とす、と云ふにあり、如上の趣旨に由りて諸君が一層の精勵を望み幸に常識に富みたる國民の養成を圖り唯に忠君愛國の精神に滿ち居るのみならず其の判斷力に於ても最も正確なる國民を養成するに盡力せられんことを希望するものなり、

朝鮮に在る下級民の取締

『時事新報』

日韓の關係は協定條約締結以來ます／＼密接と爲り朝鮮に於て各種の事業を營まむとする日本人は少なからざる便利を受くることとなれば今後我國より彼地に渡航するもの日に月に増加し數年の後には莫大の人數に達す可し隨て我當局者もます／＼在韓日本人の利害に注意して其保護に勉め苟も我權益に抵觸するものあれば斷乎として之を排斥し其間に毫厘の容捨ある可からずと雖も之と共に注意を怠る可からざるは在留民と朝鮮人との間に存する社交上の關係是なり元來朝鮮人の多くは無知無識の人民にして事理に通ぜず時々常識に外れたる動作を演ずる其上に狡猾横着、少しく寛大の風を示せば忽ち増長して止まる所を知らず殆ど始末に窮する輩なれば彼等と雜居するものは其取扱に苦しむの場合も少なからず啻に民間のみならず我外交官が彼官吏との交渉に當り之が爲めに手を燒きたること幾度なるやを知らざる程なれば今日とても決して油斷することなく寛嚴の鹽梅肝要なれども政治上の事は暫く別として社交上の方面には自ら特殊の注意を要す可しと云ふ其次第は朝鮮人の性質右の如くなるを以て從來我國人の彼地に在留するものは彼等に對して隨分手ひどき取扱を爲すの常にして此習慣何時しか極端に走り知らず／＼必要なる範圍の外に出づる場合少なからず適々朝鮮に旅行するものゝ第一に異樣の感を起すは即ち此一事にして二三の例を擧ぐれば日本人の商店に陳列せる商品を見物する朝鮮人を邪魔なりとて冷水を打掛くる者あれば車夫の如きは態と往來の朝鮮人に梶棒を突當て其狼狽して逃退くを見て一興と爲し街頭に遊ぶ日本の小兒が見上ぐる許りの大男を戲れ半分に打擲するが如き珍らしからず一寸の蟲にも五分の魂ありと云ふ如何に朝鮮人なりとて斯る取扱を受けて口惜しからざる筈なけれども只我國人の勢力に壓せられて如何ともする能はざる者なる可し固より斯る擧動を演ずる日本人の如き多くは在留民中の下級に屬する輩にして上流の人々には固より見受けざる所なれども朝鮮人の眼より見れば此邊の區別なく恰も日本人一般のことと思惟して大に感情を害し自然兩國人の交際に少なからざる障碍を來すは免れ難き成行にこそあれば在留民中の心あるものは常に此弊風を苦慮しつゝあるが如し彼の歐洲人が亞米利加大陸西印度諸島等に殖民したる以來土人の暴動を惹起して多數の白人が無殘の死を遂げたる事實は歴史上に屢々見る所にして其原因を尋ぬれば土人が外國人の支配を受くるを屑しとせざる憤慨心よりも寧ろ社交上の白人より侮辱虐遇を被むりたる個人的憎惡心に基づくこと多しと云ふ今の朝鮮に於て斯る極端なる事實の發生す可しとは何人も思ひ設けざる所なれども日韓兩國は今後政治上に經濟上に一心同體、相提携して相互の利益を増進するの必要あるに其兩國人間の交際が些々たる事柄の爲めに圓滑を缺くは彼我の不利益この上もなき次第にして下級の居留民が朝鮮人に對し不當の取扱を爲すこそ其重もなる原因なりとすれば局に當るものは特に其取締を嚴重にして兩國人間に眞實融和親睦の情を厚うせしむるの處置に出づること肝要なりとして同國の我居留地には夫れ／＼警察署の設もあることなれば其向の人にして少しく心を用ふるときは大に此種の弊風を改むるを得べし或は現在の警察官の員數にては充分なる取締を爲すに足らずと云はんか其員數を増加するも可なり我輩は當局者が其處置を執るに怠らざらんこと希望に堪へざるなり

評論



模範的戰爭

成川生

我が忠勇なる陸海軍の行動は、模範的戰爭として、世界に衿るに足るものなり。戰術上に於ける吾が軍の籌策、其の宜しきを得たるか否やは、吾人戰術の知識なき者の窺び知るべからざる點なれば、此の點に於いて、模範的行動の示されたるか否やも亦、吾人の知らざる所なり。

然らば如何なる點に於いて、模範的行動は示されたりとするか。曰はく、王師は人道正義を憑據として活動するが故なり。正義人道を護らむが爲に干戈を取り、敵軍に對するや、亦博愛の理想を持するもの、これ吾か勇敢なる日本軍人なり。

夫れ戰爭なるものは、決して好ましきものに非ず。これを指して絶對的に罪惡なりと稱し難しと雖も、その好ましからざるものたるは、吾人の言を俟たずして明白なり。此の故に吾人は、如何にせば、戰爭を絶滅し得るかの問題を、恒に念頭に置かざるべからず。然れども不完全なる現世に於いては、到底これを絶たしむると能はざるも亦明けし。

人間が物質と精神との兩面より成れる以上は、戰爭は決して絶えざる可し。物質的勢力勝つも、或は精神的勢力優勢なるも、兩者の衝突は遂に消滅すると無し。換言すれば、現實と理想との存在する間は、永劫に戰爭は絶えざるべし。

此の故に、戰爭の道德的價値を論ずる場合には、之れを二種に分たざるべからず。第一種は我欲的戰爭にして、第二種は理想的戰爭これなり前者は道德上全く惡にして、後者は善と稱すべきなり。

我欲的戰爭とは、個人又は國家が、物質上の欲望を充さむが爲に行ふものなり。領土又は財寶、美婦等を獲取せむが爲に、開かれたる戰爭は、即ち此の種にして、目的は、一個人、又は一團體、一社會、一國家の物質的欲望を滿足せむとするに外ならず。上古又は蠻



詞藻

蘭

漱石選

競り賣の卑しく見ゆれ蘭の鉢　初聲
蘭の香に占易の座の靜かなる　同
蘭の花夜光の珠を藏しけり　同
塵振る白眉の僧や蘭の花　同
蘭堀りて砂路戻るや磯月夜　同
石ずりの軸を掛けたり蘭の鉢　黄村
蘭の花青磁の鉢を求めけり　浦亭
蘭の鉢机の塵を拂ひけり　英子
蘭の香や寂然として大書院　閑外

蘭の花石を近くに移しけり　翠謠
蘭の香や寺に僑居の五十日　五遷
蘭の香や李白は醉ふて眠りたる　同
萬卷を賣りて閑なり蘭の花　紅白
裏山に蘭堀る朝や雨後の雲　同
蘭の香や水湧き出づる岩の山　七三
筆たての孔雀の羽や蘭の鉢　同
蘭の香に書靜かなる書室かな　青龍
蘭の香や眼鏡に老いて琢玉師　同

選者吟

蘭の香や竹の影さす砂の庭
蘭の鉢掛物を書に更めぬ
帙入りの詩卷清らに蘭の鉢

拾　月分課題　霧　九月十八日限
拾一月分課題　茸狩　十月十八日限
應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛發送されたし

歌

尾上柴舟選

前田夕暮

夜もすがら軒をめぐりて吹く風にまぎれて去ぬるわが詩わが魂

わが舟を去ること半里江村の灯はたそがれのあを葉をもるゝ

赫耀と夏の日は照るおほぞらにあを葉の塔と銀杏そびゆる

倦んじてはねぶり催ふす夏の書覆盆子召せなのひとつくしき

まが鳥のうれひの鳥はわが胸の希望の實をば食みては去ぬる

そは天女わすれ去にたる花冠と見るゆふべのしろあぢさゐよ

○

若山繁

繞らさむ花藻は紅よむらさきよくはし女おほき島のあさ潮

こゑごゑに花よびさまし歌さまし霧のなか行くなつ野瑠璃鳥

小雨けぶる夏のあさ野の大榎つとふ小鳥のみなみどりなる

戀ひ戀ひてあはすふたつのたなごころ石とも凝らばそれ紫水晶

○

石田時雨

暗ながら召すよときゝし御聲のまにまに行くに世はとほざかる

世にしらぬ色もて手もて神の世になりにしほどの戀よみ歌よ

○

久保田桂湖

うぐひすを秘曲さづくとあさに召して女神泉の森にたたずむ

○　坂田夕星

香に醉ひて奇しき花さく詩の領に靈のまじはり許しますか君（撰者の君に）

野の花のさかえに似たる人の世にいつまで夢の影追はむ身か

○　石黒夕雨

冷やかに戀の玉宮のろひ寄る魔が蛇裂かむ雉子の才なし

○　山本春陽

籠の中のわれは金絲雀うたにやせて雛はぐくまむ力もあらず

前號正誤、靜やけき天の光に靈乘せてわが身生きたり死なむともよし東薫、

歌募集

別に課題を置かず寄稿者の意に隨ふ　九月十八日限

わが願

ちよいん生

君はつばらにわが心
知り給はずと見ゆるなり。
われは少しも君の胸
知るよしもなみ迷ふなり。
若しも此世に神あらば
外の願はわれ持たず。
互の心知らせよと
われはひとへに願ふなり

低吟十首

酔美生

雲に入る鳥の影見て湖の
　畔に立てば暮の鐘鳴る。

蕭として十萬の兵野營せる
　星くらき夜を木枯の吹く。

月の夜に氷の下を流れゆく
　水の咡やく音を聞くかな。

いはじ〳〵吾はいふまじ君と逢ひて
　手を握るまで此思いはじ。

大波の打寄する巖の角に下りて
　しぶきに打たれ羽振ふ鷲。

月落ちて星も稀なるあけがたの
　空にひゞらく山寺の鐘。

富士が根に夕日傾き彩雲の
　湧き立つ空に舞ふ鳶かな。

朝風にそよ〳〵なびく稻の穗に
　雀二三羽飛び下る見ゆ。

欸乃のゆるく幽けく初旅の
　枕に通ふ眞夜中の頃。

紅葉せる山の麓の掛茶屋の
　細き煙に夕雨の降る。



人の戰爭は概して、此の種に屬す。而して其の道德上の價値は、惡と判定すべきは、玆に娓々縷述するの必要もなかるべし。

　理想的戰爭とは、理想實現のために開かれたるものなり。眼前の不完全なる現實を滅して、理想的狀態を作らむが爲に、干戈を取るは、道德上より看るも、決して非難すべきにあらざるなり。元より戰爭以外に、理想現實の良手段あらば、これを用ふべきなりと雖も、其の絕無にして、戰鬪の外に、佳良なる策なくんば、是れを採用せざるを得ず。その爲には、多くの犧牲を要すべしと雖も、廣く文明の發展を顧み、且つ人道の進步を慮れば、損失は之れを忍はざるべからず。戰鬪の慘狀を恐れて、理想に遠き不備不完全の現狀を忍ぶは、戰爭の犧牲よりも、更に大なる不自然、損害、弊害の、人道を害しつゝあるを識らざるものなり。惡症の腫物は、之れを切斷せざるべからざるなり。理想は、時々刻々に實現せられざるべからず。而して文明國民は、其の大なる責任を帶ぶる者なり。

　戰爭の害毒を恐るゝは、畢竟するに、物質主義に據れるものならずや。げに戰爭の物質的方面を眺むれば、之れを最惡と謂はざるべからざれども、其の精神的方面、即ち正義人道の勝利を觀ずれば、是れを善なりと承認すべきなり。たとひ寸厘なりとも、理想を實現し得れば、これ道德上の勝利なり。史上斯くの如き戰爭に乏しからず。ヘラスの民族が、波斯の橫暴に反抗したる、十字軍の土耳古を破りたる、ピューリタンの鐵劒を振ひたる、皆な是れ理想の實現を目的としたるものなり。更に近世に至りては、米國獨立戰爭の如き、希臘獨立戰爭の如き、南北大戰爭の如き、これを理想的奮鬪と謂はずして何とかせむ。吾が國に於いて例を求むれば、元寇の役、建武中興に伴ひし戰亂、維新の役、日淸戰爭の如き、これ正理に愜へる奮戰なり、即ち義戰なり。而して今回の我が軍は、最もよく此の種の戰爭を代表す。詳言すれば、帝國の軍人は、理想の爲に戰ひ、露國の軍人は、我欲のために兇器を用ひつつあるなり。これ單に黃白兩人種の衝突に非ず、東西文明の衝突に非ず、實に理想と現實との一大衝突なりとす。

　今古の歷史を通觀するに、我欲的戰爭は漸次に其數を減ずるの傾向あり。元より一の戰爭にして、中途より其の性質を變じたるものありと雖も、近世に降るに從つて、理想の實現を動機とせる戰爭漸く多きを見る。

これ正義人道の觀念が普及したるに基因すべし。一國家內には、法律ありて、人間の惡性を厭縮し、これに從はざる者に對しては、相當の刑罰を加ふるが如く、今日の世界には、國際公法に依りて、我欲の發動を禁止す。然れども是れを守らざる國家に對しては、刑罰を與ふべき法廷なきが故に、他の强力なる一國家は武力を以つて、彼れを懲戒せざるべからず。これ即ち正義人道を基礎とする理想的戰爭にして、日本の行動は、最好の實例なり。

我欲的戰爭は、殺人を以つて目的とす。これに反して理想的戰爭は、敵の戰鬪力を衰退せしむるを以つて目的とす。人道正義の觀念は、殺人の蠻行を許さゞるが故に、近世の戰爭は、必ず博愛の道念を伴ふ。戰爭中の博愛とは、盜賊の慈善と云ふが如く、混融し難きものなりと雖も、こは不完全なる社會狀態に於いては、免れ難き矛盾なり。

手段方法の上より看れば、近世の戰爭は、博愛的戰爭と稱すべし。而して我が陸海軍の行動は、此の點より看て、亦模範的なり。乞ふ二三の例を擧げて論ぜむ。

奈古浦丸事件以來、金州丸、常陸丸、和泉丸等、外十數隻に對して、暴行を加へたる浦鹽艦隊の行動は、果して近世の戰法に戻らざるものなりや。恐らくは、海賊的行爲と稱するも不可なからむ。是れに反して、リユーリック艦を擊沈せしめたる上村艦隊の處置、何ぞ夫れ美なる。六百餘名の露人は、我が甲板に收容せられて、非常なる優遇を受けたるのみならず「苟も生物とあれば、鳥類までも」收容せられたり。浦鹽艦隊には、恨重れり。若しも熱情に驅られなば、義理一遍の救助をなして歸るべきに、怨を捨てゝ、溢るゝ許りの慈愛を以つて彼れを迎へたるは、實に大和武士の美花ならずや。

旅順包圍軍は、勸降の軍使を送れり。旅順口の運命、既に定まれる今日、降服を薦めたるは、これ人道の觀念に基けるものに非ずして何ぞや。史に徵するに、包圍軍より勸降の軍使を派遣するは、包圍軍と敵軍との兵力相伯仲して、攻守長期に亘るに從つて、徒に損害を大ならしむるを憂へたる結果なり。即ち戰に倦みたる結果なりと謂ふべし。然るに吾が包圍軍は、實力に於いて、露軍に優ること大にして、たとひ露軍に神變不可思議の術ありと雖も、陷落は遂に免るべからざるなり。此の場合に當つて、聖旨を奉じて降伏を勸む、博愛思想の發現、それ斯くの如く美なるはあらざるべ

し。

此の他俘虜に對する待遇の、同胞に對すると異る所なきは、俘虜が本國に贈れる書翰に依りて明かなり。それ武士道なるものは、正義人道の發現なり。されば其の敵に對するや、罪過を責めて、人を咎めず。實力と實力とを戰はして、虚に乘ずるとなく、個人に對しては、秋毫も敵意を挿まざるなり。此の根本思想は、我が四千萬の同胞が腦底に、本能性として遺傳せられたるが故に、一兵卒の行爲と雖も、學ばずして自ら博愛的戰法に適ふ。看よ、己れの捕へたる俘虜に對して、自利を棄てつゝ彼れを慈みし例、日々の新紙に傳へらるゝに非ずや。武士道によりて養成せられたる吾が日本軍人は、歐洲人が、理論より打算したる博愛的戰爭の實例を示す。

斯くの如く、戰爭の目的より觀ずるも、又其の方法より考ふるも、史上未だ此の如き正々堂々たる戰爭あらざるなり。國際公法の理想は、日本軍に依りて實現せらる。此の故に、吾人は今回の王師を以つて、二十世紀の模範的戰爭となす。

輕薄なる日本人

黒聲子

上村中將の不利の位地に立てる場合には、一言の同情を寄せさるのみならず、聞き苦しき惡口雜言を吐き散らし、さてリューリック轟沈の報に接するや、舌の根未だ乾かさるに、上村中將萬歳々々と三唱す。かくも思慮の膚淺なる國民を後邊に置きて、戰場に望む軍人諸氏こそ洵に氣の毒なれ。

結果の好惡を看て、直に當局者の能不能を論ずるほど淺薄なるは莫し、また失敬なるは無し。

更に一歩を進むれば、國民の斯く輕佻浮薄なるは、新聞紙の罪過なり。常陸丸遭難の事件あるや、ドコヤラの新聞は、上村中將が夫人の素性を書き立てゝ、冷酷なる文字を加へたるありき。中將として、對馬海峽を護る上村氏と、夫人の素性と何の關係かある。思へば新聞記者の腦髓も亦鈍きものかな。

新聞の責任は、冷靜なる態度を以つて事件を判定し、以つて皮相の判斷を下さむとする社會一般を戒むるに在り。然るに我が新聞の多くは、社會一般よりも、譾劣醜陋の議論を掲載して、羞づる所なし。

又某なる新聞には、某誌が載せし紀行文中、故陸奥伯に關する記事ありしを讀みて、其の原稿は七八年前の者なるべしと嗤へり。原稿が新しくとも、内容の過去に關する事あるは、小學兒童も克く思ひ及ぶ所なり。其の點に考慮せずして、鬼の首取りし如く書き立てし記者の腦漿は、時節がら、余程腐敗したりと見ゆ。斯かる人こそ、山間の靜處に遊びて保養するが宜しからむ。

世の中に、馬鹿ほど恐るべきは莫く、馬鹿な新聞ほど、こわきは無し。近くは鰹節問屋仁辨事件あり。新聞屋といふ名稱の下に、記者の冷遇せらるるは、社會の愚昧なるが故にあらずして、記者先生等が、新聞記者と探偵とを混同して得意顔すればなり。

「東京朝日」紙上に掲載せられたる戰地通信「武士のなさけ」と題するが中に、號外の出る程の大戰爭ならば、却つて氣樂なれど、兵士の苦しさは、其の前後に在り云々と言へるあり。此の一言、よく出征軍人の困苦を言ひ表はし得たり。而して國民の想像は、此の點に及ばざるを如何せん。

高等師範學校問題

高等師範學校廢止問題は、昨年來の議題にして、今や、再び有識者間に討議せらるる。曰はく、帝國大學内に、師範科を設けて、今日の高等師範學校を廢止すべし。殊に戰國多事の場合なれば、經費節減の上に於いても、此の策は上乘なるべしと。

現在の高等師範學校なるものは、洵に不活動にして、其の卒業生は、鑄物の如く、融通のきかぬ者なり。更に其の學力を檢すれば、淺薄また狹隘、教師の講義以外に超越するもの甚だ稀なり。斯くの如き卒業生が、中學校及び同等の學校教師として、甚しく不適當なるは、誰人も首肯する所なり。

其の原因に關しては、數多あるべしと雖も、其の重なるは、學校系統なりとす。同校の入學者は、多くは師範學校卒業生なるが、然らずんば中學校卒業生なり。されば入學者の學力程度の低さ、又決して怪むに足らず。然るに其の生徒に向つて、帝國大學にも似寄りたる學課を授く。生徒が之れを咀嚼し得ざるに苦みて、機械的暗誦の方法を取るに至るは、蓋し當然の結果なるべし。高等師範學校の目的は決して惡しきに非ずと雖も、是れを活用する手段を誤りたるが故に、伽藍のみ宏壯にして、佛體なき有樣とはなりぬ。之れに比すれば帝國大學生は、中學卒業後、高等學校なる階段を經たるものなれば、縱令同一の講義を聞きたりとするも、其の學力に於いては、全く段違ひなり。

されば教育界振興の一手段として、高等師範學校を改良するは、焦眉の急なりとす。然らば是れを如何に改良すべきか。吾人の考ふる所にては、先づ其の入學者の資格を高めざるべからず。然らずんば到底立派なる中學教師を養成すると能はざるべし。教員の學力優等、人格秀高なるほど、望ましきはなし。されば其の入學志願者の資格は、高等學校卒業同等と規定するこ

そ至當なれ。かくて入學者間に競爭を行はしめ、學力優等なる者を選拔せば、將來に於いて、善良なる教員を養成し得るは、多言を要せずして明かなり。此の他種々の點に關して、改良すべきもの多しと雖も、改造の中樞は此處に存す。

かく論ずれば人或は言はむ、これ一種の帝國大學を組織するに異らざるに非ずやと。然り、吾人は教育專門の帝國大學を造らむと欲する者なり。從つて今日、高等師範學校なるものを閉鎖して、帝國大學内に、師範科を設置するを、最良の方法と見做す者なり。財政裕ならざる現時に於いて、新に帝國大學の如きものを設置せむと、甚しく困難なれば、寧ろ簡便の方法によりて、帝國大學と高等師範とが合併するこそ經濟的なれ。

由來教育界には、大學派と、師範學校派との競爭ありて、互に睨み合ひの姿なりき。去れば今日兩者の合同は、感情上面白からぬ點多かるべしと雖も、そは私情なり。私情の爲に國家の利は減殺すべからざるなり。

教界漫言

▲時局の教育界に及ぼせる影響は、過般來文部省の調査する所たりしが、愈よ結了して、世に示されたり。之れを看るに、吾人が想像したりしに違はず、單に形式上に多少の影響ありしのみにて、或る一派が、喋々せしものは全く杞憂なりしこそ芽出度けれ。

▲文部省の報告によれば、本年度の中學校入學者は、前年度よりも二千五百二十五人を減じ、實業學校にて千六百九人を減じ、師範學校にて五十六人を增し、女學校にて四百七十九人を增加せり、即ち差引三千五百九十九人の減員ありと。

▲言ふ勿れ、これ戰爭の結果なりと。又論ずる勿れ、當局者の不注意に因ると。入學者の增減は單一なる原因によりて生ずるものに非ざるなり。

▲報告中又曰はく、全國にて休退職を命ぜられたる小學校教員の數、約五千五百人と。是れ位の影響は、憂ふるに足らず。會計簿を開きて、支出の側のみ見れば、氣のへるものなれど、別に收入の側もあり。

▲菊地博士、學習院々長に任ぜらる。學習院は、適當なる總理を得たりと謂ふべし。學識經驗に富める博士は、必ずや院内の一大改良を施さるべし。吾人刮目して待つ。

▲由來日本の社會にては、封建制の餘弊として、親の後光を、其の子にまで移して眺め、兒童自身も、親の光にて濶步する弊あり。華族社會にては、其の弊殊に甚し。

▲親は偉人なりとも、子まで偉なりとは言ひ難し。子供は子供なり。彼れを獨立せしめて後に、其の眞價を定めざるべからず。かくの如くして、始めて教育の實擧り、生徒に獨立獨行の精神を養成し得べし。

▲華族の子弟も、裏棚の餓鬼も、家族の緣を斷ちて看れば、何れも全じ卵なり。教育者は先づ此の點を明かにして後、相當の薰陶を施さゞるべからず。

トルストイ翁の戰爭觀

トルストイ翁は偉人なり。遼東半島に轟々たる砲聲は、世界の耳目を動かし、トルストイ翁が『日露戰爭論』は、亦東西の人心を動かしぬ。

『タイムス』紙上、十段餘、十二章の大論文を草したる翁の氣力、實に强大なるかな。熱情炎々たる文字は、戰鬪の慘毒を指摘して、餘蘊なく、日露兩國の政治家、學者、軍人等を痛罵して假借する所なし。而して其の根本思想たる『己れの欲せざる所を、人に施すこと勿れ』を標榜して、戰鬪の絶滅せむとを祈れり。人道の爲に奮起せる翁の勇氣や大なるかな。

翁の論出づるや、或る一派は之れを稱贊したりと雖も、他方には亦非難の言を構へたる者もありき。『タイムス』紙の如きは、「識見の博大ならざると、及び創見の缺乏せるとは、即ち伯の思想の特色なり」と冷笑すると共に、翁が、魯の罪惡に對して、反抗したる日本迄を非難したるは矛盾せりと論じ、又有名なる『スペクテートル』誌は、「非戰論の基礎はすさまじき物質主義なり」と揚言して、伯の論は、理想のために、現實を犧牲にすといふ高尙の義を顧みざるものなりと論ぜり。

理論に照せば翁の主張には、幾多の謬妄あり、また矛盾あり。されど理窟一遍を以つて、翁を責むるは、苛酷なり、否、禮節を缺くものと謂はざるべからず。翁は熱誠を以つて、世界より戰爭の慘毒を除かむとす。其の好意に對して、理窟を陳述するは、可愛さ餘つて、小言を述ぶる親に反抗する不孝者に異らず。

然れども吾人は遺憾とす。伯は、吾が日本帝國が、已むを得ずして、干戈に訴へしを悉知せざりしなり。翁は我が日本を見て、露國と同一となす。不幸にして吾が國情の、充分に彼の地に傳へられざりし爲め、伯をして、非難の言を放たしめたるは、吾人の悲む所なり。

暑熱苦慮

◎熱しと思へば、八十度位にても堪へ難く、責任を果さゞれば、避暑地に在るも、市街に住ふよりも暑し。げに借金を返したる程、涼しきは莫しとは、金言なるかな。

◎心に束縛なきほど、涼しきは莫し。燃ゆる大地に坐して、熱湯を呑むも、獨立自由の心だにあらば、世間への見え一つにて、山よ、海よと、騒ぎ廻る人々よりも、涼を覺ゆ。

◎元來健全の者が、病人の入り込む地方に避暑して、得意顏するは、

視力强きにも拘らず、近眼鏡かけて、あつぱれ學者ぶる馬鹿者よりも、一段白痴に近き者なり。これ勉めて躰質を虚弱ならしめ、はては治し難き病を買はむと欲するに異らず。

◎人間には、自然界の刺激に發する防禦力あるものなり。人は之れを忘却して、人爲の方法もて、自然に對抗せむとす。襟巻、手袋、耳袋等を、必要なき場合にすら使用するか如き、或は避暑、避寒と稱して、彼の地、此の地と飛び廻るが如き是れなり。

◎或る度迄は、自然に對峙し得る人躰を有しながら、是れを用ひず、却つて其の發達を防遏せむとするか如きは、病を求むるに異ならず。恐るべきかな。

◎かく論じ來ればとて、避暑旅行と、氣取り難き身分の瘦我慢にてはあらず。

◎露帝嘆じて、のたまはく、吾れは暗中に生れ、吾が幸福は暗中に逝けり云々と。これ蓋し露人全般の感慨ならむ。

◎日本海陸軍の大刺激を受けたる露人は、はじめて自意識の狀態に移れるなり。玆に百難万苦、惡魔鬼神の如く羅列す。露帝及び國人の厭世觀を生じたる亦當然の結果なり。

◎願はくは、男兒を授け給へとて、寺院に祈禱を籠められたる露國皇后は、先つ頃皇子を舉けさせ給ひぬとか。其の喜悅や、國家の暗黑なる現狀に葬られつゝあり。喜憂混じたる露廷の樣子はいかに。

◎アレキシエフ大將が生命は、旅順口の陷落と共に絕え、クロパトキン大將の生命は、遼陽の落城と共に消ゆ。盲目的に開戰論を主張せし東亞總督は、遂に非戰論者クロパトキンを、まきぞへにせるなり。

◎人あり、ラスキンに語つて曰はく、兵士の職は賤し、その職は殺すに在りと。ラスキン應へて曰はく、否、兵士の職は賤しからず、そは最も高尙なり、兵士の職は死するに在りと。特に日本軍人をした評るが如し。

◎イエス、キリストの教戒中、尤も趣味あるもの一を得たり。最後の晩餐に臨みし彼れ、その死後に於いて、弟子の執るべき方針を諭して曰はく、

われ財布、旅袋、履をも持たせじ爾曹を遣はしゝとき、事の缺けたるを有しや。答へけるは無かりき。イエス彼等に言ひけるは、今は財布ある者は之れをとれ、旅袋ある者も亦然り、此れ等を有たぬ者は、衣服を賣りて刄を買ふべし（路加傳第二十二章第三十五節以下）

◎キリスト程の聖賢ならば、財布も旅袋も履も劍も無用なるべけれども、去程の德もなくして、而も人間世界に在るものは、此れ等の武器を要するなり。前記の語を單に比喩として看るも、耶蘇が、奮鬪を以つて眞理の普及を謀らむと欲したるは明かなり。佛書に曰はく、活人劍と。

◎「死れば名譽」といふ危急の場合と「犬死してはならぬ」といふ危急の場合とは、心狀態に大差あり。前者の氣樂にして、後者の苦痛多き、これ安坐する者の、容易に解し得ざる所なり。吾人、彼の通信者が言に因りて、昉めて之れを知り得たり。

◎徒に戰爭の害毒を唱ふるよりも、今は如何にして、戰期を短縮すべきかを研究すべきなり。而して是れと共に、如何にして戰爭を絕滅すべきかを討究すべきなり。

◎こゝに哀れをとゞめたるは、尾崎東京市長なり。始めはチヤホヤ言はれて、今は委任事項を取り消さる。市長の手腕をも檢せずして、不信任問題を擠き出したる市會は、始めは、嫁よく／＼と可愛がりて、三四ケ月の後には、理由もなきに白眼剝き出す姑の如し。

◎露の軍人曰はく、女房が戀しい。日本の軍人曰はく、『勝つて歸れば

男爵夫人、死なば浮氣の後家となれ。』松王丸曰はく、家て存分ほえたちや無いか。

◎乃木將軍、出征に際し、夫人を顧て曰はく、戰死せば、貴様も家に火をかけて燒け死んでしまへ、何、財產、それは　陛下にお返してしまへと。

◎日本にて、戰場に向ふを、目出度い門出とす。西洋にては不吉の門出なり。

◎海老茶式部は、蔓草の如し。ひッからまるが生命なり。全じ蔓草にても、朝顏位なれば、摘まれても好けれども、胡瓜、かぼちや、白瓜ときては閉口なり。

◎米國シコカのペカル、ケーラス氏は、黃禍論と題して論ずらく、極東に一大勢力起りたればとて、何ぞ畏るゝに足らむ。一大勢力の勃興は、必ず好結果を生ずるは、古今の歷史に徵して明かなり。今や吾人は、極東を研究して、其の長所を學ばざるべからずと。科學敎の主唱だけありて、論旨穩健なり。頑迷の歐人三讀して可なり。

◎米國の閨秀作家メリー、コレリー女史、文士として、自己の經驗したる樂しき生活を錄して左の如く言へり。

(一)出版者が、一書を上梓する價値ありと認め、且つ作家に對して、最上の待遇をなして、原稿料を支拂ひたるは、多少を論ぜすうれし。
(二)世評か贊否ほゞ同數に派れたる、
(三)批評家の說亦贊否各仝數に派れたる、
(四)自筆の請求續々來ると、
(五)書翰を請ふもの多き、
(六)命令的に、また或る場合には脅迫的に會見を求むろ、
(七)贈書の陸續として舞ひ込む、
(八)結婚の申込來ろ、
(九)文學志願者の、原稿周旋を請求し來たろ、
(十)自己、朋友、執職の方法、其の他さまぐ\の周圍に就きて、噂とりぐ\なろ、
(十一)競爭者の猜忌心多き、

これ皆な樂しき感を催すと。吾が國の文學者にも聞いて見たきものなり。

◎團菊逝きて未だ幾許ならざるに、左團次亦逝けり。劇壇の舊派は全く陷落せり。さりとて新派も賴むべからす。其の將來の爲を謀らむとせば、新舊二派は合同すべし。

◎湯淺吉郎氏の新躰詩『七海』、『讀賣』紙上に掲載せらろ。詩韻もなければ、修辭もなく、平々凡々の作なり。當年の英雄、亦衰へたるかな。一寸一例を擧げむ。

土鍋洗ひて、米などとぎ、庖丁とりて眞木わろも、
誰にこゝろを沖縄の沖もいつしか過にけり。

又大尾の一節は左の如し。

あなおもしろと思ひれの
夢か、あらぬか、あらがれの
碇なげこむ水の音、
おどろきさめてみわたせば、
和田の三崎の松青く、
須磨までつゞく砂白し。
七つの波路一萬里、
郵船六千二百噸。
日いらぬ國の都より
日いづろ島の港まで

かへる大船棧橋に
つくやあはだつ白泡の
きゆるおもひをわづかにも
しるしのこし丶水茎の
あとなき舟の日記かな。

これでもチルヅナルスに倣ひしものとかや。

◎社告　紙面の趣味をして一層饒多ならしめんが爲め、次號よりは更らに文藝美術に關し、深刻痛快なる評論を加ふべし





一言一話

漫評

窮紬子

▲第三軍司令長官乃木大將、剛氣木訥、眞個武人の典型也、曾て陸軍少將として某師團に在るや、彼の有名なる彼の『山ゆかば草むす屍、海ゆかばみづく屍、大君のへにこそ死なめ、長閑には死なじ』の古歌を愛誦し、或日士卒を集め講じて曰く、軍人は君王の爲に命を捧ぐるの覺悟なかる可からず、されども喉を衝て死する如きは甚だ不可也、古歌に云はすや、大君のへにこそ死なめ、のどには死なずとあるに非すやと、率直にして天眞の流露せるを見る可し

▲滿州軍總司令官大山大將、同參謀長兒玉大將の爲に水交社に送別會を開く、有栖川宮、山階宮を始め在朝文武の大官悉く集る、宴に先ち紀念の爲に撮影す、兒玉大將と長岡參謀長の二人右向き半面を寫せり、

人あり兒玉大將に問て曰く、閣下の寫眞を見るに、正面のものなく毎に半面を寫せるは何故なるやと、藤園大將眞面目に答て謂ふ、予の顏は半面を撮れば威嚴一層加はると。

▲參謀次長長岡外史、才氣縱橫、智謀涌くか如し、年少陸軍士官學校に在り、作文の試檢に『月瀨觀梅記』の題出つ、科に在る者、皆思を練り句を案じ頗る苦心す、外史夷然として毫も意に介せざるもの丶如く、直ちに筆を執て記して曰く『予未だ月瀨の梅を觀ず、故に之が記を作る能はず』と、試驗官見て其の奇才に感じ滿點を附せりと。

▲有馬海軍大佐(良橘)は旅順閉塞を企てし主張者にして武勳赫々、勇名中外に喧傳す、大佐爲人摯實謙讓、自己の勳功毫も知らざる者の如く、曰く、世人閉塞隊員を以て決死隊と稱し、喧傳措かず、然れども戰ひに臨む者何人か死を決せざらんや、生還を期する如き我陸海軍人中蓋し絕無なり、又閉塞隊員勇者ならば、百二十度の高熱中に汗を流して石炭を燃くもの、彈丸雨飛の中に從容として無線電信を操るものも亦等しく勇者也、着し職務に忠實なるは勇の德也と、善哉言乎。

▲芳川越山、將棋に強く、巧に義太夫を呻り、詩も亦幼學便覽的群を超ゆ、這翁眞個に多藝と云ふ可し、頃日湯源に赴き賦する所に曰く、

淡雲籠樹路高低。雨後青山雪漲谿。
怪底肌膚忽生粟。水晶簾外轉雷蹊。』
遼左戰塵飛未收。瘡創來浴幾貔貅。
溪山依約當年色。還惹行人何限愁。』

▲麻布警察署に井上角八郎あり、角五郎とは何でもなし。

▲井上姓にエラ者多きは曾て聞く所、眼科專門醫に亦井上姓多し、曰く、井上通泰、井上豐太郎、亦井上達七郎、

▲博士森鷗外、本業の醫學よりは文學者たるの名高し、青山胤通某小説家に謂て曰く、貴公等は森を鷗外鷗外と呼でヘッポコ文學者の仲間の如く思て居るが、森は醫學に於て多大の貢献を爲して居る、日本のヘボ文學者の中に森鷗外の名を列するは玉石混淆も亦甚し矣と。

▲露西亞ては棺を掩ふ布の色を死者の年齢身分に因て異にし、小兒には淡紅、婦人には深紅、寡婦には鳶色にて如何なる場合にも黑色を用ふるとなしと。

浮世の相

小梅閑人

あの賴まれもせぬ、入らぬことを英國と米國とに行つて喋つて居る、末松、金子の其の金子堅太郎は入らぬことはよく喋るけれど、必要なことは知らぬから喋れもせぬと思はれる。親分伊藤博文が獨逸皇帝に謁した時に、日本に田中正平といふエライ人がある、近頃どうして居るかと尋ねられて、先生は一向に其名を知らず。大に面目を失したといふ有名な話がある。金子のはモソツト、ポピユラーの事柄て、或意味に於てモソツト重大なることてあるにも關はらず、金子不案内の耻をかいた譯てある。といふは、當時早稻田大學に英文學の教授たる小泉八雲といふ有名な文人がある。斯道に志ある人は誰れも知らぬ者は餘りはないてあらうが。金子は知らないのだ——此の小泉八雲氏に就いて金子等に教へて置くが、此の人は我が國に永く在つて、我が國土風俗人情を愛し、遂に歸化して名をも我等と同じ名稱に變へ、盛に詩筆を呵して我が國の美點長所——重に細微なる風俗人情に關する物語を綴り米國に於て出版して居るのてある。其處て、金子が一夕、彼方の宴會の席上に於て、さる紳士に小泉の事を話掛けられたるに、同人一向不知案内、紳士に向て、一言知らぬと答へ、爲に座興索然とした、といふ事をさる處て傳へ聞いた。想ふに紳士は此の日本の紳士と話を交ふるには時節柄之れより好題目はないと思つたてあらうに、金子は遂に知らなかつたのだ。話が少しクドイやうだが、是等の逸話は遂に政治家、外交家たるもの丶資格を定義するものてある。小泉や是れ日本に流寓せる渺たる一文人のみ。併かも彼れが三寸の筆を以つて米國の讀者社會をアツトラクトする結果の甚大なる五人の高平公使、十人の金子堅太の力よりも大きいのてある。凡そ國土の風俗、人情、思想を互に融和せしむるもの官憲の法治的力に依る所は割合に少いのてある。僅かに一人の公使や政客の辯力に依つて左右せらる丶までてはない。小泉八雲が我が國に於て古來最も多く磨滅せられざる山間僻遐の人情、風俗の美點長所を四人に理解せしめ、我が國民俗性情の愛すべくして惜むべからず、親むべくして疎んずべからざるを知らしむるの切績誠に偉大なりといふべし。特に英語國の人民が此度の事件に我が國に多大の同情を表して居る其の原因は多々あるが、小泉が文筆の力も亦た決して沒すべからざるものてあらう。

▲浦鹽艦隊攻擊の際、第二艦隊司令長官上村中將が多數の溺者を救濟した事に就いていつて居る所を見るに、中將は單に武夫たるのみならずなか／＼經世的識度を具へた人てあるといふことが分る。吾人は我が國の政治家在上者が今少し多量の經世家的識度を備へんことを願うのてある。小泉八雲は何ういふ譯てあつたか帝國大學講師の職を去り、今は僅かに私立學校に教へて居るのてある。敢て期せぬ所とはいひながらも、結果に於て我國を世界に了解せしむるの媒をしつ丶ある此の文人を見る眼のある經世家はないのてあらうか、黃人禍の宿題を解くよすがを提供するものは刑名の學者にあらずして面白きテールの作者に在るを悟れ。

憎まれぐち

美中天

戰爭雜誌としては吾人は一として見るべきものを紹介し得ず、畵は不自然なる江戶繪的、記事は新聞

の切扱に荒唐無稽の想像を加へたるもの、而して曰く賣れざる也不景氣也と、社會を見下げ果てたる寧ろ無禮也、世はいつまでも日清戰爭當時の時代にあらず、吾人は雜誌編輯の先達より寧ろ社會の眼の肥えたるを恐る、彼等は新聞紙の燒き直しを操り返して見る程呑氣にはあらざるなり

武裝したる文藝雜誌見上げたるもの也、文藝倶樂部新小説文藝界遂に大作傑作の見るべきなし、柳浪子は曰くあまり戰爭に勝つから自然作家の思想が平凡なるを免れずと、然れども小説は事實にあらず汝が空想の生むところ也、勝つて大作を出し能はずんば負けつゝありと想像して、或は露國側に立つて大作を結構するも敢て妨げざるにあらずや

百字文の銀月か、銀月の百字文か吾人知らず、頃日初めて百字文會第二號を見る、近時稀に見る活氣汪溢の雜誌也、然れども「銀月先生〳〵」とは尚可、先生の筆になれるものは特別に飾り立てゝ其先生の先生たる所以を示し以つて田舍者をして難有がらしめんとせる不平等なるには驚かざるを得ざりき、書肆の無謀はとがめず銀月先生が之に甘んじたるは些か先生の爲めに惜む處也、日本文學界に一の詩影を貢献したる功は多謝すべし、而も其筆を染めしは殆んど前後なく、其作物も亦弟たり難く兄たり難きものあるにあらずや、吾人は銀月の百字文たらずして文藝界の百字文たらしめんことを希望するもの也

萬朝報の茅原華山氏筆硯益々旺んなり、其政治論よりも文學的の論評最も見るべく、教育論よりも多少哲學趣味の文章世にもて囃さる、近時其文名嘖々として學生間に唱へらるゝものゆゑあり、氏人と語るや常に何物かの問題を促へて人の論を聞かんとす、而して己も亦常に何物か解決を求めつゝあるものゝ如し、氏遂に哲學者たらんとするか、然れども其頭は何處までも新聞記者的也、決して哲學者のがらにあらず

新進作家の手になりて多く人に認められ易きは所謂光明小説なるが如し、而して老作家も亦光明小説に筆を染めんとする傾向あり、是れ社會の要求なるべし、家庭の要求なるべし、社會風規の爲めには喜ぶべきも藝術そのものゝ上には其善惡未だ知るべからざるものあり、昨今萬朝報に掲げらるゝ三宅靑軒氏の天の使最も拙作なり、光明小説の失敗は鼻向のならぬもの也、吾人はむしろ曖昧なるも詩趣に富んだる鏡花の幽靈物語をとらんと欲す

青年文士の不平は今の文壇が其内容を見ずして其著作者の名によつて迎へらるゝ事なり、而も致し方なき也、致し方なしと雖も殆んど小説の體を爲さず、海月のやうにフワ／＼としたる作物が麗々しく出版され雑誌の裝飾とされるに至つては慨歎に堪へざる處なり、渡邊霞亭の如き、この煮ても燒ても物にならぬ海月流小説の隊長ならずんばあらず、

小なる者は活動し大なる者は停滯す、少數の信者を有する基督教は中央都會の精神界を支配しつゝあり、大なる佛教は何事を爲しつゝありや、杳として聞くべきなし、佛教者にして基督教信者ならぬものも今や無意識の間に基督教化され、社會に向つても、家庭に向つても、將又筆を論評に走らすも、小説に染むるも其説くところは即ち基督教の精神なり、二代目の露伴また見る可らざるか、熱血逆れる佛教者遂に出現せざるか、世は卿等を要せざるには非ざる也

鬼面魔語

酔美生

▲今後一週間にして世界は破壞し、人類は全滅すること最も確かなる事實なりと思惟せよ、然らば一般人類の狀態如何なるべきかを想像するはいとも興ある業なり。或は人生の果敢なくして死後の知り難きを思ひ、哲學的冥想に耽けるもの多かるべきか。或は日頃の念願皆果たさんなどいひて、酒を飲み、色を漁しあらゆる本能的行爲を恣にするものあらはるべきか。或は俄かに慈悲心を起し互に救ひ合ふ極樂を現ずべきか、或は急に獸慾心を生じ共に奪ひ爭ふ地獄の姿を呈すべきや。此事を想像して深きに至らば人性本然の眞を悟るに於て多大の益あるべきを信ず。

▲好んで醜き下女を選ぶ奥サンは必ずや嫉妬心深し。

▲默阿彌の脚本を見るに、事件の排列及び全體の統一に於て多少の遺憾なきにあらずと雖も、其一場／＼の波瀾及び數多き插話に於て浮世の種々相をあらはし、無限の趣味のあふるゝを見る。要するに彼は大いなる浮世通にして、泰西二三の戯曲を讀みて直ちに脚本に手を出さんとする輩の到底及ぶべからざるの美點を有す、少しく劇に志あるもの必ず彼の作に學ぶ處あるべきなり。

▲上村中將に對する世の一毀一譽笑ふべく又哭すべし、然れども所謂世俗の人を見ること概ね斯の如しと思へば丈夫兒何の心を動かす所なかるべきか。萬朝報が中將に送りし俳句、

　大海に襲ひ落し秋涼し

といふもの頗るわが心を得たり、錄して世の同好の人に示す。

▲わが國人が朝鮮問題を論ずること頗る囂々を極め、然して實行に至りては一も見るに足るものなし。北米合衆國が布哇を合するや、未だ其噂すら世に傳はらざるに、已に其領土となし了りたり、我政治家の猛省を望まざるを得ずとは江原素六先生の話。

▲先生又語りて曰く我國人が朝鮮を取扱ふに恰かも白痴愚人に對するが如く、事々物々皆輕忽に附するは頗る誤れるの所以なりといはざるべからず。此れにつき面白き話あり、千八百五十五年の頃、和蘭に一青年あ

り、病氣の故を以て其兩足を切り、生活の資を得んが爲めに畫を書くことを學び、上達して多少の資產を有するに至りぬ、一日其雇人用事ありて他出し、家には不具者一人のみ留れり。盜賊此隙を見て入り込み、あらゆる價ある品物を集めて持ち歸らんとすれども、青年は素より兩足あらざれば立つことさへならず、其儘に任せ置くに、盜賊ます〳〵附け上りてあらゆる、箪笥をあけ、押入を探り、悠々として物を盜みつゝあり、茲に於て畫家一策を案じ、自ら持てる鉛筆を揮て紙面に向ひ、其盜賊の顏面及び衣服等を書き寫し、盜賊の去れる後、之を以て訴へ出でたるに、盜まれし品物は悉く其日の中に手元に戻れりといふ。兩足なき不具者の家に盜まんとするさへ、よく顏面を蔽ひ、樣子を見られざらんとするの注意を要すべしとせば、其國民いかに愚かなりとするも四千年の歷史と一千万の人口を有する朝鮮に對するわが國人の處置、誰か見て以て寒心せざるものあらんや。

▲一葉女史の文は恐らく露伴、紅葉よりも長き後まで讀まるべし、是れ一は其文の長からずして讀み易きにもよると雖も亦一は其文のキリゝと締りて文學上の價値却て二氏の上にあるによるべしと思はる。

▲福澤先生の如きはひとり歷史的に偉勳ありしのみならず、後代に至るも少しも其價値を減ぜざる人なるべし、其文章の平易にして妙味盡きざる、其思想の偉大にして實際に明かなる、誰人か之によりて啓發せられざるものあらんや、世の所謂思想なくして字句を弄する文學者人世を知らずして理屈を捏ぬる思想家の如きは七度生れ換はるも其眞似は出來るものにあらざるなり。

▲花火とは美しきものかな、朝顏とは美しきものかな。共に生命の短かきをいふことなかれ。醜くして、汚くして生命長からんものゝ上を思ひ見よ、余はむしろ短かくとも美しきものに團扇を上げんかな。

▲源之助の切られお富を見る。かゝる役を勤むるもの彼を措いて他に其人なければ素より惡しからん譯はなけれど、不足をいへば、余りに樂々とやりて少しく群衆を馬鹿にしたるが如き氣味ありしは口惜し、此前に演じたる藝者かしくの方却て出來よかりし如く思ふは僻目か。

▲日光のジリ〳〵と照りつくる時、蟬の鳴くを聞けば、さながら身中の汗を絞り取るが如き暑き聲に聞き做さるれど、青葉の蔭の涼しき風の吹き通ふ處などにて鳴くを聞けば膚を洗ふが如き涼しき聲に聞き做さるゝは蟬の聲に差異あるか、但し又聞く人の心次第か、其理由こそ知らまほしけれ。

▲讀賣の十人十色中に劍菱生の草したる「醉生夢死亦可ならずや」といふ文は恐らく醉中又は夢心地の時に記したるものならん、人生の實際問題に當りて首をうなだれざるべからざる時には何の益なき文字なりといへども、盃を把りて月に向ふの夕、蓆を敷きて木蔭に覺むるの朝、一讀して興味ある文なり、余は深く此種のものを愛す。

▲演藝の趣味を解せざる人は不幸なるかな。彼は極めて單調なる生活の外何物をも知らずして墓場に入るべければなり。されど又演藝にのみ醉ふて實際の人生を知らざる人も亦不幸なるかな。彼は夢裡の美觀の外何物をも知らず、世路に蹉跌にのみして此世を去るべければなり。されば人生の旨味をして豐かならしめ、且つ生活の意義をして全からしめんとすれば、必らず演藝の趣味に加ふるに、世態の實情を知悉するの要あり。

▲如何にせば最も面白く、價値ある生涯を送ることを得べきか、是れ余が究めつゝ且つ進みつゝゆく道程なり。

新柳樽

久良岐撰

改良服町内丈は傘を低れ　水日亭

三度目のベルでそろ／＼告別し　呑吐坊

税關吏面白がつて荷を解かせ　文象

太つてう据りがよいと誰れかいひ　岐陽子

動き升！電車地震の樣に觸れ　同

橋の下凉しくつても御免だね　同

そろ／＼と灘にうたれてキャッと逃げ　同

歸省して二言めには東京じや　四波坊

いづれ調べて來ませうと敎師ぬけ　同

何大器晩成ですと落第し　同

赤帽に三等切符と小聲なり　水日亭

旅客の手荷物何んの恨かぶん投る　同

汽車旅行書物讀ぬが能く喰ひ　同

田吾作が二等車あけて這入るッペ　同

泳げない監督小言ばかりいひ　一波坊

そうだらうウムと自分で返事をし　岐陽子

伯父さんにお手々お見せと種痘をし　柳左衞門

網の魚宜しくあつて寐坊起き　秀耳

御慶の時丈系圖名告り出て　天緑

海抜一万二千尺太平洋を水鏡　左久良

フロックのブッサキ分けて腰を掛け　文象

出來さうに話すは例の周旋屋　伊三美

磯で見れば入日びこんともぐる也　水日亭

鳴くだんべッラあの聲が子規　同

乞食の子瘦せて居る程幅が利き　一波坊

(職人)拳骨を自分の腕へくれて見せ　信州山猿

(店員)お店者困つた樣に畏り　同

高襟ズボンの銀貨ちやらつかせ　戰雨

黒褌してる河童の御大將　いな妻

精しくは宅でと易者逃げを張り　同

背負つた子を一搖りゆつて立てうず　水日亭

眞黒でない子はお辭氣上手なり　同

豈圖らんや女程なく卷煙草　同

其の脇へかけると讃美歌共に見せ　支良久

讃美歌て罪ある人を呼びつどへ　秀耳

新鮮の空氣がいやて上京し　同

游泳の河童は家根て甲良干し　文象

下手な奴蒸氣の浪をガブリ呑み　同

游泳の河童褌下げてくる　同

女湯の餓鬼を親治が叱つてゐ　一波坊

水槽のとこからシャボンによッと出る　一波坊
穴守の信徒いづれも狐狸の類　柳左衛門
やらんやりやるやれやろうもらいまいましよ　山猿
電車では男黨女黨睨み合ひ　松月生
萬歳に醉つて大將腰が拔け　天縁
いさかいもコレサ〱てやめりや無事　同
雷て家中帶をメ直し　同
のう嬶朝鮮へ行つて茶ヅろうか　同
おだてれば大韓國とつけ上り　水日亭
大道で糞ヒリながら喋し合ひ　同
朝鮮カラー洋杖代用の煙管持ち　幻怪坊
戰死者の葬儀ピードンで祭り上げ　同
哀悼に堪へずと弔詞丈の事　同
弔詞とは氣の毒そなに書いた迄　同
萬歳聲裡ピーガタリシユツ〱タツタタ　鈴成
夕立て顔の白壁半ば落ち　青葉
富士登山七分は汽車と馬車と馬　大灣堂
大欠伸牧師はキツト睨めつけ　秀耳
退屈をすると巡査は髯を撚り　文象
お客樣歸ると折は檢査され　同
尋常科荷馬車の跡へ吊る下り　同

菓子片手國旗片手に坊は寐る　圓角坊
沖の浪モコ〱〱と押寄せる　水日亭
足袋はだし馬糞を飛んで濱へ行き　同
自働車に孃は浴衣で召されたり　金比古
催眠術睨みつけたり摩つたり　宮坊
避暑先きの戯談遂に駒を出し　秀耳
交番で聞いてごらんと澄し込み　同
素人義太泣くも笑ふも區別なし　圓角坊
お天氣師貰の火から借り始め　水日亭
衣物着た息子を野良で叱てゐ　同
暑い〱と帽子も取らず眞つ裸　宇皎
お供物は生きた餓鬼から成佛し　同
旨さうに洗流しを下女は喰ひ　同
どの役者出ても夕屋ーとほめて置き　同
雛樣の武器らしい道具齒科醫出し　久良岐
口をアーンとお明きなさいと齒科醫云ひ　同
國民の懶惰が目立つ溫泉場　同
靴の上草鞋を着けて毛唐行き　同
溫泉料理うま煮鹽燒玉子燒　同
公時の公が禽獸の禽になり　同
黒鳩は肩を抑へてあとずさり　同

▲募集

題隨意▲〆切九月十五日▲東京市麴町區富士見町六ノ十阪井久良岐宛▲用箋端書中公央論川柳募集ト認メラレタシ



中間社會

（宿場の衰頽に就て）

横山天涯

一

上世時代の驛家、郡家、鎌倉時代の大宿、小宿、足利時代の問屋場、更に德川時代に入つては、一般に宿場と呼はれてゐた、街道筋の一部落、今日は都會と村落との中間に、名も『町』と呼ばれて、依然として、一ッの社會を形作つてゐる、が、假に北米合衆國の如き新天地より來つて、都會でもなく、村落でもなく、此の間（あい）の子の小社會——町といふものを見れば、恐くは異様の感に打たれるであらうと思はれる。最も米國には、都市と村落との間に、タウンといふ一種の社會がある、然れ共、之を我國の『町』に比ぶれは、甚だ趣を異にしてをるのである。

今日地方制度の上にては、町は一ッの行政區劃となつて、嚴然として存在してゐる、議員撰擧の場合に於ても、町は、郡役所あり、倶樂部あり、遊廓はあるので、自づから中央集權の地を占め、附近の村民を集めて、繁華を示してゐる、併しながら、社會的に、宿場——今日の町を觀來れば、自分は唯一種の骨董品として、歴史的紀念として、或物を認むるほか、他に何等の價値を認むることができぬ。故に、宿場の研究は、その前途は如何なるべきかでなくして、過去の變遷を見るのが價値（ねうち）であるので、宿場の生命も、實に此の過去に葬られた一種の消息に濫まれてゐる。

二

淺井了意の東海道名所記を見ると、島田驛の條に至りて

男申しけるは、いざやここにて宿り侍らんといふ、樂阿彌申すやう

旅なれぬといふは、此事なるべし、此さきに大井川あり、駿河と遠江とのさかひなり、又あの世、この世のさかひをも見るほどの大河なり、南風には水まさり、西風には水おつる、明日香（あすか）川にはあられど、大雨なれば、淵瀬かはること度々にて、さだまらず、あるひは東の山の岸を流れて、島田の驛を河中になすこともあり、あるひは西のかたにながれて、かなやの山きはにそうこともあり（中略）、然るに此ほど打ちつゞきて、雨ふらず、水はさだめて、すくなかるべし、今夜島田にとまりて、大河を前にかかへんことしかるべからず云々

と出てゐる、之を以て見れば、舊幕時代の島田驛は、あの世、この世の大井川を前に控へた、左も恐ろしげな街道筋で、安んじて住居してゐることだもできぬ場所のやうに思れるが、故老の説によれば、此の「岸が切れて流るれば、河中となる」といふ島田驛は、土木の不完全なるが爲めに、却て繁昌を致した趣もあつたので、現に馬琴の羇旅漫錄に

連日の雨は大井川往來なければ、岡部より嶋田の間に、諸侯みちみちていとにぎはへり、予は二十日の日、嶋田に入る、予が知れる因幡屋てふ家も、森侯の本陣と爲りぬ、この家、旅店にあられど、富める者なれは、かくの如し、因幡屋の向、何がし源次とかいへる商人の家に逗留す、時々の飲食は、因幡屋より持ち來りて、饗應しぬ、夜中、驛中の繁昌、小人のうたなど、しばらく江戸に在るが如し、川は十五日より二十二日にいたりて、はじめて明けぬ。

とあるのを見ても、島田驛の繁華を致した理由がわかる、然かも、右の如きは、啻に一の島田驛ばかりではなく、東海道五十三次、その程度に大小の相違はあらうが、大抵島田驛の繁昌と、原因同じ。

三

一體我國の宿場は、大化二年、唐制に倣ふて、初めて木曾街道が出來、和銅四年には、諸國の要所に郵亭驛が置かれて、爰に旅人の便宜を謀るべき一種の社會――都會でもなく、村落でもなき、半都會半村落たる中間社會が、初めて萌芽を發したのである、然かも當時の狀況は、

三河と尾張となるしかずがの渡、實に思ひ煩ひぬべくおかし、尾張の國、鳴海の浦を過ぐるに、夕潮だにみちにみちて、今宵宿からんもちゆげんに潮みちきなは、ここをも過ぎじとあるかぎり、走り、惑ひすきぬ、美濃の國なる境に、すのまたといふ渡して、野上といふ所につきぬ、そこにあそびとども出て來て、夜ひと夜歌うたうに、足柄なりしを思ひ出でられて、哀れに戀しきことかぎりなし、雪ふり荒れ惑ふに、物の興もなくて、不破の關、あつみの山など越えて、近江の國おきなかといふ小人の家にやどりて、四五日あり、みつさか山の麓に、夜晝、時雨、霰ふり亂れて、日の光もさやかならず、いみじゆものむつかし（更科日記）

之は今より八百五十年の、街道筋の狀態で、郵亭驛

が置かれてより、四百年ばかりの間は、實に更科日記に出てゐるやうな鹽梅式、唯、一條の道路が、旅人の前に開かれてゐたといふ丈けに過ぎなかつたので。降ッて文治元年、源頼朝が覇府を鎌倉に開いて、我國の社會組織に一新紀元を作り、鎌倉と京都との間に、飛脚の行程を定め、百事改革を企てたる結果、中間社會の體裁も略ぼ整つて來た、曾我物語に

新程建久四年、癸丑四月中旬比、和田左衛門義盛、引㆓具子息達㆒自㆓伊豆安多美湯㆒被㆑下㆓向㆒、詣㆓早河湯本㆒、返㆓三浦㆒、其日朝夷三郎和田義秀、雜掌先樣付㆓大磯宿㆒、費息和田殿來、義盛言、聞㆑音、呼㆑虎見有熟々見㆑虎、有㆓吉傾城㆒、義盛年不㆑寄、不㆑叶㆓十郎㆒可㆑移㆑心被㆑思、何副㆑身如㆑影、被㆑寄㆓五郎殿㆒候㆓我留守㆒被㆑申、其詞未㆑了、五郎門内極入、和田殿見㆑之、流㆑涙、哀契不㆑遂者哉、是是被㆑爲㆓征宴㆒日威㆑晩、暇申殿原被㆑立。

と出てゐるのを見ても、略ぼ宿場の體裁が整つて來た樣子が見ゆる、後日宿場の間に唄はれたる、岡崎女郎衆はよい女郎衆……の娛樂機關も、當時既にその面影を露はしてゐる。併しながら今日の如き發達を示したのは、三百年間、打ちつゝいた泰平の庇蔭で、街道第一の名を博した東海道の如きも、假令鎌倉時代に、その端緒は開れたにもせよ、中間社會の性質を備ふるに至つたのは、無論德川時代に初つたので、即ち或意味にては、宿場の現出は、德川氏が採用した封建制度の反映で、三百年の年月によつて生長したものといつて良いのである。

爾うして德川時代にては、旅人の便宜に供へられた、所謂宿場であると共に、親しく其の地に就ていへば、例令千戸に足らざる宿場にても、その周圍の村落に對しては、日常の需用品を供給してゐたので、諸侯が屋城を構へてゐた都會は、城下と呼ばれて、其の地方の政治及經濟上の中心點と爲つて、一種の都會粧を作してゐたのである。こゝは甚だ馬の不自由なる處なり、特にのりかけの旅人には、宿をさかさず、たとへ宿かせども、はたご錢餘所より一倍高し、その故は、宿うちは馬なし、若し馬を借らんといへば、やどより宿の問屋にあんないをいふて、問屋の手形をとり、一里も二里もわざ〱右郷へ馬をかりにゆく、故にむづかしがるなり、「これ問屋のあしき故なりと所の者いふなり」と名所記に出てゐる蒲原驛の如きは、近頃漸やく町制を布いた宿場で、寧ろ村落に近かき一區域てあるが、併しながら、例令旅人の眼には、はたご錢餘所より一倍高く、一里も二里もわざ〱馬をかりにゆく不便な土地て、宿場の一資格たる交通方面は、甚だ不完全で

あつたにも拘らず、附近の村落に對する他の資格に於ては、都會的機關を具備して、優に方二三里間の中心點とは爲つてゐたので。啻に蒲原驛ばかりでなく、旅人に馬の少きを惡口されてゐた、江尻宿の如きも、同じく共れて、その不便を嘲たれつゝ、尚「魚さかなおほし、遊女もあり、」と記されてゐる。

要するに、舊幕時代にては、宿場は、二ッの社會的要素を備へてゐた、即ち一方には

『えめへましい、わらぢてあしをいためた、ちッとの間ぞうりで行うか、モシ〱此のわらぞうりはいくらだれ、「アイ〱十六文でおます、「こいつはやすい、「アイおやすうおますわいな、わたしのとこの草履は、ひゆつと丈夫て、ねからきりやいたしませぬ』

といつたやうな膝栗毛の旅。者に便宜を與ふる、交通上の一機關であつたと共に、他方にては、附近の村落に、各種の日用品を供給する商工業の地で、此の二ッの要素に依つて、成立してゐたのである。尤とも初は交通上の一機關に過ぎなかつたのであるが。年月を經て、人家の增殖せると共に、特種の階級を作りて、遂に都會と相近づける、所謂「中間社會」とはなつたので、在所を多く持てる宿場に爲ると、旅人の交通によつて得るよりも、むしろ村民を相手の、商業に依つて、繁昌を爲してゐたのである。

然るに封建制度の崩壞と共に、爰に俄然として、宿場の繁昌は、都會と村落とに奪はれた、特にその近國は鐵道の全通になるので、今や何れの宿場も、僅に宿屋の構造に、昔日の面影を遺こして、氣息奄々として、衰滅に就いてゐる。

四

爾うして、今日の宿場は、如何なる狀態に在る乎、試みに表通に店を張つてゐる菓子屋、小間物屋、茶屋、藥種屋、荒物屋、靑物屋、酒屋、醬酒屋、油屋、煙草屋、金物屋等、町の繁昌を形作つてゐる商賣屋が、その商賣に依つて、幾何の潤益を得てをるであらうか、と見るに、自分は嘗て

人口一万內外の地方繁華の地にして、其の表通に店を張り、商賣を營める者にして、生活を能くする者、字一町、恐くは三戶以上に出でざるべし

と斷言したとがあつた、漠然と、表通の商賣屋を見れば、何れも機轉、掛引、生馬の眼を拔く商業家に相違ない、が、此の掛引に苦心してゐるらしい、生馬の眼を拔かん心掛けてゐるらしい商賣屋が、滔々として、生活に苦しんでゐるのである、更に讀者に正確なる印

象を與へんが爲に、近頃調査した宿場商人の生活費用を擧ぐれば

▲宿場商人一ヶ年生計費用

(1)日用諸雜費
- 米……十五圓二十錢(一日白米二升宛)
- 薪炭……十圓(一日六錢宛)
- 油醬油味噌……九圓(一日二錢五厘宛)
- 煙草……七圓
- 下駄雨具等……三圓八十錢

(2)衣服費用 三十五圓(一ヶ年一人に付七圓宛)

(3)家屋修繕 五圓

(4)教育費用 四圓八十錢

(5)公共費用
- 町税……五圓
- 社寺費……二圓
- 交際費……十五圓

合計 二百十一圓八十錢

因に、交際費とは、町内の祭禮費用、親類緣者に對する四季の贈物知己朋輩等の交際費等を合算したもので、都會の生活に比ぶれば、此の交際費は、遙然と落ちてゐるのも無理はない、爾して右統計は夫婦二人に一人の老人、二人の子供なる家庭に就て調査したもの。

右統計は、生活を質素にせる、荒物營業の一家族に就て調査したものであるが、今少しく生活の昂ぼつた家族ならば、二百餘圓に止らぬは言ふ迄もないことである、二百圓の生計費、之を歐米諸國に比ぶれば、殆ど勞動者の一ヶ月の生計費に相當せる僅少の費用である、然かも宿場の住民は、十人の中八九人迄は、生活難を嘆じてゐる、即ち宿場の店商賣では、一ヶ年二百圓の潤益を見るだも、困難であるといふ譯になる、ああ何んとした現象であらうぞ、爾うして、之は自分が足を停めて調査した某地に於ける特別の現象でなく、何等の工業なき宿場は、大抵右の如き事實を示してゐる、少くも自分が踏査した東海道筋、中山道筋、及北國筋の宿場は、概ね右の如き狀態に沈淪してゐる、といふ事を斷言する。

五

顧みて、工業の行はれてゐる新進の町は、如何なる事實を示してゐるか、といふに、爰に自分が、機業地を以て有名なる足利地方に於て得たる一事實を擧げて、讀者の參考に供へよう。

▲工業地の生計費用

(1)食料(一人平均九錢宛)……百七十九圓十錢

(2)被服料(一人平均六圓宛)……三十六圓

(3)住居費(間二坪の家屋修繕其他一切費用)……十六圓

(4)租税……二十一圓二十六錢八厘

(5)教育費……十圓七十錢

(6)奢侈費
- 飲酒煙草……十五圓
- 交際費用……二十五圓

一裝飾費用…………五圓

合計　三百二十六圓六錢八厘

之は野州足利町に於ける、普通住民の夫婦に娘一人、小學校に通へる小供二人ありといふ家族の生計費用であるが、前掲の生計費に比ぶれば、百八圓二十六錢八厘を超過してゐる、更にその收入を見るに

▲收入	賃銀(主業者二人 副業者一人)		一〇〇、〇〇円
	農業收入	農産物	二五一、九二
		養蠶	八六、四〇
	外雜收入		一〇、〇〇
	合計		四四八、三二

である、右の中養蠶費用四十四圓、肥料二十五圓、合計六十九圓を差引くも、收入三百八十一圓四十錢。之に前の生計費用を除くも、五十七圓三十四錢二厘の殘金を見る勘定と爲る、何等の特産物もなく、工業もなき普通の宿場にては、喰ひ込み一方で、年々家産を減らしてゐるのに、工業地の住民は、多少餘裕のある生活を送つてゐる上に、尚五十幾圓の金額を餘ましてゐるのである。

六

更に勞働者の狀態の上より見ても、今日の宿場は妙な位置に立つてゐる、といふのは、宿場の職人は、都會の足袋職人のやうな、商人の資格を兼ね備ふる職商(しよくあきうど)人の狀態に在るのは、深く未開時代の工業狀態を示してゐるので、手業者の前途には、實に何等の進歩もなく、光明もなく、宿場的空氣の間に、年々衰頽してゐるので、現に、東京及大阪市の勞働社會に、一年毎に、宿場の職人が増加するのを見ても其れはわかる。

論より證據に、日本橋葭町の千束屋等に赴き、日々出入する奉公口の希望者を見よ、その大半は、地方の者で、耕作に從事してゐた農民も多いが、職人の分子も亦尠くない、更に日本橋、神田、淺草等に散在してゐる理髮、菓子、蕎麥、張物、紺屋等の親分、所謂寄子專業者の家を訪ふて見よ、波を打つて、地方より押し寄せてゐる、更に進んで、京橋八丁堀、或は神田新銀町といふやうな、職人の巣窟に至つて見れは、同じく宿場の職人が、十分の三を占めてゐる、都市に、地方職人の増加するのは、即ち田舍の衰頽を示してゐるので、葭町の千束屋等は、正にその晴雨を示すバロメートル!

嘗て下の如き事實を聞いたとがある、福島縣の阿武隈川近傍には、十五六年前迄、非常に鯉魚産出し、「阿

武隈の鯉』といへば、同地では、一の名物に數へられてゐた。然るに、近年河線に沿ふて、馬車が往來してより、鯉魚は、砂礫を軋轢して通り行く、車輪の響に驚き、悉くその近傍を避けて、遂に一尾の鯉だも見るとができなくなつたといふ。あゝ鐵道に沿へる宿場の住民は、この『阿武隈の鯉』である。

七

啻に鐵道に沿へる宿場ばかりでなく、未だ鐵道の音響だも聞こえざる草深き北國筋、若くは山陰道筋の宿場も、親しく其の地方に至りて之を觀れば、大抵衰頹を極めてゐる、明治三十四年の内務省調査に依れば、今日町制を布いてゐる町は、日本全國、千四十五あり、其の人口は、精確な事は判らないが、五百万内外は有るであらう、即ち此の千四十五町の大半は時世の變化の爲に往日の面目を落として、その住民は、年一年と、窮乏を告げてゐるのである。

* * * * *

世の政治家、社會論者、新聞記者等は、或は都市の改善を論ずる者はあり、或は農業の改良を唱へて、村落の進歩を謀る者はあれ共、未だ此の五百万の人口を包容する『町』の救濟に對して、議を立つる者がないのは、如何した譯のものであらうか。獨逸には、近年中産者保護問題（ミッテルスタンツポリチック）、ブレンタノ氏の所謂反動的産業政策が、大に起つてゐると聞いた、宿場の衰頽は、中產者の減少を意味する者として、自分は、切に世間の注意を望む者である。

電車に逐はれたる人力車夫

岸上香摘

一　今昔の感

生存競爭は何れの社會にも免かるべからずして、適者生存とは爭ふべからざるの眞理なり、吾人は特に電車に逐はれたる人力車夫に於て最も其甚しきを見る、嘗て人力車夫は、多くの勞働者の中にて最も割合よき收入を得たる者なりき、大工、左官が七十錢、土工人夫が四十錢を稼ぎ得るに過ぎざりし時代に於て、彼は一時間にして三四十錢、一日には少なくも一圓以上の賃錢を容易に贏ち得たり、伊達を競ひし黑鴨出立に掛聲勇ましく、轍に砂を飛ばせて疾驅せる樣の如何に勇ましかりしよ「芋や大根を嚙つちやア車ア曳け無え」

と食膳の華美を誇りし意氣の如何に壯んなりしよ、
彼等の勞働時間は、一日多くも十時間を超へず、而して一ト仕事を終れば、縄暖簾に矢大臣を極めて、陶然其勞を犒ひ、楊枝を咬みながら更らに街衢に客を待つ得意の狀、他の勞働者には決して見るべからざるものなり、然かも此自由と此奢侈(比較的)とは、終に彼等をして其素行を漸々墮落せしめ、其感情を激し易からしめ、其身體を怠惰ならしめ、飲酒淫佚の動物的慾情をのみ發達せしめて、また規律ある組織の下に勞働する能はざらしめ、嚴格なる時間の下に勤勞するの氣力を磨耗せしめ、劇甚なる電車の打擊を受て、窮餘、時に罪を犯す者すらあるに係らず、猶且つ他に轉業するの勇に乏しく、三分の一乃至四分の一に減ぜられたる收益に甘んじ、時に電車線路に妨害を加へて以て纔かに其鬱憤を洩らすの見戯を試るあるのみ、絕望なる前途を瞑想して半夜徒らに輾轉反側するもの、また悲しからずや、吾人は車夫の全盛時代を追想し、之を今日に比する每に、切に今昔の感に堪えざる也。

二　車輛の減少

今、三十三年より昨年十二月末日までの車輛統計を見るに

年次	一人乘	二人乘	合計
三十三年	四〇、一〇九	四、四七五	四四、五八四
三十四年	四〇、四五六	三、五七八	四四、〇三四
三十五年	四〇、一六一	三、一一二	四三、二七三
三十六年	三七、二八八	二、四九三	三九、七八一

即ち三十四年末日より三十五年末日迄には、八百六十一輛の減少なるに、三十六年中には三千四百九十二輛の減少を示せり、三十二年迄は、例年百輛內外の增加を示したるに、三十三年より稍減少するの新傾向を示せるは、蓋し馬車鐵道會社が一部の動力變更を行はんとし、市街鐵道會社の工事亦略竣工せんとするを見て、其競爭の覺束なきを知り、追々他へ轉業するものありたるが爲にして、而して三十六年中に、三千餘の減少を見たるは、實際の競爭に堪えずして轉業せざるを得ざるに至りしものとは知られたり、

三　車夫の減少

同上期間に於ける人力車夫の種類、及其數を見るに

種類	三十三年	三十四年	三十五年	三十六年
所有車輓	一〇、五二八	一〇、二九三	九、八三九	八、三五二
借車輓	三二、三四一	三二、五九一	三二、六八九	三一、七三八
輓子	二、八八〇	二、九一三	三、〇五二	二、五七五
合計	四五、七四九	四五、八〇三	四五、五八〇	四二、六六五

即ち三十四年には、五十四の増加を見たるに、三十五年には、二百二十三、三十六年には二千九百十五の劇甚なる減少を見るに至れり、是れ電車の影響たるは、今更言ふ迄もなし。

四　貸車と宿車

貸車とは單に車輛を賃貸して營業する者にして、宿車とは車輛と共に、輓子を置きて營業する者を云ふ、車夫の統計中、借車輓とあるは、前者の貸車を賃借して營業せる者にして、輓子とあるは、後者に雇はれたる者を云ふ、前例により、其年次統計を擧れば

	貸車營業人	宿車營業人
三十三年	六、六七〇	六一四
三十四年	六、六八九	五四三
三十五年	六、七六九	五四八
三十六年	五、八〇八	五三一

逐年減少せる人力車夫の趨向に反し、貸車營業人が三十四年に十九、三十五年に八十増加したるが如きは頗ぶる異例とするに足る、思ふに是れ中流以上に在りては人力車は日常必要の具と爲りし社會の趨勢を示せる者にあらざる歟、三十六年に至りて俄に九百六十一の減少を見たるは偶々世の不景氣の反映を宿車に示せる者にして、亦た止むを得ざる次第とやいふべし、但し單に電車の影響少き上より言へば、此の宿車は最も輕微たる者にして、後は人力車夫の存在は或は此の一部に遺こるべきかと思はるゝなり。

五　階級の低下

人力車夫に階級ありと云ふは、少しく異なる者なれど、實際多少の階級あり、即ち自己所有の車輛を輓きて獨立營業する者を上とし、別に一戸を構へて貸車を賃借して營業する半獨立の車夫は中とするを得べく、宿車の輓子となりて全然雇人となれるは下と見るを得べし、併しながら其の生活狀態より言へば、自己所有の車輛を輓けるは、上の部に相違なけれど、貸車を賃借せる者の中に、幾多の區別あり、特に夜間業に出づるヨナの如きは、寧ろ貧民の階級に屬し、職業を以て見るべからざる者あり、而して單に生活の暢氣なる上より言へば、全然雇人に屬する輓子は、却て境遇の如意なる者を見るは奇とすべし、新橋前なる木下部屋の輓子の如きは、一日一圓の收入を得つゝあり、幷は兎も角も同前期に就て之を見るに上は中に、中は下の部へと、漸次其階級を低下しつゝあるが如し。

即ち三十三年に於て、車夫總數四五七四九の内、上は一〇五二八、中三二三四八、下二八八〇なるに比し、

三十四年には上の部に於て二三八を減ぜるに對し、中に於て二五〇、下に於て三九を增加し、三十五年には上四五三を減ぜるに對して、中、九八、下、一三三を增加せり、三十六年の大減退に際しても、上、一四八七を減ぜるに對し、中は九五一、下は僅かに四七七を減じたるに過ぎず、

六　車夫の年齡

車夫の年齡は、三十歲前後を以て最も多しとす、今昨年末に於る年齡別を見るに

二十歲未滿	五三九
二十歲以上	八、九五八
三十歲以上	一一、三〇八
四十歲以上	三、三二六
五十歲以上	九、七三四
六十歲以上	六九四

此統計後一万以上の廢業ありたる内多くは三十歲以上五十歲迄の者なりしと云ふ、されば今猶殘留せる人力車夫には、比較的高年者多數を占むるを見るべし、然かも適者生存は此間にも渉る〻ことを能はず、多くの客は、血氣壯漢に拉し去られ、薄汚れたる車體、又は高年の車夫の如きは、稀に格外の安賃錢を以て辛うじて二三十錢を得るに止ると云ふ、さればとて今更他業に轉じて壯漢と競爭するは不可能の事なれば、深夜又は雨天を目的とし、なさくば多くは新聞社附近に客待をなし、若し新聞社にて號外を發行する事あらば、車を其儘に號外賣と變ずるを常とす、號外賣は百枚十錢乃至十五錢の資本を以て運好くば一時間にして六七十錢の利を獲、少くも五十錢を下らざるを以て、一回の號外は以て優に彼等の二日分に値す、人若し幾多の號外處の内、白又は黑の筒袖猿股の號外賣あるを見ば、此の憐むべき敗亡車夫の變形と知るべし、彼等の境涯も亦憐むべからずや。

七　離業せる車夫

由來何種の業たるを問はず、多年從事したる職業を廢して、他に轉ずるは非常の決心を要するものにして、假令其收入は二分又は三分の一に減ぜるも以て衣食を支ふるに足らば、猶甘んじて其業に從ふ可し、况んや車夫の如く放縱にして不規律なる生活を經たる者が、他の稍規則立たる勞役に就くは、實際至難の業と謂はざる可からず、彼等が自己の弱點を覺知しながら、此至難を冒して其轉業を敢行せる者、之れ豈に其窮迫困憊實際衣食し能はざる程度にまで陷れるが爲には非ずや、換言すれば其離業を餘儀なく强ゐられたる結果に

は非ずや。

更らに警視廳に就て本年四月の現在數を聞くに、車輛三三二〇五、車夫三一六二五なりと云ふ、之を三十六年末日の現在數に比すれば、僅々四ヶ月間に車輛に於て、六千五百七十六、人員に於て、一万一千〇四十人を減じ、之を三十五年の末日に對すれば、實に一万〇〇六十八輛、一万三千九百五十五人の減少を見る

僅々四ヶ月間に一万一千〇四十人の離業者を出したる、是豈に驚く可き現象に非ずや、而して吾人の最も憂慮に堪えざるは、其離業後の狀態に在り、由來、力役の外何等の能なき彼等が、一般の勞力に餘剩を告げつゝあるの今日、何種の業に向て衣食の途を求めたるや、其極度まで忍びて始めて轉業したる彼等が、餓て食を撰ぶに暇なく、敢て遠圖後計と謂はず單に前後をすら顧みるの餘裕なかりし身の、轉業後果して圓滿に其生計を營むを得つゝあるか、吾人は今其詳細を知るの便なきも、恐らくは其不圓滿なるを思ひ、大に痛心に堪えざる也。

而して殘留せる車夫に就き、經濟上の犯罪例せば車體檢査、服裝等の不合格等の統計を擧げなば、彼等の狀態を窺ふに足るべきも、日々の新聞紙上徒らに醉來りて電車に妨害を加ふる者平均一二名を見るの外、不幸にして今其材料を有せず。

八　今後の離業者

電車鐵道が動力を變更し、市街鐵道が其一部を開通したるに過ぎざるに、車夫の打擊を蒙りたる事以上の如し、今後市街鐵道の全部貫通され、東京電氣鐵道また開通せられたる時、其の結果また推知すべきに非ずや、

社會の進化より來る離業者に、一々職を與ふるとは到底不可能に屬す、然りと雖其慘狀の甚しきものあるに方りては、出來得る限りに於て、社會は之を救濟するの方策を講ぜざる可らず、東京市が細民救助の一方法として赤坂溜池及幸橋一帶の地の埋立工事を起し、市街鐵道が勞働者授業の一手段として、全部の檢査を終えずして一部の工事着手を願出たるが如き、頗ぶる時宜に適したるの施設と謂はざる可からず、

思ふに今後電車の未成線竣成と共に、車夫の困難は一層其度を增し、離業者の率の如き、次第に高まらん、今後の離業電車問題の如き、豈に社會問題に注目するの士の等閑に附すべき問題ならむや。

世田ヶ谷の兵隊屋敷

兵營と村落
由良と世田ヶ谷

高山血來

何れの國に往つて見ても、その界隈で最も穢い、そして最も風俗の亂れて特に卑しく感ずる處は新平民の在所と、而して兵營のある附近といふに憚らない、穢多村の事はいふに及ばず人の普ねく承知の通りであるが、吾人が最も清潔で風規の嚴肅で、比較的他よりは神聖であると信ぜんと欲する兵營附近が、何が故に之に反對の事實を示すかは頗る見るべく聞くべき價値がある、

曾て要塞のある由良濱に僅か二日の泊りがけ、淡路島通ふ千鳥をまのあたりに、少しは甲斐なき詩嚢を肥さんよすがもがなと思つたが物の間違ひ、恰も時は八月の半ば炎天やくが如く蒸す如く、而も濱風の涼しさは都を逃れて來た旅人には茅渟の鮮魚も物の數ではないのであるが、そこに住む人間の劣等極まるには呆れて二の句が出ないのであつた、勿論その多くは汐に燒かれた漁師海士ながら、よくも斯くまでに心情の卑劣な淫奔な人民ばかり狹いところに集まつたもの、これでも帝國の領内かと涙がこぼれて情けない、その上癩病患者の夥しいと更に妖怪變化の住まふ別天地としか思はれなかつたのである、由良要塞の一中尉はこの癩病患者の夥しいのは全く昔より島内僅少な人民が悉く親戚の關係を生じ、同一の血液を以つて播殖した結果であると説明したが、軍人がこれへ乘り込んでから一層この惡病か蔓延し、風俗が亂れ、親も子もない、兄弟もない、凡て男女の隔てはない、私生兒ばかりが轉がつて居るやうになつたといふ事は、その中尉は語らなかつたが、今世田ヶ谷村を見るにつけ、爭はれない事實であつた。

一は島、一は陸、それは鄙、これは都の隣村で、土地の趣は全然別異でありながら、由良と世田ヶ谷との情況が、同一人民ではあるまいかと疑はれる程酷似して居る、彼れが妖怪變化の住家なら、これは新平民の遺跡と墓地である、かしこにも軍人、こゝにも兵士、數へ來れば限りがない。世田ヶ谷に就いて述ぶるところは即ち由良に就いて語るところに外ならないのである。

小なる御用商人

公然ならぬ遊廓

明治三十二年に砲兵旅團（第十三、第十四、第十五、近衛の四聯隊から編成された二旅團）が置かれてから、それまで新平民の屋敷と墓地であつた世田ヶ谷村は急に變じて軍人屋敷となつた、墓地に徘徊する狐や狸は、兵隊の調練に驚かされて遠く去り、新平民は入り來る舊平民に追ひ出だされて昔の面影は殆んど失つて了つたのである。但し土地重代の百姓で依然殘つて居る平民も尠くない。然るにこの舊平民は何を目的に入り込んで來たか、耕さんがためでない、耘らん爲めでない、全く兵士の需用に應じ、兵士によつて利を得んとするもので、言はゞ小なる御用商人である。

乃ち此小なる御用商人はこゝにあらゆる兵士に適する設備をした、兵士の嗜好に投ずるもの、兵士の慾を充たすもの、一として具はらざるものはない、蕎麥屋牛肉屋馬肉屋、一膳飯、繩暖簾、氷店、小料理店、餅屋菓子屋はいふに及ばず、以上の食慾の外に色慾を滿足せしめんとて、凡ての店には必ず二三のおさすりなる艶めかしいのを措いて、其用意周到なるは軍參謀も及ばぬ位。

凡そ軍人を滿足せしめんには色氣と食氣とを以つてするより外はない、血氣盛んの若い者が日頃嚴肅な兵營生活、樂みといつて外にはない、僅か一週一度の自由を得て、一旬四十錢の手當を懷にし、最寄の繩暖簾あたりへ兜を破り（一杯引つかけるとをいふ通語）に出懸るのが先づ無上の愉快であつて、こゝへ白粉臭いおさすりが出て肩の一つも叩かうものなら、隨喜渇仰の涙で財布の底を拂ふは愚か、國許よりの送金も皆これが爲めに遣ひ果たして了ふのである、これをぬからず附込んだのが例の小商人にして、こゝかしこの暴連者を引張って來ては兵隊さん〳〵で御機嫌をとらせる、新宿までは道も遠い、金も多く要るので、大低はこゝらの飲食店で事を足すのである、畢竟公然ならぬ遊廓である。

三等賞「症」と三擧動
日曜下宿と汚行

かくの通りの有樣であるから兵營内に三等賞（一等賞公然の怪我負傷、二等賞病氣、三等賞梅毒＝兵士の通語）が蔓延し、または夜中三擧動（一、二、三で飛び越す脱營のこと也）をして罰せられる者が續々出來るので、一時品川署から世田ヶ谷村一般飲食店に嚴重な命令を下し、若し今後兵士を引入れて酒を呑まし色

をひさぐが如きことがあつたら直ちに營業を差止めるとの事てあつたが、それもほんの當座のことて、間もなく從前の通りこの弊風は盛んになるばかり、三等賞と三界動をせぬものは隊中に數へる程もないだらうとの事てある。

而して此處に集まつて來るところの御用商人が殆んど人間らしからぬと共に、淫賣同樣の酌婦がまた一筋縄て行くのてない、日本國中を股にかけて渡らうといふ毒婦、これが流すところの惡風は土地重代の良民に流れ込み、同じ潮流に捲き込んで了つたのてある、この良民も始の程は兵隊さんに同情も寄せ尊敬も拂ふ、日曜下宿も利を貪らずに貸すやうにし、洗濯もしてやれば、綻ろびも縫つてやる、すれば兵士は喜んて悉く百姓家の坐敷を借り、凡ての家が日曜には兵士を以つて充されるのてあつたが、新來の御用商人等が彼等に金儲けてふことを教へてから次第に質朴な風を脫して商賈氣質になり、遂には娘をして彼の毒婦等の眞似をなさしめ、甚しきは人の妻にして小使取りをする等の惡德を行ふものも少くないやうに立至つた、弊害は隅から隅へ漲ぎり渡つてます／＼ウジにウジが湧く有樣、私生兒の增加、姦通、野合、淫賣等醜惡なる文字の外に記すべき事はないのてある。若し此まゝにして十年を經過したならば、恐らく由良の濱に劣らぬ妖怪屋敷が東京府下にも見られるに相違ないと信ずる。

兵士の罪に歸するは酷也

靑山牛込もまた然り

吾人はかくの如き事實を擧げて兵營のあるところ必ず惡德の行はれることを記するに忍びないのてあるが而もまた之を以つて悉く兵士の罪に歸するの甚だ酷なるを知るものてある。

由來多くの兵士は未だ社會と鬪ひたる經驗もなく、一口にいへば骨の固まらぬ若い者てある、朱くすべく白くすべく只周圍の事情によつて如何樣にも染まり易きものてある、而も身體は健全なり、凡ての慾の最も勃興する時代てはあり、聖人君子ならざる以上は、焉んぞ巧言令色に惑はされざらんことを保し得んやてある、只惡みても餘りあるは彼等奸惡なる商人てある。

けれども一利一害は自然の數て、東京市內に於てすら靑山牛込の商人が、恰も本鄉神田が學生によつて生活せる如く、軍人によつて利を得んとし、種々の惡德手段を運らして居るてはないか、即ち商賣以外の商賣を營みつゝあるてはないか、吾人はこれ等の爲めに害

を蒙るところの軍人及び良家に向つて同情の念に堪へないのである。

社會側面觀

▲分業制度　　芝大門通　泡　沫　生

日本ユニテリアン協會長某氏去る演壇に立つて宣はく人は何事にても細心注意す可し曰く名刺には必す住所を記入す可し、曰く書狀の封皮には判別し易き樣名宛等を記す可し曰く外出する時は大小の貨幣を所持す可し曰く何日く何と實に到れり盡せり然るに何ぞ計んや其人の邸町の居宅の門に揭げたる標札は雨に晒され風に吹かれ磨滅して其何の某たるや讀むに苦む教を說く人と教を行ふ人とは經濟學上の分業制度に依るにや偖ても現世なるかな

▲人心の兩面　　瀧　水　生

直切つて〳〵直切つて直切り倒して辻車に乘つたのは可いが、煎りつくやうな炎天に埃まぶれに熱湯の如き玉汗をたら〳〵と流し、眞黒な脛に力瘤を入れ爪先上りを駈け上る車夫の有樣を見ては、誰か一滴の淚なきを得んや、然り世は萬斛の淚を揮つて之に同情するのである、而も一錢の金は直切らざるを得ないのである

▲新聞紙の墮落　　京都　公　子

昔は新聞紙上にあって天下を教へ、之に號令し之を叱咤したりしが、今は則ち讀者を上に据へて之を拜み奉り自ら遜りて下座し、却つてお花客樣の叱責に遇ふて低頭平身、恐懼措く處を知らざるものゝ如し

▲利を以てすれば政府亦與し易し　　長崎　焦　明　生

電車の內で喫煙を禁じてから、一ヶ月に東京市內の煙草消費高が五千圓減少したとは一統計家の唱ふるところであるが、今日では大藏省が却つて此禁を解きたい程に考へて居る、未丁年者の禁煙と共に多少大目に見るやうになつたのは煙草專賣からの事て、利を以てすれば政府と雖も與みし易きものであるとは情けない次第ではないか

▲女の非公明正大　　番町　か　の　子

海老茶式部といへば直ちに淫奔なる女學生を聯想す、或者は之を以つて酷なりとなし其罪等ろ男子にありとなす、然れども常に如此研究に餘念なき某氏の談によれば電車汽車にて隣坐するとき實驗上女學生は最も淫佚なることを證明し得べしといへり、又曰く多くの女子が光線に顏をそむけて暗きに向ふは其公明正大ならざるを表明するもの也と

▲當らず障らずの妙語　　神田　卒　天

圓い卵子も切樣で四角、余は電車に乘る度每に常に此感を起す、それは怪し氣なる人間の乘りし時車掌は車中を見廻して込合ひますから懷中物を御用心とやる其込み合ますからの一句當らず障らず、意味深長にして最も此場合に適したる巧妙極まつた辭令である、併し往々我々が乘り込む途端これを言はれて人に顏を見られるは大に惡服しないのである

▲川柳の價値　　羽田　流　柳　子

文壇の單調なるが爲めか、或は滑稽文學の勃興か近時柳樽が盛んになつた、諡在來のものにしてこの川柳程諧謔的に寸鐵人を殺し得るものはない、而も悲夫由來單調なる頭は何れに向つても殆んど見るべきものが出來ないのである、其主題は海老茶式部にあらざれば露兵捕虜等の範圍を脱せず、一として人情の機微、諷刺の妙を得たるものに接しない、持に新派とか字數に拘泥しないとか云ひ何等意味もなき會話的のものを作つて宗匠然たるに至つては實に側目からも冷汗が流れるのである

▲募短文

（社會側面觀につてき●二百字以内●毎月十八日限締切）

戰地の半面

寶甸の西山、城廠の瞬、の兩社友より祭社へ寄せたる最近信中、左の數項餘り世に傳はらす、本欄に探容す

○新鋭の紅裙隊

こゝに御報道申すべき事有之候。そは他にあらず。日本の紅裙隊は、遠く釜山、仁川等より鷄林八道の山河を跋渉し、迴に安東縣等の地に入り申候。其數無慮三百に餘まり候との事。軍政署は正に之が監督の局に當るものに候。憲兵は、凡て之を逐ひ彿ひ、對岸の地に去らしめたるに、鴨緑江楊柳蔭幽なる所、日本的の茶亭を出し、治外法權の地に於て盛に春を賣る由にて、我が兵士は舟子を艤して遠征すること盛なる様子に候。此頃兵站監部は少しく思ふ所ありてにや、內地商人、滿州各地、隨意に商業を開始するを許し候爲め、紅裙隊は、或は人の妻なり、婢なりと稱して、頗る入り込み、賣春の俗は滔々として滿州の天地を蔽ふに至り申候。中にも驚くべきは、某

●輜重輸卒の妻　に候。夫は遠征して、今や安東縣にあるに、その妻また遠征して、某男子と共に煙草屋を開店致候。然るに突然その夫の認むる所となりて、軍政署に訴へられ、憲兵を派して之を捕縛し、事情審議致候。その事情は如何なるやは詳知致さず候へ共、女子と共に開店したる男子は、何れも放逐の命を蒙り候。世には恐しき婦人もあるものなり。

●倘ほ　當地に入り込むには、凡て夫ある婦人に限る事とて、各婦人は、誰人を問はず、自ら懇請して君が名義上の妻たらしめ玉へと言ふもの引きもきらず。某氏の如きは、床側に於て、一夜泣きて訴願せられ、閉口致せり云々と語られ候。世の中は奇妙のものに候。凡て世の中に日本婦人程エラキ者は無之候とは目下當地の評判に御座候。

●雨請ひ　當地の當年は、非常の旱天にて、此三十日程一滴の雨もなく、爲めに穀物は枯れ衰へ、高粱の如きは見る影も無之候。清人は愁憂すること非常にて、各地とも、知縣を初め、各官吏、農夫等、毎日朝夕盛裝して雨を天に祈り申候。此二三日前より數百の農夫、頭に柳の枝を捲き付け、長き二流の旗を樹て、御輿を舁ぎて、各寺各社に雨を祈り、僧侶は念經し、農夫は叩頭稽首して、或は爆竹を放ちなど致し、中々見物に御座候。內地の雨請とは趣きを異にして、甚だ其味な覺え申候。

●當地の氣候　は目下八九十度に候が、家屋の構造、三面密閉せらるゝ爲めか、風も通せず。暑さ此上なく、隨分困難罷在候。夜に至れば、ノミは遠慮なく夜襲を試み、寢られぬ事のみ多く候。幸に蚊子軍は優勢ならざる爲め、少々は寢き宜く、殆んと防蚊覆面の必要なく候が、そのカタリには、蒼蠅の多き事驚くばかり、キタナキ事何とも申し樣無之候。氷水もなく、ラムネもあらず。ビールとヒラノ水はあれども、多く

はマイリ居り候樣子、イツモ變らず、マヅキ罐詰と粉味噌汁に、茶や牛蒡（ホシタル）にて生活致居候。事情御憐察被下度候。病氣も赤痢患者脚氣患者の如きは　漸次に盛に御座候樣子、死者毎日アル樣子に候。チヤンも追々にズーズーシク相成り、馴れ〳〵しくなりてツラニク、御座候。何れは領下に置き度きものに存居候が、廟堂の御成算は如何に哉。キケバ此頃又々靈助殿、伊豆沖にて暴行せりとか。屁の如きアバレ方、窮狀寧ろ哀れを覺え候。小生頑健、毎日酒を仰ぎて氣焔を吐き居候。但し駄氣焔にて候間、諸君の眞氣焔も時々は承度存居候。何れ其内又々申上候拜具。

八月八日夜、時大に雨ふる、雨請の靈驗か。寬甸城ニテ　西山生

○城廠だより

前略當城廠は賽馬集より十里斗り奉天遼陽興京に通ずる緊要なる地點にして商業繁昌にして鳳凰城に讓らず目下〇〇步兵〇〇〇聯隊〇〇〇隊と共に滯在致し居候

當地は煙草（ピーコツク）一箇七錢位カステーラも有之不自由無之其他汁粉燒酒等甘黨辛黨も困り不申候鳳凰城東北の地方は、山野樹木欝叢として隨多く薪炭の不自由も無し加之河水淸潔淸泉掬するに氷の如きもの有之候之を遼東地方に比するに雲泥の差と存候

當地方の內地と異りたる處は日出は午前四時半頃にて日沒は午後九時頃に御座候

支那人の日本の醫藥を信ずる事神の如く眼痛胸痛足痛にても寶丹或は淸心丹の四五粒にて奇妙に治し申候平素藥なる物を用ゆる事なく所謂藥に慣れざる故に奇功を奏するかと被思候

內地人の豫想外に戰爭しあるものは後備の步騎兵にて內地人の豫想外に發達進步しあるものは電信電話兵站線等なり兵站線路の電信は悉く設備有之候

八月四日　城廠にて　瞬　生



讀者之文壇

俄道樂生、友人の感化によつて頃日芝居道樂熱俄かに高まり、眞砂座の新派合同大に見るべきあるを聞き、忽ち馳せて日本橋中洲の仝座に至り、近來絕えてなかりし歡を盡して歸る。歡樂極まつて柄にもなき劇評を思ひ立ち、即ち筆を呵して此文を作る。幸にして貴誌の餘白を借るの榮を得ば喜び之に過ぎず

眞砂座の素人評

俄道樂生（寄）

▲よく〳〵の素人評、系統も何にも立てずに思ひついた儘を書きつけるのだ。所謂劇通先生の御參考になることが怪我にもあつたら、それこそ勿怪の幸である。

▲一寸狂言其ものゝ批評をして見やう。一番目「火雨

の洞」は、長いものゝ一部分を切抜したもので、筋の統一がない。殊に廿何年とかて始めて逢ふた甥の玄吉に向て、逢ふた其夜に自分の娘との結婚談を持込むなんて、餘り突飛で不自然の極である。二番目「金の生る木」も其名と其實と少しも釣り合はぬ。大詰に至つて、水道を利用して俗受けに投ずるのは止むを得ずとしても、今少し詩的にして趣味ある結末をつけられぬものか知ら。多少の敎育や學問のあるべき筈の新派俳優であるから、脚本其ものゝ選擇に就ても、充分の苦心をして貰ひたい。

▲高田の馬鹿の喋次、奇抜斬新の藝風、滿場の拍手喝采を博して他の俳優を呑吐するの槪あり。一言一句一擧手一投足悉く人の意表に出で、所謂奇想天外より落ちるとでもいはふか、どうしても感服せずに居られぬ。小艶に諧謔つて腰掛を廻る所でも、二度とも其廻り方が變つて面白く、終りにトンと跨いで、何氣なく腰を卸して居る樣や、小艶が手紙書く中の振前、金次と小艶に盃をさして笑ひながら椽側の端に逃け込む姿、丑五郎の子分がジロ〳〵と睨めて取卷くのをボンヤリと眺めながら子分と共に身を廻はす仕草、金次の兄の挿が怒て歸るのを罵る調子、如何にも眞に入つたもので、到底他の俳優の出來るものでない。エライ人は何をしてもエライものだ。高田のよい所は數へ切れぬ程あるが是位で止める。斯道の嗜ある人は是非一度高田の藝を見給へ。

▲河合は新俳優中の源之助である　藝者小艶美はしとも美はし。本當に其役になつて居るのは先づ高田と此人との二人である。これぞと目立つてよい所もなかつたが科白が心地よい程ハキ〳〵して、動作も亦意氣な藝者風を失はなかつたのは新派では此人より外にやる人はあるまい。

▲伊井は厭味がなく、又わるく、仰山らしい仕打もなく、頗る僕の氣に入つたやり方であるが、玄吉になつても、金次になつても少々重みが足らない。高田と並んではどうも餘り引立たぬが、然し意氣で、あつさりした所は又獨得といふべきである。

▲藤澤はあの連中に交つては物になつて居ない。いろ〳〵な役を勤めて、可なり熱心にやつて居るが、どうも重みも足らず又人の心を動かす樣にやれない。今一段の修業を要する。只一寸氣に入つたのは源次郎になつて荷物を家に入るゝ時に、最初に荷を渡された時には其重さて手を急に下げ、二度目には夫れをやらずに

下に置くときに身を前に倒したのは注意が行屆いたやり方である。

▲馬十は他の連中とは少し調子が合はぬ所があつて、恰度歌舞伎座に入つた時藏といふ趣があるが、流石に舊劇に鍛へた腕ほどあつて、他の新俳優が眞似の出來ぬよい所がある。田中源兵衞などは上乘の出來といはねばならぬ。

▲福島は可もなく、不可もなし。なか／＼見込ある方なり。

▲璃宗は駄目だ、僕はどうも感服せぬ。

▲關の聲はいやな耳障りな聲である。然しお妙になつて玄吉に對してもぢ／＼したこなしや、盲女娘になつて居たのは感心じや。

▲井上の信夫は儲役であつた。親父の死骸に近寄つて抱上げる處はよかつた。

▲藤井の百姓はよく出來た。

▲大詰の水道は仕掛なか／＼の觀物である。然し近來は道具や書割で以て見物人を呼ぶ様な風に傾いたらしく見えるのは果して劇界の慶事であらうか、僕は頗る疑問に堪へぬのである。

▲因に記するが、僕の見物したる日には、高麗藏が其家族を連れて見物に來て居た。舊俳優中で最も進歩した頭を持て、最も有望なる同優が、眞砂座殊に高田や河合に對するの批評は俄道樂生の最も聞かんことを望む所である。

泰西珍話

▲戀煩の診斷法

「コールス、ファンドクトル」

青木落蔭

年若き人は廿歳前後に於て戀愛病即ち俗に所謂戀煩ひの患者となる。此病氣の徴候は極めて明瞭なり。先づ顔色極めて勝れず、食慾減じ、年中必ず晴衣を着け、髪に香水をふりまき、衣服の塵を拂ひ、常に憂鬱にして其兩親に物言ふことなく、一週に三度程髪を刈り、紙片を見れば直ちに「愛」又は「戀」等の文字を書き、月夜には窻に凭りて、「あゝ落行く月よ」「星の光のうすれゆく」など唸り出し、友人又は知己を蔑視して動物と呼び、笛を携へて物悲しき調を吹きすさぶ。一度病氣に罹るや、彼の食はんと欲する所は「彼の唇の蜜」にして其聞かんと欲する處は「彼の物語る樂の聲」なり、人が果して唇の蜜と聲の樂にて生活するを得るや否や頗る疑問なりといへども此れ偶々以て彼れの普通患者と異るを示す所のものなり。讀者心して此法を應用せば世の戀煩の患者を診斷せんこと極めて容易なるべし。

▲死犬の魔力

近日ウオルセスターに於ける或一人の小兒夜中櫻子を盗まんとして他人

の庭中に入り、櫻樹に登りしを、其家の主人之を見附け、小兒に見られぬ樣に密かに、木綿を以て作れる大いなる飾り犬を其樹の下に置き、此事の成行を窺ひ居れり。小兒は其樹を下らんとして犬を見出しぬ。扨滑稽は此れよりぞ始まる。小兒は靜に口笛を吹き、徐ろに宥め、或は媚び或は叱し種々の手段を盡せども少しも其甲斐なく、犬よく動くなく、逃ぐるなし、終に小兒は下りるにも下りられず、終夜樹上に居らざるべからざるに至りぬ、其後數時間小兒は苦しき力を腕に搾りて樹に取附く中、夜すら〳〵と明けぬ、此家の主人歩み寄りて何故に樹に上れるかを問ひぬ、小兒は遙か遠方より此犬に追はれ、止むなく庭中に入りて此樹に上りぬと辨解しぬ。此主人が微笑して其生命なき飾り犬なるを示したる時の小兒の顏や如何なりし。一に讀者の想像にお任かせ申さん。

▲巧妙なる銃獵者

西洋の一銃獵者及び其弟はロッキー山脈の近傍に殆んど一年の月日を送れり。彼等は二挺の施條銃と一個の彈丸及び一罐の彈藥を有せるのみ。而して彼等のいふ所を聞くに此等の道具を以て一日平均二十七頭の水牛を射斃せりといふ。或人之を怪しみて曰く、一個の彈丸を以て汝等如何にしてかくも多數の水牛を取ることを得るやと、然るに其兒答へて曰く、吾等の水牛を取るや、余は一方に立ち、弟は他方に立つ、弟發砲したる彈丸は直ちに來りて予の圓筒に入るが如くに發砲す、予等はかくして、十二ケ月の間狩獵に從事し、一週二百頭の割合にて取りしも未だに一個の彈丸のみにて足れりと、

▲地震勝りの腕白兒

あるお人好しのお袋殿地震の起るべき徵候ありと聞き、其愛兒なる腕白小僧を遙か離れたる田舍の知己の家に逃れしめたり。其後數日にして母は其田舍の家より一封の手紙を受取りぬ、其中に曰く「速かに小兒を連れ歸られよ、吾等は寧ろ代りとして地震の來らんことを望む」と。

▲道ならぬ親子

オノンダゴーの地方に於ける一寡婦、其娘の戀人との中を絕ち、自ら其男と結婚せり、娘は此母の不法なる行爲を怒り、一策を案じ、其男の親たる人の許に至りて自ら其妻となり、其間に子を生みて、彼の男の相續權を奪ひ、其男及び母に己れの怨を報じたり、世にも道ならぬ親子のあるものかな。

新刊批評

▲男女の研究

大鳥居弃三
澤田順次郎　氏共著
光風館發行

「凡て人は其男たると女たるとを問はず、父母の性即ち男女の性を受けて出生發育するものでありますから、男にして男の男たる所以を明かにしやうといふにも、男を知ると同時に女を知らなければなりませんし、女にして女の女たる所以を明かにしやうといふにも、女を知ると同時に男を知らなければなりません。女には女、男には男、それぞれの特性がある。男女相俟つて家族をなし、男女相俟つて社會を爲す以上は、苟も人たる者家族の一員としても社會の一員としても、男と女とに關する正確なる智識を有する必要があると申して宜しい」。とは坪井博士の序文の一節て、此兩氏が此著をあらはした理由も亦其處にあるのである。

第一緒論、第二男女の差異、第三男女の關係、第四男女の發生及發育、第五男女の起源及發育、第六男女と人類生活の發展と章を分ちたり。其說明はさして斬新詳細なりといふべからざるも、懇切にして平易、且つ文章は此種の著述に於て珍らしき程暢達したれば必ずや一部の歡迎を受くべしと信ず。

▲少年日露戰史　第二編

（實價五十錢）

岩谷小波編
博文館發行

此編には日韓の條約より、旅順閉塞、決死隊の事蹟等をかゝげたり、附錄の軍歌讀本には決死隊の歌、軍神の歌を始め趣味ある題目の下に我國勇士の事蹟を記し、以て少年子弟の士氣を鼓舞せんとするの企頗る贊すべし挿畫又數葉例によりて美なり。

▲征露歌

（定價十二錢）

時事新報社發行

時事新報が賞を懸けて弘く江湖に募りたる征露歌の當選したるもの八編を載せ、一篇毎に小山作之助氏の作曲を附し、丁寧懇切を極めたり。前古未曾有の大快事、わが國民の抱負を披瀝して大聲世界に鳴り響かすべき歌としては、些か物足らざる感なきにあらずと雖も其言語に野卑なるもの少く、其の調に輕忽なるもの少きは、多とするに足るものあり、元來日本人が軍歌を草するに當りて最も不注意なるは彼等が啻に文字の選擇にのみ苦心し、音聲の明瞭ならんことを勉むるの思想極めて薄く、讀んで其意を了するも、聞て其義を知り得ざること尠からず。此當選歌又未だ此弊を脫せざるものあり。後の應募者又は選擇者は此邊の注意の最も必要なるべしと信ず

▲明治お伽噺第十二編　お伽立志噺

（定價十錢）

▲世界お伽噺第五十九篇　鬼だまし

▲世界お伽噺第六十編　二人半助

博文館發行

三編とも例のお馴染の小波お叔父さんのお話、面白からぬ筈がない。お小供衆を持つ親御達や、幼き弟妹を有せらるゝ兄さんや姉さんは早速買て小供にやつておやりなさい。玩弄物やお菓子をやるよりは遙かに効能があるもので、まお半日位は大丈夫お叱言を仰しやらなくつてもよいのよ、

（定價はたッた一册八錢）

▲最近世界人傑評論

黒澤和雄譯
有朋館發行

「評論の評論」の主筆ステッド氏のレスト、キー、フオルゲットの人物評を譯出せしもの也。諸新聞の批評は可なりよかりしも、試に兩者を對照するに、誤譯の多きこと僕を代ふるも數ふにたへざらんとす。思ふに最近飜譯書中の最も杜選なるもの也。大膽にいはゞ、全體の三分の一位は誤譯なり。著者が果して自ら理解して筆をとりしものか否や頗る疑はし。殊に難澁の箇所は大抵省略せる如き、決して許すべかず。吾人の臆測によれば、譯者は不完全なる英和字彙を唯一の參考に供せしに過ぎざる可し。もし吾人をして紙面を惜まずんば、優に十ページ位の訂正文はものするを得と思ふ。兎に角かゝる一知半解の書の出版は咀ふべきかな。しか

し單に文章としては一讀の値ありといはんか。

▲孔子研究

蟹江義丸著
金港堂發行

故人蟹江義丸氏が博士の受位を要請し且つ獲得したる論文也。君が半世の心血を灑ぎたりと評するも敢て誇言にあらざるべし。其西洋哲學を咀嚼し比較查照せる深邃なる學識と明敏の頭腦とを揮ひ、之を孔子研究に加ふや、大は即ち、孔子の學説、其根本思想倫理説人性論教育説政治説より小は即ち彼れの性格事蹟の微に亘り、爬羅剔抉、要を掲げ綱を掲げ讀む人をして、炳乎として千載の下、斯偉人の面前に立つて、謦咳に親炙するの概有らしむ。孔子研究は所謂集めて大成せるもの、古來紛々たる孔子に關する汗牛充棟の註釋書典籍を壓して、優に白眉を推すに足る、今之を君が遺圖東洋倫理大系の一部の紀念として後昆に永へに殘すに至りしは、學界の不幸幾干なるを知らず。蓋し斯書は故大西博士の西洋哲學史と相對して學術界の雙璧と稱すべき者なり。

▲帝國文學　第十卷第八

最も眞面目なる純文學の雜誌界に於て、帝國文學は常に一頭角をぬいて居るのは世の認むるところである、或は之を評して單調なる赤門文學に過ぎないと評する者もあるが、而も所謂多士濟々の方で斬新なものに欠乏せぬところは他に餘り多く見られぬ此雜誌の得長である、特に最も喜ぶべきは其多くが凡て一夜漬の茄子でなく研鑽に研鑽を重ねて然る後に掲載するといふ風の見ゆることである、此卷また見るべきものが尠くない、久米氏の戰爭と藝術は時節柄お職柄中々有益に讀まれるし、虎石氏の詠に就いても面白く、其他一々擧げるまでもなく流石に帝國文學の面目を損ぜぬ、願くば晩翠子の勇健な詩調を此武裝の中に見たいものである。

▲ヴント氏西洋倫理學史

角田柳作譯
金港堂發行

獨乙の哲學界に於ける經驗派の泰斗とも稱せらるゝウイルヘルムヴント氏の倫理學第二卷道德的世界觀の發達を譯述したるものなるが其譯語の妥當、譯文の正確なるや否やは保し難きも此書が簡明にして在來の中等教科の倫理書に對して少からざる長所を有するは疑はれざるところ也、紙數二百六十余頁敢て大冊といふにはあらざるも譯者の勞は察するに餘りあり

▲國民教育法制通論

仁保龜松著
金港堂發行

此種の著書は少からず、而も平易にして要を得たる上より云へば此書は最も成功せるものゝ一なるべし、法制の大要を知らんと欲するものにとりては吾人は此書を簡明なる解し易きものとして推薦せんと欲す

（完結）

戰事彙報

第七

戰事彙報

●大石橋戰鬪詳報

七月二十八日午後大本營着電

奥大將報告

廿五日午前四時軍は蓋平附近の陣地線を出發す各縦隊は共に少數の敵を擊退して流家溝より花兒山を經て五臺山附近に亘る線を占領せり此日軍の左翼方向には騎砲兵各一中隊を有する敵の步騎兵若干部隊ありて屢々抵抗せり軍は占領したる陣地内に開進し戰備を嚴にして明日に於ける總攻擊の準備を爲せり

二十四日未明軍の右翼たる諸團隊は相連繫して運動を起し太平嶺及び其四方百餘の高地及び其四方の地區に向ひ前進し午前八時頃羊草勾北方高地より標高百餘の高地を經て孫家屯北方高地の東側に亘る線を占領す此時敵の砲兵は太平嶺、過汗溝、鄭家溝附近の高地より盛んに我に向て射擊す我砲兵は地形困難の爲め未だ充分之に應戰し得べき陣地に進入すること能はざりき爰に於て步兵は掩護して陣地を占領し暫く時機を待つに至れり

軍の中央團隊は左翼諸團隊の攻擊進捗に伴ひ花兒山附近に砲兵の援助を受けつゝ前進し午前十時頃孫家屯北方高地を占領せしも青石山望馬臺間に在る多數の敵砲より猛射を受くるを以て之より前進を繼續せず以て右翼團隊の前進及び我砲兵の近接を待つに至れり

軍の左翼團隊は初め五臺山附近の陣頭にありしが其右方に併列せる諸團隊の攻擊進捗を見るや午前九時第一線を以て牛家屯、劉白塔等の線を占領し其砲兵團は太平嶺附近に陣地を占め盛んに望馬臺附近の敵砲兵と射擊を交換せり

敵の本陣地は右翼牛心山青附近より石山を經て太平嶺附近一帶の高地に亘り連綿せる高地に數多の防禦地區を形成し其高地は全く我が攻擊地帶を瞰制し廣濶遼大なる射界を有し數層の散兵壕には銃眼を穿ち掩蓋を作り且つ所所鹿柴、鐵條網、地雷を設け野戰的防禦工事殆んど完成せり殊に其砲兵は巧みに地形を利用し遮蔽陣地を占め我をして殆んど其位置を判斷するに苦ましむ之に對し我砲兵陣地は到る所不利にして敵眼に暴露し然かも其進入は極めて困難なり然れども各方面の我砲兵は艱難を冒して屢々陣地を變換し以て步兵の攻擊を掩助するに力めたるも地形斯の如くなるを以て我砲兵は非常なる苦戰に陷り死力を盡して奮戰するも其効力不充分にして敵砲を沈默せしむるに至らず軍司令官は飽まで攻擊を遂行せんとし右翼團隊に損害を顧みず突擊前進すべきを命ず團隊は猛烈なる敵の砲火を冒して前進せしも地形不利にして敵の本陣地の一部だも奪取するに至らずして日沒となれり殊に比隣團隊の一部の如きは非常の勇氣を以て一たび敵陣地に突入せしも其陣地頗る堅固にして然も優勢なる敵に逆襲せられ再び舊位置に引退するの止むを得ざるに至れり

狀況斯の如くにして彼我の砲擊は日暮と共に自然に中止せられたり但し敵の砲兵の一部は午後九時迄時々我に向ひ搜射せり左翼團隊の司令官は軍司令の意圖を實行する爲め遂に夜襲を行ふの決心を取れり

右翼隊の夜襲

軍司令官は此處置を是認せしめたるを以て右翼團隊の司令官は午後十時頃より其步兵の大部を擧げて斷然之を決行せり

該團隊の步兵は猛然として勇進し太平嶺附近の堅固なる敵陣地に突入し遂に其第一堡壘を奪取し多數の損害を蒙りたるに拘らず更に勇を鼓して第二堡壘に突進して之を占領せり時に二十五日午前三時なりき

右翼團隊に隣接せる諸團隊も亦之に續き山西頭附近の高地を占領す

翌天明と共に臥龍崗附近にある我砲兵は先づ當面の敵に向ひ砲擊を開始せり然るに敵情前日と

異なるを以て臥龍崗附近にありし團隊は直ちに前進して靑石山を占領す
左翼團隊は右の情況を知るや直ちに前進して牛心山、橋臺舗の線を占領せり
騎兵は軍の左側に在りて行動し騎砲兵を有する優勢なる敵騎に對して善く我が側背を掩護せり
敵の主力は大石橋街道より一部は其東方より海城方向に退却し其後尾は我が砲擊を受けつつ午前十一時過ぎ大石橋を通過せり軍は各縱隊の先頭部隊を以て之を追擊し次て大石橋及び其附近を占領せり
我に對せし敵は第一、第二、第九、第三十五師團及西比利亞豫備師團に屬する部隊にして其砲數は約百二十門なるが如し
捕虜將校の言に據れば滿洲軍總督クロハトキンも戰場に在り而てサハロフ中將コンドラウイッチ少將負傷せりと又諸情報を綜合すれば敵の死傷は少くも二千を下らず我死傷將校以下一千內外なり戰利品及び捕虜若干取調中なり
敵は我が追擊の爲め頗る狼狽を極めて退却せり
察するに敵は靑石山附近の陣地を堅固に占領し此處に決戰を爲さんと企てたるものゝ如し然るに夜半に至り俄に退却を決行したるの形跡あり其原因は我が右翼の强襲により彼の左翼守を失ひしが爲めなるが如し

●大石橋占領後報

其一

七月二十八日午前大本營着電

奥大將報告

廿六日敵は尙ほ虎樟屯附近に位置し其砲兵約二中隊は同地東方金山峇に現れ修家溝附近を砲擊せり軍は敵情偵察中なり

其二

七月二十八日午後大本營着電

奥大將報告

蓋平、海城街道上虎樟屯附近の敵は退却し二十七日溫家溝附近には約六中隊の敵騎、東楊樹溝附近には騎砲兵一中隊を有する騎兵部隊あるのみ又營口方面より退却したる敵兵は紅瓦寨附近に停止したるものゝ如し
軍より派遣せる營口守備隊は二十六日夜該地に到着し先きに同地を占領せる我が騎兵と交代し市內に入て警備に任ず

●驅逐隊攻擊

七月二十六日午前二時二十五分着電東鄕聯合艦隊司令長官の報告要領左の如し

海軍大尉桑嶋省三の指揮せる第十四艇隊并に特に同艇隊に附屬したる第十號第十一號の兩砲艦及び三笠富士の艦載水雷艇隊は二十四日午前三時頃鮮生角の東灣に潜伏せる敵の驅逐隊を攻擊し艦載水雷艇より連發したる魚形雷は確かに三個の爆發を認め又砲艦二隻は敵に近づきて之に猛烈なる砲火を加へたり其の結果は煙霧の爲め未だ明ならず我艦艇は一も損傷なし

（附言）本文中三個の爆發を確認せりとあるは蓋し昨今續々到着する芝罘電報中に沈沒せりと傳へらるゝ彼驅逐艦リウテナントブラコフ外二隻ならんか此リウテナント、ブラコフ號は北淸事件の際露國が淸國より奪取せるものに係り又先には露國の皇族某外數名の貴族將校を營口まで密送せりと傳へられたるものなり

●我艦危難を兇る

七月三十一日午後九時十五分大本營着電

東鄕聯合艦隊司令長官報告

海軍中佐席瀨順太郎の指揮せる掃海隊は去る二十六日午前十一時過ぎ龍王嶋附近に於て掃海中一砲艦は敵の水雷を拘束して之を除去せんとするとき掃海索推進器に搦みて進退の自由を失ひ潮流の爲め鮮生角の方向に流され敵の要塞及び砲艦等より猛烈なる射擊を受けたるを以て席瀨中佐は自ら他の砲艦を指揮し敵砲火の下に僚艦を救助曳行する際敵の驅逐艦急航し來りて水雷を發射せしも幸に命中せず苦戰約一時間の後漸く小平嶋の方向に退避するを得たり此戰鬪中敦

助砲艦は敵彈二個を受け卒三名戰死し唐瀬中佐、荷村少尉(?)外下士卒九名負傷せり

●敵驅逐艦の沈沒

七月三十一日午後九時二十分大本營着電

東郷聯合艦隊司令長官報告

其後の偵察に依れば去る二十四日夜鮮生角東滸に於て第十四艇隊砲艦及び艦載水雷艇等の協力邀擊したる敵の驅逐艦四隻の内一隻は煙突の上部を現はして沈沒し居り尙ほ一隻沈沒せるものあるが如し

●楡樹林及様子嶺の占領

八月二日午前大本營着電

黑木大將

軍は楡樹林子及び様子嶺附近を堅固に占領せる敵に對し三十一日拂曉より兩方面に向ひ攻擊運動を開始せり

楡樹林子方面の攻擊運動は同日黃昏前迄に豫定の如く進捗し敵の兩翼を擊破したるも敵の兵伍強大にして此陣地堅固なりし爲め夜に至るも之れを擊攘するを得ず翌一日未明再び攻擊を開始し正午に至り漸く之を擊退して老鷄嶺(楡樹林子の西方約一里半)に至る迄之を追擊せり

様子嶺方面の攻擊も漸次成功し三十一日午後一時過より塔灣及びマクーメンザ方向より共に步兵の攻擊前進に移り黃昏前に於て其陣地の大部を奪取せしも敵の一部は最も頑强に抵抗し夜に入るも退却せず各攻擊團體は戰鬪隊形を以て夜を徹し八月一日未明再び攻擊を開始し午前八時様子嶺附近一帶の高地は全く我有に歸せり戰鬪の永く終結せざりしは左の諸件に基因せり

一、地形嶮峻にして攻擊動作に不便なりしと

二、良好の砲兵陣地なく爲めに我砲兵の威力を發揚し得ざりしこと

三、百度以上の炎天にして軍隊の勞苦著しかりしこと

我に對せし敵の様子嶺附近に在りしものは狙擊步兵約二師團半砲兵約四中隊にして湯河沿方向に退却せり又楡樹林子附近に在りしものは尠くも二個師團及び之に屬する砲兵にして其大部は安平方向に退却せり

彼我の死傷は猶取調中鹵獲野砲若干あるも未だ精確の報に接せず

●析木城附近の占領

八月二日午前大本營着電

析木城攻擊軍報

軍の前面にある敵は紅窰嶺北方高地より草三峪を經て三角山東方高地に亘り堅固なる防禦工事をなし紅窰南方高地には砲兵肩墻を見る又老達子附近には約三大隊の敵兵あり

軍は此敵に對し去る七月三十日主力を以て大房身西方高地より下八岔溝北方高地に亘る線を、左翼隊を以て賈家堡子の南方高地より英落山西南方高地に亘る線を占領せり

翌三十一日拂曉軍は主力を以て三角山東方高地の敵に向ひ左翼隊を以て東西楊樹溝北方高地の敵に向ひ攻擊を開始し左翼隊は午前八時頃東楊樹溝東北方標高三百四十五メートル以西一帶の敵陣地を攻略せり然るに二道溝方面にありて敵益々其兵力を増加し其砲兵は約二十一門に増加せしも我左翼隊は新に來着せる一枝隊と協力し猛烈なる砲戰の後之れを攻擊し午後三時の頃遂に之れを北方に擊退せり

軍の主力は午前十時三十分の頃大平嶺南方高地の敵陣地を攻略するを得たるも草三峪及び小房身東方高地にある敵砲兵より猛烈なる射擊を受け前進を繼續する能はず其後敵は漸次新鋭の兵力を増加し午後五時半頃に至り全線攻勢に轉じ來れり我步砲兵直に之を擊退し敵に多大の損害を與へしも敵砲の猛射の爲め追擊する能はず遂に近く相接して夜を徹せり

是れより先き我左翼隊は敵を擊退し其退路に迫りしを以て敵は夜暗を利用し逐次其陣地を撤し海城方面に退却せり敵は數ケ月を費して築造せる堅固なる防禦陣地に據り特に速射野砲を猛射し我砲兵を苦め大に攻擊に困難を感ぜしめたり

我軍の死傷約四百名にして敵は死體約百五十を戰場に殘して退却せり我に對せし敵は步兵約二師團砲兵約七中隊なるが如く而して中將アレキセイフ(步兵第五師團長)之れを統率せり鹵獲品野砲六門捕虜若干

此日炎熱酷しく正午室外華氏百二十度に昇る

●海城牛莊占領

八月四日大本營着電　奧大將報告

昨二日來敵は北方に退却を續行す軍は三日正午頃海城及び牛莊を占領せり

●遼陽側面の大捷續報

八月四日大本營着電　黑木大將報告

軍全面の敵は七月中旬以降漸次其兵力を增加し同下旬には四師團に逹し尙ほ陸續增加の模樣あり而して初め遼陽街道上に在りし敵の主力は漸次安平方向に移動し七月二十八日以來右縱隊(楡樹林子)の前面に於ては敵の動作活氣を帶び其數縱隊より成る前進部隊は同師團の前面及び左翼前二乃至三千米突に在る高地脈を占領し將に攻勢を取らんとするの狀を示せり

軍は斷然攻擊を取り敵の準備未だ全からざるに先ちて之を擊攘し以て其企圖を挫折するに決せり此決心に基づき軍は急に七月三十日夜より運動を起し翌三十一日拂曉を期し右縱隊は楡樹林子方面の敵を左縱隊は樣子嶺附近の敵を攻擊し同縱隊より枝隊を派遣し楡樹林子方面の敵の左側背に迫り以て右縱隊を援助せしむ

楡樹林子及び樣子嶺附近一帶の地形は嶮山と深谷とを以て相錯綜し攻擊運動頗る困難なり敵は巧に地形を利用し處々に强斷面の堡壘を設け且つ主要の地點には閉塞堡を築き以て全く隱蔽して我を射擊し得る如く陣地を構成し堅固に之を占領せり

戰況左の如し

一、楡樹林子方面

右縱隊は步兵約三大隊を老母嶺附近に配置して本溪湖方面を警戒せしめ其他は更に二縱隊となり前進し其右翼隊は三十一日拂曉より敵の本陣地(楡樹林子西方高地線)の前方約二千米突の高地に在り前進部隊を前面及び側面より攻擊し激烈なる步砲火を交へたる後午前八時五十分之を占領し爾後敵の本陣地に對して戰鬪を持續し以て左翼隊の進出を待てり此間敵は數回逆襲し來りしも悉く之を擊退したり

左翼隊は偏嶺(張家堡子西南約二里)に於て敵の步兵約二聯隊に出合し午前六時三十五分之に向ひて砲火を開始し激戰の後之を擊退せり左縱隊より增援せし一枝隊は午前一時下馬塘を發して偏嶺に向ひ午前八時過ぎよりテヨウバイレイ(偏嶺の南二千米突)を占領せる敵の步兵約一大隊を擊退し之を追擊して偏嶺方向に向ひ恰も偏嶺方面より退却中なる敵の大縱隊(步兵三聯隊、砲四門)の側面に進出し同縱隊の殆ど先頭より後尾に至る迄其通過間二百乃至千米突の距離より猛烈なる射擊を加へて大損害を與へ全く之を潰走せしめたり爾後該枝隊は楡樹林子附近敵陣地の右翼に前進せんとせしも地形嶮難の爲め未だ其目的を逹するに至らずして夜を徹せり八月一日拂曉楡樹林子の敵退却を始む右翼隊は直に前進をなして之を追擊し午前九時四十分ラゴウリンを占領せり右翼隊は敵の步砲兵の退却中に在るを目擊せしも地形に妨げられて之に薄るを得ず右翼隊と平行してラゴウリン南方の地區を占領せり

增援枝隊は一日朝リーヒユ南方高地の敵を擊破し之を追擊して午後一時リーヒユ西方高地を占領せり

二、樣子嶺方面

塔灣方面より樣子嶺に向つて攻擊すべく左縱隊は其一部を以て三十一日午前三時半頃塔灣東方高地に在りし敵の步兵約二中隊を擊退して同高地を占領し其他は豫定の地位を占領せり獨り砲

兵團は進入路の構築豫定の如く進捗せず且つ地形峻嶮にして臂力を以て陣地に進入するの外途なく午前十一時頃に至り辛うじて陣地に就くを得たり但し其二中隊は拂曉前金家嶺子附近に陣地を占領せり

左縱隊の左翼隊は其主力を以て三十一日拂曉馬溝門方面より攻擊を開始し其分遣團體は遠く敵の右側背に迂廻する爲め嶮難の山地を數縱隊となりて前進せり

敵は樣子嶺の鞍部及び其附近の高地に砲兵約四中隊を現はして巧に我砲兵を射擊せり其一砲臺(約四門)は午前八時過ぎ我砲兵團の射擊に依り全く沈默せしめらる然れども塔灣北方の高地の凹角に在るものは能く塔灣の高地を射擊せり左翼隊に屬する砲兵隊は僅に二十門を使用し得るに過ぎざるのみならず距離過遠にして十分其威力を發揚する能はず之が爲め我正面攻擊は正午に至るも更に進捗せず迂廻隊は非常なる困難を冒して山谷を跋涉し午前十一時頃サウジヤブーず四方約三千米突の高地線に達するを得たり午後二時過ぎより右翼隊に屬する砲兵隊は塔灣及び其北方地區に對して掃射を行ひ步兵の一部は偵察の爲め前進せり此結果塔灣西北方約三千米突の高地線上に潜みたる敵砲は忽ち我砲兵に向つて猛射を始め爾後兩翼隊の方面共再び激烈なる砲戰を開始せり午後四時過ぎ右翼隊の步兵は塔灣附近より左翼隊の步兵は馬溝門子附近より敵の步砲火を冒して攻擊前進に移り漸次樣子嶺に向へり彼我の小銃火戰は各方面に起り我砲兵は全力を盡して步兵の前進を援助せしも急峻なる斜面は著しく步兵の運動を困難ならしめ且つ敵は最も頑堅に抗戰し遂に日暮に至るも未だ全く敵線を奪取するを得ず之が爲め各隊は戰鬪隊形を以て夜を徹するの已むを得ざるに至れり

一日拂曉より左右兩翼隊は再び攻擊を開始し午前七時より八時の間に於て樣子嶺附近一帶の高地漸く我有に歸せり敵の死傷は詳ならざるも各方面を合して少なくも二千以上なるべし我死傷は將校以下九百名なり尙ほ詳細は取調中

敵の兵力は楡樹林子方面に在りては第十軍團長スルチエウスキーの指揮する戰列步兵第九師團の一旅團及び第三十一、第三十五師團の主力砲兵約四中隊、樣子嶺方面に在りては西伯利第二軍團長ケルレルの指揮する狙擊第三第六師團の全部戰列步兵第九師團の一旅團及び砲兵約四中隊なるが如し我兩役は捕虜將校以下三四十野砲二門其他小銃及び被服類多數なり

三十一日午後敵の患者輸送者は赤十字旗を翳し右縱隊に增援せる枝隊の正面に來り其遺棄したる傷者收容に着手せり由りて我は射擊を止め特に之を許せり戰鬪の兩日共百度以上の炎熱加ふるに地形嶮難なりしを以て各軍隊の運動殊に困難を極めたり

●戰利品及び捕虜

八月四日午前大本營着電　　第一軍司令部

樣子嶺及び楡樹林子附近に於ける戰利品左の如し

砲二門、小銃五六百、天幕三四百、携帶器具六七百、其他砲銃彈等多數

又捕虜の數は將校八(內中佐一)下士以下百四十九なり

我死傷數左の通り訂正す

將校四十、下士以下九百〇六

●海城及び牛莊方面占領詳報

八月四日大本營着電　　奥大將報告

八月一日午前四時第軍は大石橋附近の陣地線を發して前進す第二縱隊は敵の抵抗を受くることなく午前九時頃南尖山附近の陣地を占領し第一縱隊は午後一時當面の敵を攻擊して梁家堡子附近の高地を占領せり第三縱隊は午前五時金山嶺附近の高地を占領し前日來敵の占領せる士窰子東方高地に向ひ砲兵を以て偵察戰を試みしに敵は退却せるもの丶如し依りて直ちに前進し午前九時

午頃他山浦西北高地附近を占領せり 此時敵の砲兵約二中隊蔚薦峪東北の高地に現はれ 第二縱隊及び第三縱隊の歩兵に向ひ熾んに射撃す 暫くして第二縱隊の砲兵は 蔡家溝家東北高地に第三縱隊の砲兵は温家溝附近に側列を布き之に應戰す午前十一時三十分別に敵の砲兵一中隊下夾河南端に現はれ我第三縱隊の歩兵に 向ひ射撃せしが孰れも正午過ぎ陣地を撤し 海城方向に退却せり

第四縱隊は途中少數の敵の 歩騎兵を驅逐して午前十時頃第三縱隊の右翼より 趙家屯に亘る線に達せり 其前面には騎砲兵約一中隊を有する敵の騎兵五六中隊紅瓦寨附近に在りて 我歩兵向ひて若干の射撃を爲せしが 正午頃海城方向に退却せり

第五縱隊は劉家條子、 速三屯に在る 敵の歩騎兵を撃退して該地を占領せり

我に對せし敵の兵力は總計約一師團にして 其主力は午前十時前後に於て 唐王山西麓を經て 海城方向に退却せり

軍は此の如く大なる敵の 抵抗を受くることなく二日入里河の線に前進し 翌三日正午頃海城より牛莊に亘る線を占領せり

此日海城より 東北に向ひ退却せし敵は約二師團なりき

●驅逐艦の壓迫猛撃

八月六日午後十時十分大本營着電

東郷聯合隊艦隊司令長官報告

咋五日午後四時頃驅逐艦曙（艦長海軍少佐九津見雅雄）朧（艦長海軍少佐 竹村伴吾）の二隻は敵情偵察の爲め旅順口港外に至りしに敵の驅逐艦十四隻急に我に向て 突進し來り彈着距離に入る頃其四隻は 南西に七隻は正南に他の三隻は鮮生角の方向に針路を取り 我を包圍せんとするものゝ如く 我が二艦は午後四時四十分約五千米突の距離より 敵と猛烈なる砲火を交換しつゝ針路を北東に取り 鮮生角の方向に進みたる敵驅逐艦三隻の前面に出て之を壓迫猛撃したるに敵は直ちに艦首を轉じて 港口に遁走す依て之を追撃し午後五時過に至れり 此時我驅逐艦雷（艦長海軍少佐篠原利七） も亦た來り合して三艦の一隊を爲し更に南方に分轉せる 敵の驅逐艦十一隻に近づき迫りしが之亦た港口に向ひたるを以て 戰鬪を止めたり 我が三艦には一の損傷なし敵の驅逐艦は午後六時頃悉く 港内に入れり敵の損害に至りては明かならずと雖も 我が三艦が敵の十四艦を壓迫攻撃して 其活動の目的を達せしめざりし勇猛の動作は全軍の歎美して措かざる所なり

●敵砲艦破壞公報

八月六日午後大本營着電

第二軍報告

敵艦シウチは武裝を爲したる 儘牛莊西北八家子附近の遼河に於て自ら破壞したり

●至仁の聖意を傳へさせらる

參謀總長侯爵山縣有朋は勅を奉じて 左の訓令を滿州軍總司令官に與へたり

大元帥陛下は至仁の聖意を以て 旅順口要塞內に在る非戰員をして成る可く 鐵火の慘害を免れしめんことを望ませ給ふ

右の聖意に對し貴官は旅順口要塞內に 在る婦人、小兒、僧侶、 中立國の外交官、 觀戰將校にして避難を希望する者を營泥窪に護送し 該地碇泊司令官に引渡す可し

作戰に影響する虞なしと認むるときは 旅順口要塞內に在る前項以外の非戰員をも同じく 避難せしむることを得

●旅順大海戰公報
敵艦隊の大損害

八月十二日午前九時十分着電

東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は一昨十日 敵艦隊の旅順口を脫出して南下せんとするを遇岩附近 に邀撃し次て之を東方に追撃し午後一時より 日沒過ぎまで激戰し敵に多大の損害を與へたり 此戰鬪の後期に於て敵の砲火は大に衰へ 陣形は全く潰亂して各艦個々

に分裂しアスコリツド、ノーウキツクは驅逐艦數隻は南方に遁航し其他の諸艦は各自旅順口に向ひ我驅逐隊水雷艇隊に追尾襲擊せられ更に少なからざる損害を受けたるもの丶如くツエサレウキツチは其救命浮標及び屬具等の戰場に浮流せるに徵すれば或は轟沈されたるならん驅逐隊水雷艇隊襲擊の結果に就ては未だ詳細の報告に接せず右アスコリツド、ノーウキツク、ツエサレウキツチ、ペルラダの外は昨朝旅順口に遁入したるが如し我艦隊の諸艦には大なる損害なく今後の戰鬪に支障なし死傷は全隊を通じて將校以下約百七十なり

●敵艦の損害公報

八月十二日午後大本營着電

東鄕聯合司令長官報告

一昨十日の戰鬪にて敵の戰艦六隻の內五隻は非常なる損害を被れるものと認むポビエダの如きは檣二本共折れ巨砲は發射せざるに至れり旗艦レトウイザンは三千五百米突の距離にて我集彈を被り其損害最も大なりと認む敵巡洋艦の被害は比較的大ならず但しパーヤンは出て來らざりし

我損傷は既に應急修理を了れり

●日本海の大海戰公報

八月十五日午前五時三十五分着

上村第二艦隊司令長官報告要領

十四日天明出雲（艦長海軍大佐伊地知季珍）吾妻（艦長海軍大佐藤井較一）常磐（艦長海軍大佐吉松茂太郎）磐手（艦長海軍大佐武富邦鼎）は韓國蔚山沖に於て索敵行動中浦鹽艦隊三隻の南航せるを發見せり敵は我隊を見るや北に向ひ逃走せんとするを以て直に其前途を扼し午前五時二十三分に至り戰鬪を開始せり

敵の殿艦リユーリツクは常に後れ勝にて絕えず激烈なる砲火を被れり前續二艦は屢々勇敢に之を掩護し遠ざかれば轉回して之に近づき近けば又前進せり依て我隊は屢々丁字形を畫きて敵に集彈するの利を得たり其結果敵艦をして何れも數次大火災を起し多大の損害を負はしめたり特にリユーリツクの如きは遂に進退の自由を失ひ砲力を全滅に近づき時々緩慢なる發射を爲すのみにして其艦尾は著しく沈み且つ少しく左舷に傾斜するを見たりしが敵は遂に之を捨て丶遁走せり恰も好し第四艦隊戰場に近づき浪速（艦長海軍大佐和田賢助）高千穗（艦長海軍大佐毛利一兵衞）のリユーリツク攻擊に進むを見たるを以て本隊はロシヤグロモボイを追擊せり此激戰約五時間に及び敵の二艦は全速力を以て逸走す

午前十時十九分我戰隊は右舷に回頭しリユーリツク搜索の爲めに南航せるにリユーリツクは遂に沈沒せるの報に接せるを以て直に全隊の集合を命じ其沈沒位置に至り浮泳する人員六百名を救助し得たり

我艦隊は多少の損害を受けたるも何れも重大ならず士氣極めて旺盛なり

今回の戰鬪に於て重大ならざる損害を以て多少の効果を收め得たるは偏に大元帥陛下の御稜威に因るものにして一同感激に堪へざる所なり

「備考」司令長官海軍中將上村彥之丞は出雲に司令官海軍少將三須宗太郎は磐手に座乘せり又第四戰隊司令官は海軍中將瓜生外吉なり

●敵驅逐艦捕獲始末

八月十五日午後二時五十分大本營着電

東郷聯合艦隊司令長官報告

芝罘に遁れたる敵驅逐艦レシテルヌイの捕獲に關し藤本第一驅逐隊司令の報告左の如し

同官は朝潮、霞の二艦を率ゐ敵艦隊を搜索巡行中十日夜敵艦の西行するを認め之を追擊したるも遂に其蹤跡を失せり翌十一日搜索の結果敵艦の芝罘に遁走せるを知り附近領海外にありて其出港を監視し居りたるも遂に出て來らざるを以て同夜同港に入り偵察を遂げたるに敵艦はレシテルヌイにして武裝を解きたるの事實なく且つ乘員は皆乘組み居るのみならず同港に於て石炭

を搭載せしとを確め翌十二日午前三時朝潮の寺島中尉に下士卒十名を附して敵艦に赴かしめ敵艦長に告れは彼れを追蹤し來り監視し居たるに昨日午前四時入港の儀今に至るも出港せざるを以て今より一時間以内に出港するか又は降伏せざれば我意の如く處分すべしと告げしめたるに彼れ種々の口實を設けて從はざるのみならず我將士に對し腕力を以て暴行を加へ皆海中に飛び入り其際艦の前部を自から爆發し去れり依て直ちに之を捕獲し午前五時十五分之を曳きて出港せり捕獲艦と共に捕虜一名伴ひ歸る

●敵巡洋艦の擊沈

東鄕聯合艦隊司令長官の最近報告に依れば敵艦パルラダ型艦一隻は去る十日夜我水雷攻擊の爲め擊沈せること確實なるもの丶如し

●聖旨幷に勸降書を贈る

八月十七日午前大本營着　攻圍軍司令官

十六日朝參謀山岡少佐を軍使として敵の前哨に差遣はし陛下の聖旨幷に勸降書を敵の要塞參謀に手渡しせしめたり十七日朝十時敵より回答ある筈なり

●彼我砲艦の戰鬪

八月十八日午前十一時十分大本營着電　東鄕聯合艦隊司令長官報告

去る十一日小平嶋附近を警戒せる摩耶赤城の二砲艦は午前十時頃敵の砲艦ギリヤーク及びオトヴズヌイの二隻鮮生角附近に出て來て我陸軍の占領地區を砲擊するを認め直に進みて龍王塘に至り之を砲擊せしに赤城の一彈ギリヤークに命中し敵は直に旅順方面に退却せり此時娘娘廟附近の敵よりも頻りに我二艦を砲擊せしが一も損傷を受ざりし又鳥海以下の砲艦隊は驅逐隊と共に同日朝來前日の海戰より敗走し來る敵艦の旅順に入るを追蹤して敵狀偵察に努め其迅速確實なる報告は我艦隊の行動に尠なからざる利益を與へたり

●バルラーダ型水雷命中確認

八月十八日午前十一時四十分大本營着電　東鄕聯合艦隊司令長官報告

去る十日夜我第五驅逐隊の敵艦攻擊に當り曉雲（艦長海軍中佐松岡修藏）はパルラーダ型一巡洋艦に對し四百米突に近づき確かに其水雷の命中したるを認めたりと云ふ

●敵軍の避難勸降拒絕

八月十七日午後大本營着電　攻圍軍司令長官報告

今朝敵の軍使來り昨日の回答を齎せり聖旨に出づる非戰員の避難は之を拒絕せり本職より送たる勸降に對しても亦同じ

●我軍使の齎せる條件

八月十八日大本營着電　攻圍軍司令官

（非戰鬪員避難方法）

我軍使より敵の要塞參謀長に書面を交付せしは十六日午前十時三十分水師營北方五百米突の地點にして我より指定せし條件左の如し

一、我大元帥陛下の至仁なる聖旨に基き避難し得べきものは婦人、小兒（十六歲以下）僧侶、中立國の外交官及び觀戰將校

二、此に對する回答は八月十七日午前十時水師營北方五百米突の地點に齎らすべきこと

三、避難者は白旗を舉げて前進し同十七日午後二時前と同一地點に來るべきこと

四、我步兵の一隊は白旗を舉げて同一地點に至り避難者の來るを待ち之を受取ること

五、避難者は各自一個の荷物を携帶するを許す但し必要あれば其內容を檢查することあるべし

六、圖書印刷物書翰其他文字記號を以て記せる書類及び戰爭に關係ある物件を携ふ事を許さず

七、避難者は十分の保護を與へ靑泥窪に護送せしむ

八、回答には諾否の一を選ぶべく條件の改訂を許さず

●レシテリヌイ捕獲事件

日露戰爭に於ける清國の地位は全然異例に屬す各般の戰鬪行爲は殆んど擧げて清國の境域内に行はれつゝあり清國は戰爭の當事者に非ざるも其境土の一部は交戰地にして一部は中立地たり此種の事態たる國際法上より云へば一の變態にして理に於て矛盾せるものなるも現下の場合に於ては全く兩交戰國が同意を與へたる一の特別協定に依り創造せられたるものなりとす帝國政府は清國の外國通商并に一般靜謐の爲め交戰區域を局限するの趣意を以て露國に於ても同樣の約束を爲し且之を誠實に履行するに於ては現に戰爭に關係ある地方以外に於て清國の中立を尊重せんことを約束せり帝國政府は以爲らく右の約束は帝國をして自ら戰場たる地域以外の清國の土地又は港灣を占領し若くは之を何等戰爭上の目的に使用するを得ざらしむるものなり何となれば帝國にして一たび其擧に出んか帝國の占領し若しくは使用したる地點は當然中立地より交戰地に化すべきを以てなり之と均しく露軍にして中立なる清國の土地又は港灣を占領し若しくは戰爭の目的に使用するに於ては露國政府約束の附帶條件は爲めに其の効果を生じ帝國をして右の土地又は港灣を以て交戰地と見做さしむるを得べしと之を概するに帝國政府の所見を以てすれば清國の中立は完全なるものにあらずして單に交戰國孰れかの兵力により占領せられざる地點に適用せらるゝに過ぎず隨て露國は合意により條件付中立せられたる清國の領域内に其の陸軍又は海軍を移動し以て敗戰の禍害を免るゝを得ざるなり今夫れレシテリヌイは旅順を逃出し芝罘港内に於て其の既に自國の港灣に於て得べからざる避難所を求め以て我攻擊を免れんとしたるものなり是れ即ち交戰國双方の合意に依り定められたる清國の中立を破りたるものにして帝國が芝罘港を以て此の事件の關する限り交戰地と看做したるは固より其の所なりとす而して此の事件の終結と共に芝罘の中立は更に復活したるものなり夫れ然り芝罘に於て日本の採りたる措置は露國が其約束を無視したるより生ぜる直接且つ當然の結果なりとす然りと雖も露國が清國の中立に對し重大の傷害を加へ以て自家の約言を無視したるは單に此事件に於てのみに非らず又芝罘のみに限らざるなり旅順の包圍に陷りて孤立するや幾何もなく露國は同地の要塞と芝罘に於ける自國領事館との間に無線電信を開始し而して此通信機關は帝國政府累次の抗議にも拘はらす依然運用を存續し居れり又上海に於ては開戰の當初露國砲艦マンヂュールは清國の中立を無視して清國官憲より出港の豫告を受けたる後數週の久しき港内に碇泊し曠日彌久幾回かの談判を重ねたる後漸やく其武裝解除を承諾したり今又巡洋艦アスコリッド及び驅逐艦クロゾヴォイは上海に碇泊する事既に週日を超へ然かも依然として出港又は武裝解除を肯ぜざるにあらずや

清國中立國は露國に於て之れを尊重する限り帝國政府に於ても是れを無視するの意更に之れなしと雖も露國軍艦が露國に與へたる約束を破り清國の中立を侵害し清國の港灣に避難して以て捕獲又は破壞を免かるゝを得べしとは帝國政府の容諾し能はざる所なりレシテリヌイ艦長は芝罘到着後該艦の武裝を解きたりと言へり然れども是れ事實に反す本月十二日の拂曉寺嶋中尉が該艦に臨みたるとき該艦は十分に武裝し且つ全兵員を搭載し居りたるなり且つ夫れ武裝解除は未だ以て清國中立規則の所要に應ずるに足らず況んや出港に代ふるに武裝解除を以てし得べきや否やを決すべきものは清國にして露國に非ざるをや世上動もすれば今回の事件を以てフロリダ號事件と同視するものあり然れども帝國政府は兩者の間截然たる區別の存するあるを見るフロリダ事件に於ては伯剌西爾國の中立は完全

且つ無條件にしてペシャ港は戰場より遠く相隔たれり然るに今回の場合に於ては清國の中立は不完全にして條件付なるのみならず芝罘港は戰場と近く指呼の間に在りレシテリヌスは先づ自ら手を下して抗敵行爲を開始し其結果捕獲せられたるものなることは芝罘事件に關與したる日露兩國士官の報告の共に一致する所なり此事實たる帝國政府の見る所を以てするに捕獲の合法なるや否に關し他に疑を容るべき餘地ありし場合に於て露國の或は有したるべき異議の根據をして消滅せしむるものなりとす此點に於て今回の事件は米國捕獲私艦セネラル、アームストロング號事件及び英船アンヌ號事件と酷似すと云ふべし

抑々レシテリヌイ事件は其自身に於て細事に過ぎずと雖も主義の繋るところは極めて重大に屬す清國が自家の中立規則を勵行するに適當の措置を採る事なかるべきは實驗の示す所たり是等の事情に於てレシテリヌイ號にして芝罘を以て避難港と爲すを得べしとせば露國海軍の巨艦も亦是が跡に倣ふ可く而して何者か能く此等の軍艦が日本を攻撃せんが爲め復た脱出するを防遏し得んや這般の事變に對し豫防の措置を講ずるの必要は至大にして固よりレシテリヌイをして之が備を作らしむるを允さざるなり是れを要するに今回の事件たる毫も清國の外國貿易を阻礙し又は該國に於ける一般の事態を攪亂するものにあらず其結果は偶々以て露國に示すに將來自家の約束を遵守せざる可からざるを以てするに効あるべきなり

●ノーウキツク擊破詳報

八月二十二日午後七時廿五分大本營着電

高木千歳艦長報告

二十日未明千歳は禮文島の北西二十浬に達し宗谷海峡の中央に進みしも敵を見ず且つ天候不良にして展望充分ならざるを以て八時二十四分宗谷岬に近寄り位置を確めんとする際禮文島の西方六十浬より索敵しながら來航せる對馬に會し千歳は直ちに宗谷岬とソレトコ岬との一線上に進みて監視の任に當り對馬をして十時三十分よりコルサコフ方面を索敵せしめしに同艦は午後四時三十分コルサコフ港外に於て敵艦ノーウキックを發見砲擊し多大の損害を與へたるに敵は五時四十分錨地に引返して盛んに白煙を上げ其艦影を掩ふに至れるを見たりと云ふ此時對馬は敵彈の爲め六番八番炭庫に浸水あり艦の傾斜漸く大ならんとせるを以て一時彈着外に出て應急修理に着手せり千歳は對馬の電信に接し直に戰場に向ひしも日沒に至りしを以て引返し同夜對馬をして海峡を監視せしめ千歳は港外を警戒せり

二十一日未明千歳はコルサコフ錨地に進みノーウキツクの既に市街陸岸に近く淺瀨に乘上げ乘員の退去しつゝある如きを認め六時二十五分より七時十四分迄之を砲擊し彼の船體は一時全く黑煙に包まれ我照準を困難ならしむるに至れり二千五百米突迄近づき檢する所に依れば敵艦は右舷に傾斜し其上方に當れる左舷側に於てすら最下甲板後部舷窓は水中に沒し船體の水面に現はれたる部分は甚しく破壊されあるを認めたり

對馬の應急修理は既に成り戰闘航海に差支なく其他兩艦共損害死傷なし

早稻田大學學生募集

●專門部（●政治經濟科 ●法律科）各一年二年級

●高等師範部（●國語漢文科 ●歷史地理科 ●法制經濟科 ●英語科）各一年級

●高等豫科（●政治經濟學科 ●法學科 ●文學科 ●商科）大學部の豫備門 修業年限一年半 第二期

來る九月七日 入學並に編入試驗を執行す ●志願者前日迄に手續を爲すべし ●徵兵猶豫敎員免許判檢事受驗資格等の特典從前に同じ ●詳細規則にあり入用の向は郵劵三錢封入申込べし

●校外生 來九月新に改正を加へ政治經濟法律行政文學敎育歷史地理等諸科講義錄を發行す

●來九月より聽講生の制を設く

明治三十七年八月

東京牛込

早稻田大學

投稿規定

毎月十八日を以て編輯總締切日と致し候に就き何卒それまでに着する樣願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き樣被成下度候宛名は

東京市本郷區駒込西片町拾番地**反省社**

書籍の取次

愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて**書籍の取次**を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京・駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵劵代用の場合は必ず壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂

神田裏神保町　上田屋

本鄕四丁目　文明堂

明治三十七年八月三十一日印刷

明治三十七年九月一日發行

發行兼編輯人　武田福松

印刷人　清水金右衛門

發行所（電話下谷九一九）　東京市本鄕區駒込西片町十番地　反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工塲

渡邊國武題首、黒岩涙香賛論、佐々木行綱題
三宅克己、齋藤松洲畫、華山茅原鹿太郎著

動中靜觀

定價四十錢
郵稅六錢
（郵劵代用一割增）

西園寺陶庵侯嘗て曰く『文は蘇老泉の如く詩は溫飛卿の如し』と無邊俠禪曰く『山淺間 物產 生絲湖水 諏訪 文章 華山 武官福嶋』と黒岩氏曰く『趣味の博きと時人及ふもの少し』と以て本書の價値を知るべし

本郷區本郷一丁目
東亞堂書店

海軍軍令部附譯官高須五湖先生著

速成 日露會話獨習

總クロス金字入美裝ポケット形
定價金五十錢 郵稅六錢

露話に精通せらるゝ高須先生が多年の研鑽に依り獨力露語を練習應用するの便を開かれたり、露語の發音文法より軍國に必要なる各種の用語を網羅し當世會話の粹を萃む、眞に刻下の好著亦永代の名作と稱すべし、軍人學生諸君は勿論時局に注意する實業家は速に一本を座右に備へて他日に悔を殘されざらんとを

東京日本橋區箔屋町
前川文榮閣

中央公論　毎月一回一日發行　明治三十年一月十九日第三種郵便物認可
明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

帝國文學

●●●●●毎月一回十日發行●●●●●

●第拾卷第八號　八月十日發行

●定價　一冊十二錢六冊六十六錢十二冊一圓廿錢郵稅每冊一錢

發行所　東京市本鄕區西片町十番地　反省社（電話下谷九一九）

東京市京橋區銀座一丁目貳十貳番地
發行所　大日本圖書株式會社
◉大賣捌所　東京神田表神保町　東京堂◉

No. 186.